
僕達の異世界生活

真島 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の異世界生活

【Nコード】

N3589S

【作者名】

真島 真

【あらすじ】

僕、櫻井 董さくらのいは『かわいい』とよく言われる高校二年生（男）だ。ある日、車に撥ねられ川に落ち、気が付いたら異世界にいた。・・・この話は主人公が周りを巻き込みながら生活する物語。ほのぼのを目指します。

にのした ひふみ

一 一二三ふざけた名前だと自分も思う。

だが、今の状況の方がふざけているだろう。

召喚。自分はそんな柄じゃない、確かにそばに『最強』とか『最恐』
がいたが

……この物語は主人公が面倒なことを頑張って避けようとする物語。

第1話『まずは、よくあるプロローグ』（前書き）

私は、小説を書くのは初めてです。

拙い文章ですが読んでくれたら幸いです。

第1話『まずは、よくあるプロローグ』

第1話『まずは、よくあるプロローグ』

僕、櫻井 董（さくらい かおる）は夕日の中歩いている、高校からの帰り道だ。

「かおるちゃーん！！」

後ろから駆ける足音とともに、呼びかけられる。

「ちゃんいうなっ、僕は男だっ！！」

言いながら振り返る。呼びかけてきたのは、杉崎 優奈（すぎざき ゆうな）僕の幼馴染だ。
小さいころからいつも振り回されている。

突然だが、僕には、悩みがある。

「だって、かおるちゃんかわいいんだもんつつつ！！！！！！」
「かわいいとかゆうなっ！！」

そう、『かわいい』と言われることだ。学校で告白された回数は数知れず―（ちなみに、男女比は7：3、男7割、女3割だ）、友達と待ち合わせしていたらナンパに会い、街を歩けば、結構な確率でスカウトされる。

「なんでこんなにかわいいの？」

そう言つて、僕を見下ろしながら―（優奈は167cm、僕は154cm、ううつ低い、、、）
頭を撫でようとしてくる。その手を避けながら、

「しるかっ！！」

と叫び、睨み上げる。

「そんな顔してもかわいいだけだよぉ〜?」
「うう〜」

頂垂れた頬を、ぷにぷにされる。

「ねえ、明日ヒマ?」
「ん?ヒマだけど?」
「買い物行こっ!」
「家の工場の(こうば)の手伝いが・・・」
「さっきヒマって言った!家に迎えに行くわよ、あさ10時」
「うう〜、分かったよう」

僕は、いつも優奈には逆らえない―(いや、ほとんどの人にもだが・
・・)

「じゃあ、私いくねっ!買い物して帰らないといけないから」
「え?うん、バイバイ」
「バイバ〜イ」

「約束だからね〜」と言いながら、走り去っていく。
明日、買い物かぁ何買っんだろ?

（まあ、いつか、家に帰ったらアレを完成させようっと！）

橋が見えた、家はもうすぐだ。

僕の家は工場だ、お父さんが社長をやっているー（と言っても、下請けの下請けのさらに下請けというようなとても小さな工場だ）その影響か、僕はメカ作り、モノ作り、が好きだ。僕の今持っているカバンも工具やその他諸々の道具で満載だ。

（コレをこうしてーっと）

色々考えていたからだろうか、気づくのが遅かった。

気づいた時には、車に撥ねられていた。手や足が有り得ないほうこくに曲がる。

吹っ飛び、手すりを越え、川に落ちて行く、

（ああ、コレ死ぬかも・・・）

そして、僕の意識は堕ちた。

第1話『まずは、よくあるプロローグ』（後書き）

初めてで、戦々恐々してますが、
ここまでお読みいただきありがとうございます。

第2話『とりあえず、状況確認』（前書き）

描くのがって難しいですね！！

才能がほしいのです！！

2話です！！

第2話『とりあえず、状況確認』

(・・・うつ)

意識が浮上する。

(・・・僕は・・・死ん・・・だのか・・・？)

手を動かしてみる。

「・・・はうつ!」

痛い・・・死んではない様だ。

(じゃ・・・、ここは病院か・・・)

目を開けてみる。光が視界を塗りつぶす。
暫くして目が慣れてくる。

（知らない天井か・・・）

（知らない・・・病院でない・・・？）

（こんな天井は見たことがない・・・）

（木目調の天井だ・・・いや・・・木の天井か・・・）

体のいたる所が痛いので。目だけで周りを見回す。
どうやら、僕はベッドに寝かされている様だ。
机と椅子がある。

（・・・っと、ずいぶん落ち着いてる様に見えるが・・・
頭の処理許容限界を、もうとっくに突破している。
まともに考えていないのだ・・・）

奥には・・・

人がいる、女性・・・女の子の様だ。

鍋の前に立っている、料理をしている様だ。

とりあえず、話しかけてみる。

「あのー、すみません」

「%\$‘*!!」

ビクウウツツ!!

字で書くと、こんな反応をした。
そして、

バタバタ、ドタンツ！バタンツ！

つと物凄い勢いで家一（部屋？）を出て行ってしまった。

暫くすると、玄関のドアをが開く音がした。

（・・・さっきの子が戻って来たのかな？）

音がした方を見る。

そこには、女の子ではなく、お爺さんがいた。
その後ろに、さっきの女の子がいる。

お爺さんが口を開く。

「# \$ % & 〇 ？」

それは、聞いたことの無い言語だった。

その言語は、それは英語のようであり、日本語のようでもあり、
フランス語のようであり、中国語のようであった。

聞いたことの無い言葉だったが、懐かしさを感じる・・・
そんな言語だった。

第2話『とりあえず、状況確認』（後書き）

話が進まない…

こんなものなのか？

第3話『まよったら、話しかけてみる』（前書き）

3話です読んでいただきありがとうございます。御座います。

第3話『まよったら、話しかけてみる』

「# \$ % & 。 ? 」

もう一度、お爺さんが語りかけてくる。

だが、やはり分からない・・・いや、知らない言語だ。

（どうしよう・・・あつ、自分寝たままだ！）

（この人が助けてくれたのかもしれないし・・・）

（寝たままは、失礼だよね！！）

そう思い、起きようと試みる。

「~~~~ッ！！」

声にならない悲鳴が出る。

お爺さんと女の子が慌ててベッドに自分を戻そうとする。

僕はそのままベッドに寝かされる。

お爺さんは困ったような顔をする。

女の子はオロオロしている。

(・・・うん・・・どうしよう?)

(どう考えても・・・日本語じゃないし・・・)

(でも・・・ありがとうぐらいだったら)

(外国の人も分かるよね?)

そう結論づけ、僕はお礼を言う事にした。

「あ、あのー助けていただきどうもありがとうございます」

僕の言葉を聞いたお爺さんの顔が、

一瞬で「困惑」から「驚愕」に変わった。

(え?僕、変なこと言った?)

(もしかして、お爺さんの言語では、「ありがとうございます」が禁句?)

(それとも、「どうも」が「死ね」って意味とか?)

(あっ!「あの」がだめとか?・・・)

(うゝ・・・放り出されるかも・・・)

(殺されるかも!?)

と、ネガティブスパイラルに陥っていると、

「君は、古代語が話せるのかね?」

「はっ、はい！ すいません！ 殺さないで下さい！ すいません！」
「ほっほっほ、殺さんよ、安心せい」
「すいまっ・・・あ」

（あれ？ いま、日本語だった？）

お爺さんはニコニコしている。

「もう一度聞こう、君は古代語が話せるのかね？」

（古代語って何？）

第3話『まよったら、話しかけてみる』（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

小説を書くのは、初めてな者なので、

皆さんのご指南、ご指摘頂きたいと思っております。

感想の所に書いていただけると幸いです。では

第4話『そうですか、異世界ですか』

「古代語・・・ですか？」

「そうじゃ」

「すいません、古代語って何ですか？」

「いま君が話している言葉のことじゃよ」

「・・・日本語・・・ではなく？」

「ほう・・・この言葉は二ホンゴと言うのか」

「そうです、日本という国で話されている言語です」

「・・・二ホンか・・・生憎そんな国はしらのう」

「・・・そうですか・・・あつ！ちゃんとお礼言ってませんでしたね、

どうもあり「いいんじゃないよ、そんなことは、それに礼を言う相手が間違っているわい」

そう言っつて、後ろにいる女の子に視線を向けるお爺さん。

僕も、女の子に目を向ける。（いままで、パニツクになっていたの
で、

ちゃんと見るのはこれが初めてだ。）

服装はゆったりとしたチュニック風のシャツみたいなのに、

膝ぐらいまでのパンツ。そこからスラリと伸びる手足、

くびれたお腹、大きくはないが形のいい胸、

大きな蒼い目、整った顔立ち、はつきり言おう物凄い美少女だ。

一つ大きな特徴を上げよう。茶色い髪（もちろんコレではない）

に犬耳。（犬じゃないかもしれないが）

そう、犬耳があることだ。

（かわいいな〜犬耳だ〜はじめてみた〜）

と、まあそう、ぼーっとしばらく見ていたら。

「＜疎通＞・・・ほらこれで話せるじゃろ」

お爺さんがそう言う。

「え？でも、僕この言葉以外分かりませんよ？」

「大丈夫ですよ」

「え？なに？なんて？だれ？」

「だから、言葉が通じますよ」

「・・・へ？」

「こ・と・ば・通じますよ」

「・・・うん・・・そうなんだ・・・え？・・・なんで？」

「今、ゼイスさんが疎通の魔法を掛けたでしょ？」

「魔法！？」

「そう」

「魔法って？」

「さっきゼイスさんが疎通って古代語で言ってたでしょ？」

（・・・ゼイスさんって誰？・・・あ〜お爺さんのことか・・・）

(・・・魔法・・・かぁ・・・さつきから薄々思ってたけど・・・)
(・・・ファンタジーだよ・・・地球じゃないよ・・・)
(・・・コレ・・・家・・・帰れるのかな？)
(優奈との約束・・・守れないかも・・・)

そう思うと、涙があふれてきた。

止めようとしても、どんどん溢れるばかり、

突然泣き出した僕に、慌てるゼイスさんと女の子。

「ど、どうしたんじゃっ!？」

「大丈夫ですかっ!?!どこか痛いんですかっ!？」

ゼイスさん治療の魔法をつ!!」

「ああ、分かった・・・<治療>」

(いや、もう大丈夫だよ・・・)

(それよりも・・・僕は・・・)

その後、僕はしばらく泣き続けた。

「ひぐっ・・・ひぐっ・・・うう・・・

う・・・だ、大丈夫です・・・もう・・・いいですから・・・」

「本当に・・・大丈夫なの？体は痛まない？」

「はい・・・もう、ほとんど痛みません」

「そう・・・やっぱりゼイスさんの魔法は凄いわね」

「・・・はい」

「ところで・・・聞きたいことがあるんだけど・・・」

「なんですか？」

僕のことを見つめ、聞くか聞くまいか迷っているように
モジモジする女の子。犬耳が時折ピクピク動く。

（動いてる・・・やっぱり、本物なんだ・・・）

（あ・・・そういえば名前聞いてなかった）

「あなた・・・」

「うん？」

「あなた・・・」

「なんでしよう？」

「・・・あなた・・・男なのっ！？女なのっ！？」

「男ですっ！！」

「嘘よっ！！」

「嘘じゃっ！！」

（おお・・・ゼイスさんも入ってきた）

こうして、僕の異世界での生活が始まった。

第5話『あれ？なにこれ？』（前書き）

犬耳女の子視点です。

やっとヒロインの名前が出てきた。

なに？この・・・解説回・・・

第5話『あれ？なにこれ？』

私は、フェリシア、ファミリーネームは無いです。

気が付いたところから、ゼイスさんの所でお世話になっています。

私には、犬耳があります、ゼイスさんによると、

この耳は、犬狼族の特徴だそうです、私は普通の人よりも嗅覚や聴覚が良いそうです。

ゼイスさんによると・・・この世界には、二つの大きな大陸があり、西の大陸と東の大陸に分かれていて、東の大陸には、

人間種、獣人種、妖精種、がいて、

人間種は、この大陸の中で一番数が多く、人間族、小人族、巨人族が、

主な種族にいて、肌や髪、瞳の色は、十人十色、ただ黒は居ないそうです。

獣人種は、大昔に魔獣と人間が交わって生まれた種族で、

魔獣というのは、魔物と違い、しっかりとした意思、

魔物とは比べ物にならない魔力を持っていて、とても知能が高く会話もし、上位種になると、

聖獣と呼ばれ、世界最強と言われる竜種に匹敵するほどの、知識と力を持つ者も居たそうです。

魔獣は400年程前の東西大陸の大戦争の時にほとんど死んでしまいい、

今は数えるほどしか居ないそうです。

獣人種は、初めは魔獣の血を色濃く継いでいて、見た目がほとんど魔獣と変わらず、

魔獣の力も強かったそうですが、今ではその血もほとんど薄れてしまい、

見た目としては、犬みたいな耳があったり、ネコみたいな耳があったりするだけで、

人間とほとんど変わらず、筋力や魔力も人間より少し多いだけにとどまるだけだそうです。

妖精種は、数が少なく、小さくて力持ち、加治や細工、建築などが得意なドワーフ族、

美人が多く大きな魔力を持ち、その強大な魔力から魔法が得意で、精霊魔法なども使いこなすエルフ族、その他小さな精霊や妖精たちが居るそうです。

また、ドワーフ族やエルフ族は長命で、軽く人間の十倍生きたりするそうです。

獣人種も長生きなそうですが、人間よりちょっと長生きするかなあ？

ぐらいだそうです。

次に、西の大陸には、魔族がいて、人間種、獣人種、妖精種はほとんど居ないそうです。

魔族は、この世界の人口の約四割を占めていて、能力の平均値がどの種族よりも高く、

紫色の肌、黒に近い髪色、でも真つ黒は居ないそうです。

また、東の大陸と西の大陸は長い間戦争をしてきて、

戦争自体は100年前に終わったものの、

人間種等と、魔族の間には、まだ深い禍根があるようです。

そして、最後に竜種は、西と東どちらにも住んでいて、

戦争の時には、どちらにもついていなくて、泥沼化した戦場の間に

入り、

戦闘を止めさせたりしていたそうです。

またその理由が「五月蠅いから」と、とんでもないことをする種族だそうです。

あれ？私、誰に何を解説してるの？

私、おかしくなった？

・・・気のせいよ・・・きつと気のせいよっ！！
いつもと違う匂いがするからよっ！！！！

・・・気を取り直して、日課の近くの川に洗濯に・・・
ではなく、料理やその他諸々に使うための水汲みに・・・

・・・あれ？なんか変な匂いがする・・・
いや、へんっていうか、嗅いだことの無い匂い・・・じゃない・・・
・・・けど・・・ちよつと嫌な感じがする・・・
・・・川の方？・・・何か・・・あるの？
・・・とりあえず・・・行ってみよう！！

いつも水汲みをしている場所についた。

・・・異常はない・・・ここにはただど・・・
・・・匂いの元は・・・もっと上の方が・・・

そしてしばらく上流に向かって歩いて、
それを見つけた。

それは、うつ伏せに倒れている。
黒ずくめの人型だった。

・・・黒い・・・黒い髪・・・魔族？
・・・匂いのもとは・・・これ？
・・・この匂い・・・血！？

どこか怪我してるの！？
こういうときは・・・

えと・・・まず・・・状態の確認！
・・・とりあえず仰向けにしなきゃ！！

・・・え？・・・人間？
・・・それに・・・女の子？

・・・それよりも

意識は・・・無いっ

呼吸は・・・弱いけどしてるっ

心臓は・・・動いてる、けどこれじゃ血が流れすぎで死んじゃう!!
骨も飛び出してる!!

とりあえず血を止めないと!!

あんまり使ったことないけど・・・
ダメもとで!!

「<治療>!!」

・・・ああ!! やっぱダメだ!!

ほとんど効いてない!!

・・・こうなったら・・・家に連れて帰る!!
ゼイスさんなら治せるはず!!

森の賢者 と呼ばれる、ゼイスさんなら!!

第5話『あれ？なにこれ？』（後書き）

ゼイスさんは賢者でした。

主人公は、もうすでに最強ジョブの一つの、
賢者を仲間にしました。

第6話『実は、前回は回想だったにして』（前書き）

すいません、遅くなりました。

もっと早く上げれるように頑張ります。

第6話『実は、前回は回想だったりして』

「・・・それで、その後なんだかんだったって今のあなたとの会話にいたるわけよ」

「・・・そうですか・・・いや・・・それよりも・・・」

「・・・それよりもあなたの名前は？」

「この・・・あ、僕のなまえは、櫻井 董と言います」

「サクライ・・・変わった名前ね」

「あ、カオルが名前です」

「じゃあ、カオルこれからよろしくね!!」

「よろしく願います・・・え?どういうことですか?」

「あなた・・・これから一緒に住むのよ!!」

「な!?!ちよつ!?!え?ここで?」

「そうよ」

「・・・この家で?」

「ええ」

「一緒に?」

「ゼイルさんもね」

「よかった・・・本当によかった!!」

歓喜のあまり、ベッドから飛び起きフェリシアさんの手を握る。

「ありがとございます!!ホントどうしようかと思ってたんです」

「・・・え、ええ、いいの・・・本当にあなたかわいいわね・・・
似合ってるわ」

(ん？かわいい？似合ってる？)
(・・・え・・・まさか・・・)

意識を下に向ける。

スースーする。

ゆっくりと視線を下に向ける。

服の裾がヒラヒラしている。

これは・・・どう見てもスカートだ。

「・・・キヤー！！？あつ、イヤッ！！見ないでっ！！！！」

体を抱くようにうずくまる。

「・・・あなたのその反応・・・本当に女の子じゃないの？
・・・そこら辺の女の子より、十倍・・・いや、
百六十二倍女の子っぽいわよ？」

「・・・なんですかその六十二倍は・・・うう・・・僕、お嬢に行
けない・・・」

「大丈夫じゃよ」

「ゼイスさん・・・なぜです？・・・こんな・・・スカート穿いた
男なんて・・・」

「嫁になればいい」

「ゼイスさん！！僕は男です！！」
「・・・なん・・・じゃとっ!？」

硬直するゼイスさん。

「・・・ダメじゃないカオル、ゼイスさんがショック死しちゃうじゃない

・・・大丈夫ですよーゼイスさん、カオルは女の子ですよー」

「・・・はっ・・・なんじゃ、驚かすんじゃないわい」

「フェリシアさん！！なんてこと言っんですか！！ゼイスさん、僕は男です！！」

「・・・はう！！・・・嘘じゃ！！わしは認めんぞ！！！！」

「認めてください！！」

「・・・カオル・・・この際、認めちゃいなさい・・・女だって」

「イヤですっ！！」

その後、そんな遣り取りが十分ぐらい続いた。

「・・・分かっていただけでしたか？」

「・・・分かった、要するに・・・カオルは女の子なんじゃな？」

「そうよ、ゼイスさん」

「フェリシアさん！！いい加減にしてください！！僕はオ・ト・コ・

ですっ!!」

「・・・もう、分かったわよ・・・ゼイスさん、カオルは男よ」

「・・・そうじゃったのか・・・すまなかった、カオル」

「分かってくれたならいいんです・・・それよりも・・・

ここで暮らすとはどういうことです?」

「どうもなにも、そのままの意味じゃよ」

「いいんですか?」

「いいんじゃないよ・・・まあ、とりあえず言葉を覚えるまで、

という条件はつくんじゃないかの」

「えと、＜疎通＞でしたっけ?その魔法じゃダメなんですか?」

「そうじゃ、＜疎通＞の魔法は、術者とそれを

掛けられた者同士しか効かないのじゃよ」

「・・・はあ、そうなんですか・・・じゃあこれからよろしくお願

いします」

「よろしくの」

こうして僕の今後は色々決まっていくなのだった。

第6話『実は、前は回は回想だつたりして』（後書き）

なんだこれ、ベッドの前で話してるだけ・・・
全然移動しない・・・異世界トリップなのに・・・

第7話『服を、僕のズボンを!!』（前書き）

やったー!!

ユニークアクセス総数1000突破しました。

これも、読んで下さる皆さんのおかげです。

これからもよろしくお願いします。

第7話『服を、僕のズボンを!!』

「それはまあ、いいんですが・・・服、どうにかありませんか？」

「・・・それでいいんじゃないの？似合ってるし」

「フェリシアさん!! 酷いです!! ズボン、他にないんですか! ?
あつ! ? 僕の制服!! 僕のズボンは! ?」

「あの真っ黒いの？」

「ん?・・・そう、ソレです」

「・・・アレのこと？」

フェリシアさんが指を指す方を見る。

「アレです!! あつ・・・ビリビリだ・・・ビリッビリだ・・・」

「そりゃあ、ねえ?ゼイスさん？」

「なんであんなことに! ?」

「骨とか飛び出しておつたしのう」

「グロっ!! なんで僕生きてるの! ?」

「そりゃあ、＜治療＞の魔法で、チヨイチヨイツとのう・・・」

「魔法凄っ!!」

「そうよ!! ゼイスさんの魔法は凄いのよ!!」

「なんでフェリシアが偉そうにするんじゃ・・・」

「いいじゃない!! 別に!!」

「「ええー・・・?」」

「どうやら、この中でフェリシアさんが一番強いみたいだ。」

「？じゃあ、魔法であの服どうにかならないんですか？」

「んー出来ないわけではないんじゃないじゃが・・・」

「出来ないんですか？」

「出来る！！だが・・・のう？フェリシア」

「ねえ？ゼイスさん」

「なぜですか？」

「そりゃあのう」

「似合ってるから」、それにかわいいし、いいじゃない」

「よくありません！！」

「・・・もう、仕方ないわね・・・ゼイスさん直してあげて」

「・・・だからなぜフェリシアが仕切るんじゃない・・・」

「わし、年長者じゃぞ？・・・フェリシアを育て上げたのじゃぞ？」

「ソレはソレ、コレはコレ・・・さあ、早く！」

「・・・分かったわい・・・それ、＜復元＞」

すると、僕の制服（学ラン）が薄っすらとした光に包まれた。
なんかこう、とても・・・

「とても綺麗です」

「凄いでしょ？」

「はい・・・凄いですね、フェリシアさん・・・どんどん直ってく・・・」

「・・・」

「・・・わしがやってるんじゃないが・・・」

暫くすると光が消え、僕の制服（学ラン）は元通りになっていた。
僕は、急いで制服（学ラン）に着替えることにした。
・・・ん？背中に違和感が・・・

「見ないでください！！」

「ちっ」

「・・・残念じゃ」

「何を期待してるんですか！？僕は男です！！
絶対に見ないでください！！」

さらに念を押し、僕はようやく着替えることができた。

第7話『服を、僕のズボンを!!』(後書き)

早く外に出たい・・・でも、出れない・・・うう・・・
冒険の無いファンタジーなんて・・・

第8話『……ということがあったんです』

「……ふう」

今、僕は制服一（学ラン）に着替え、フェリシアさんの淹れてくれたお茶

一（ドクダミ茶の様なもの）を飲んで落ち着いている。

「……おいしいです」

「でしょ？森で取って来た薬草をお茶にしたのよ」

「そうですか……じゃあ、ゆっくり味わって飲むことにします」

「え？なんで？」

「だって大変でしょう、薬草を採ったり、蒸したり、干したり、煎じたり、色々と……」

「……」

フェリシアさんが黙ってしまった。

（変なこと言っただけかな？……怒っちゃた？）

「……あなた……」

「はい？」

「・・・あなた何者なの?! 古代語しか話せないし、お茶の作り方は知ってるし!」

(・・・むう、どうしよう・・・言っただ方がいいかな?)
(助けてくれたんだし・・・言っても大丈夫だよな?)

「・・・えと・・・僕は・・・」

僕は、自分の身に起こったことを話した。

「・・・そういうわけで今、あなた達に助けられてここにいる訳です。」

「・・・信じられないわね」

「・・・ですね・・・」

「そうかそうか、そうじゃったのか」

「ゼイスさん? 何か心当たりでもあるの?」

「カオル・・・おぬしは、ニホンという国から来た、
とそう言っておったな?」

「はい」

「サトー・イチロウという名前に心当たりはないかね？」

(サトー・イチロウ・・・佐藤一郎？)

「日本人？」

「そうじゃ、奴もそう言っておったわい」

「え?! じゃあ、僕みたいに、なんか、世界を渡った、みたいな人がいるんですか？」

「ああ、そうじゃ」

「その人、佐藤さんはどこに? 何をしてるんですか? 生きてるんですか?!」

「まあ、まてそう慌てるな」

「すいません・・・で、その人はどんな人なんですか？」

「勇者じゃ、それに王じゃ」

「は？」

「いや、『だった』、と言った方がいいかのう」

「『だった』? 過去形ですか？」

「奴は死んだよ」

「死んだ？」

「40年ほど前に奥さん、王妃が死んでのう、悲しみに暮れての自殺じゃ」

「・・・そうですか・・・あれ？」

そういえば、僕、起きた時、<疎通>の魔法を掛けられた時日本語ではなく? とか聞いていたような気がするんですが？」

「ああ、その時はすっかり忘れておったわい」

「わ・・・忘れてたって・・・それと、奴と言うのは

佐藤さんのことですよね？友達だったりしたんですか？」

「ああ、一緒に旅をしたものよ」

「ゼイスさん・・・あなた何歳ですか？」

「もうすぐ158になるのう」

「なんですって?!」

ゼイスさんと僕の話の話を黙って聞いていたフェリシアさんが突然声を上げた。

「ゼイスさん!!そんな話聞いてないわよ!!」

「聞かれなかったからのう」

「158っていうのは、ずっとお爺さんだったから納得できるけど、勇者の旅のお供っていうのはいくらなんでも無いわよ!!」

「なんでじゃ？」

「あんな厳しい旅・・・ゼイスさんが乗り切ったなんて・・・」

「そんなに厳しかったんですか？」

「厳しいも何も有り得ないわよあんなのあんなの乗り切れたらそれこそ化け物よ」

「本人がここにいるというのに化け物と言われたわい」

「ああっ、ごめんなさいっゼイスさん、あまりにも驚いてつい・・・」

シユンとなるフェリシアさん、犬耳も垂れ下がる。

（・・・フェリシアさん、トランプとか弱そう・・・）

ゼイスさんとフェリシアさんの割と真剣な会話を聞いて、
そんなことを思っている僕だった。

第8話『・・・ということがあったんです』（後書き）

8話も外に出ない異世界トリップものは、そうないと思います。
次回こそ外に出します。

第9話『さあ、ご飯です』（前書き）

うう、外に出れなかった。

次回絶対外に出ます。

今回はいつもよりちょっと長いかも・・・

第9話『さあ、ご飯です』

あの後、フェリシアさんとゼイスさんはなんかいろいろ話し合っていた。

割と僕の話は、ほったらかしに・・・

（暗くなってきたなー）

（あ、ご飯どうするんだろ？）

（どんな、ご飯だろ？）

と、この世界の食卓事情に思いを馳せていると、どうやら話が終わったようだ。

「あつ、こんなに暗くなってる!!」

「そうじゃのう・・・夕飯にするかのう」

「じゃあ、準備するわね」

（・・・手伝った方がいいかな？）

（ここに住む条件は、とりあえず言葉を覚えるまでだから・・・）

（そのうち、出ていけないといけないし・・・）

（どうにかして帰るにしても・・・）

(それまでは、この世界に住む訳だし・・・)
(うん！手伝おう！)

というわけで手伝うことにした。

「すみません、あの・・・何か、手伝うことはありますか？」
「ん？じゃあ・・・コレ切って」
「コレは？」

渡されたのは、表面は赤い葉っぱが覆っていて、それを剥くと中の淡い緑色の葉っぱが

キャベツみたいに何重にも重なったものだった。

大きさは、僕の拳と同じくらいか、少し大きいくらい。

(・・・キャベツ？・・・でも葉っぱが赤くて、この大きさ・・・)
(・・・トマトみたい・・・でもトマトじゃないから・・・)
(・・・トマツ？・・・トヤベツ？・・・キャマト？)

「トベツよ」
「はは・・・」

予想どおり過ぎて、思わず苦笑いが出てしまった。
気を取り直して、トベツを切ることにする。
不安に思っていたが、包丁はあるみたいだ。

サクツとトベツに包丁を入れる。

（ナイフとかだったらどうしようかと思ってたけど・・・）

（包丁あってよかった・・・切れ味良すぎるのが気になるけど・・・）

（音がザクツじゃなくてサクツだもん・・・）

（切れないよりはいいから、まあいいか）

（あ、切つてとは言われたけど・・・）

（どう切ったらいいんだろう？）

「フェリシアさんトベツはどう切ったらいいんですか？」

「適当でいいわよ」

「分かりました」

サクサクトントン・・・とトベツを切つてゆく。

千切りにするつもりだ。

スープを温めているフェリシアさんが話しかけてくる。

「あなた、料理もできるのね」

「家でやってましたからね」

「家でやってたって・・・あなたホントに、女じゃないの？」

「女じゃないですよ・・・んー・・・この世界・・・」

えーと、この国？・・・では、男が台所に立つ・・・厨房？・・・
食事を作るのって珍しいんですか？」

「ええ、一人暮らしや、旅人、冒険者、みたいなのは作ったりする
けど

家族と一緒に暮らしている男は、ほとんど作らないわね、

家の家事は女、外の仕事は男がするって大体決まってるのよ」

「そうなんですか・・・男が偉くて、女は偉くないみたいなのがあるんですか？」

「無いわよ・・・表面上はね」

「表面上？」

「100年前勇者王サトーが差別を無くすと言って、貴族の廃止や奴隷の解放その他色々な事をしたのよ、その中に男女差別もあったってわけ、

でも、昔からの流れを変えるのは難しかったみたいね」

「そうなんですか・・・」

佐藤さんは、どうやら本当に勇者だったみたいだ。

さつきゼイスさんに聞きそびれたけれど、

佐藤さんについて、聞かなくてはいけないことがある。

そうこうしてるうちに夕飯の準備は終わった。

夕飯は、簡単でパン、スープ、トベツの千切りやほかの野菜も一緒になったサラダだ。

「では、食べるとするかのう」

「そうね」

「いただきます」

「ん？なに？カオル」

「なにつて？」

「今のよ、「いただきます」ってやつ」

「えと、「いただきます」っていうのは、食前の挨拶みたいなもので、

食事を作ってくれた人、それと食材に対する感謝の言葉・・・

っていうことなんだけど、まあ最近では、言わなかったりする人が多いですね」

「ふん、いい言葉ね、それじゃ私も、いただきます」

「ほっほっほ、思い出すの、奴もいつもそうやって律儀に説明しておったわい」

とかなんとか雑談しながらご飯を食べる。

（お箸が無い・・・あるのは、ナイフとフォーク・・・お箸今度作ろう）

そう心に決める僕だった。

ご飯を食べ終わり、食後のお茶（今度は緑茶みたいなもの）を飲んでいる。

佐藤さんについて聞きたかったことについて聞く。

「ゼイスさん」

「なんじゃ？」

「サトーさんはどうやってこの世界に来たんですか？」

「召喚じゃよ」

「召喚？」

「そうじゃ、勇者召喚、105年前まだ、東の大陸と西の大陸が戦争をしておった時に西の大陸の長である魔王を倒すために、勇者召喚と言われる魔法によってよばれたのがサトーじゃ。」

まあ、サトーは魔王を倒さずに戦争を終わらしてしまったがのう」

「そうだったんですか・・・では、魔法で元の世界・・・」

僕の世界に帰ることはできませんか？」

「それはわからんのう」

「サトーも何度も帰ろうとして、色んな魔法を試しておったが、

こちらで守るべきものが沢山できて、そのうちに、もう帰ろうとはしなくなっただんじゃ」

「そうですか・・・」

（本当に帰れないかもしれないなあ）

「気を落とすな、まだ帰れないと決まったわけではないわい」

「え?! どういうことですか？」

「まず、魔法は無限にあるということ、

次に、サトーはどうも帰り方を見つけておったようじゃったということじゃ」

「本当ですか?!」

「ああ、サトーの研究資料があるんじゃが、それに書いているかもしれないのう」

「その資料はどこに?!」

「王都にある国立図書館じゃ」

「王都にはどうやったらいけますか?!」

「まあ、そう慌てるな、ちゃんと王都に行かしてやるわい、

それに、どこに行くにしてもまず、ここの言葉を覚えるのが先じゃ」

「はう!そうでしたね・・・」

(＜疎通＞の魔法は、術者とそれを掛けられたもののしか効果がない・
・・・か)

「さて・・・もう寝るとするかなの」

「そうね」

「そうですね・・・疲れました・・・あ、僕はどこで寝ればいいですか?」

「あなたが寝てたベッドでいいわよ、アレもともとお客用だったから」

「なにからなにまで、ありがとうございます」

「いいんじゃないよ、さあ明かりをけすぞ」

ふっ、と明かりが消える暗くなる室内。

(・・・なんか、色々あって疲れた・・・色々ありすぎた・・・)

(・・・そういえば・・・僕、なんでスカートだったんだろ?)

(・・・明日聞いてみよう)

こうして僕の異世界生活一日目は終わった。

第10話『うん、空気がおいしい』（前書き）

すみません、遅くなりました。
テスト・・・イヤです・・・

第10話『うん、空気がおいしい』

頭の上から声がする。

「・・・な・・・さ・・・」

「・・・う・・・にや・・・?」

「お・・・い・・・!」

「にゅ~~~~ん?」

「起きなさいっ!」

「ん・・・あと5分・・・いや、4日・・・」

「どんだけ寝んのよ!」

「1か月?」

「増えた!」

「・・・う・・・ん・・・冗談ですよ・・・起きました・・・」

目を開けるとフェリシアさんの顔があった。

目の前に・・・

「近づ!!なんでこんなに近いんですか!」

「そりゃもちろん、するためよ」

「な、なにを?」

「おはようの・・・」

「わ~~~~っ!!わっ!!わ~~~~っ!」

「どうしたの？」

「ダメです！それはダメです！」

「なんで？大丈夫よ」

「大丈夫なんですか？何をするつもりだったんです？」

「キス」

「鱈」（注：キス科の硬骨魚の総称。白鱈（シロギス）の身は淡泊で美味）？魚ですか？」

「さかな？ちがうわよ、キスよ」

「やっぱりダメです！！どうしてしようとするんですか！？」

「かわいいから？」

「ダメです！！それに・・・」

「それに？」

「それに・・・まだ・・・したこと・・・ないのに・・・」

言っていて顔が赤くなるのが分かる。

（キスなんて・・・キス・・・）

恥ずかしすぎて、顔を逸らす。

「あー！もうっ！！！かわいすぎっ！ぎゅーっ！！」

フェリシアさんが思いつきり抱きついてくる。

「うにやつ！？止めてください！！ダメです！！色々ダメです！！
胸とか・・・イヤっ、とにかく離してください！！」
「大丈夫よ、女同士だし、ぎゅーーーーっ！」
「それはそれでダメです！！それに僕は男です！」
「ほっほっほっ、よほどカオルのことが気に入ったようじゃのう」
「ゼイスさん！笑ってないでどうかしてください！！」
「これフェリシアよ、離してあげなさい、カオルが困っておるわい」
「ぎゅーーーー・・・ふう、もう、分かったわよ」
「ふう、助かった・・・んと、おはようございます」
「うむ、おはよう」
「ちよっと、抱き足りないけど・・・おはよー」
「まだするつもりだったの！？」

そうして、2日目の朝は始まった。

「よし、それじゃあ水を汲みに行ってもらおうかの」
「はい、行くわよカオル」
「は、はい！」

と、いうわけで只今絶賛森の中だ。
両手に桶をもって、森の小道を歩いている。

「ん〜・・・空気がおいし・・・」

「空気が？味なんかないでしょ」

「味っていうか、空気が、呼吸をするのが気持ちいいんです」

「ふ〜ん、そうかしら？」

（あ、昨日起きた時なんでスカートだったか聞かないと・・・）

「そういえば、僕が昨日起きた時、なんでスカートを穿かされていたんですか？」

「スカートの方が似合ってたからよ」

「・・・そうですか」

「そうよ」

聞くまでもなかった。

さて、きれいな小川の前に着いた。

「きれいですね・・・」

「でしょ？この水はそのまま飲んでも大丈夫なのよ」
「そうなんですか？・・・じゃあ・・・」

（ちよつと飲んでみよう）

「つめたっ！！でも、おいしーっ！！」

「そんなに言うほどのなの？」

「そうですよ！！僕の世界じゃ、なかなかこんなおいしい水飲めません！！」

「そう・・・よかったわね・・・」

（うつ、フェリシアさんの温度差が痛い・・・）

（ちよつと・・・落ち着こう・・・）

「ふう〜・・・」

「落ち着いた？」

「はい・・・すいません・・・興奮しすぎました」

「え〜と、まあ、いつもここで水を汲んでるんだけど、

ここから、ちよつと上流に行ったところに、カオルが倒れてたのよ」

「そうなんですか〜、こんなところから僕をあの家まで運んだんですか、

大変だったでしょう？」

「そんなことないわ、私みたいな獣人族は人より力があるんだから」

「可愛い見かけによらないってわけですね〜」

「なっ、ちよつ、そんなことっ、かわいいなんてっ！！あなたに言われたくないわよっ！！」

「えゝ？かわいいのにゝ、素直じゃないなゝ」

「そつ、そんなことよりつ、カオルが倒れてたところ見に行つてみる？。」

「うゝん、どうしよう？・・・あつ！そついえば、僕の鞆がない！」

「じゃあ、そこに落ちてるかもしれないわね、行つてみましょう」

はい、ただいま現場に來ております。

事故の被害者は17歳男性、猛スピードで走つてきた乗用車に撥ねられたものの、

異世界にトリップし、そこで魔法による治療を受け一命を取り留めた模様。

今は、怪我は完治し発見現場を、見物しております。

(・・・とかなんとか、キャスター風に実況してみたり・・・)

「どうしたの？黙りこくつて」

「へ？いや、凄い血の量だなゝゝと」

「そりゃ、いろいろ飛び出すような、怪我だったんだから服なんか、破れるわ、突き抜けるわ、地濡れになるわで、

そりゃ、着替えさせるわよ」

「納得しました・・・でもなんでスカート？
フェリシアさんズボン穿いてるのに？」

「似合うから」

「そうですか」

「そうよ」

どうやら譲る気はないらしい。

(つと、鞆、鞆・・・)

(ん？・・・なんか、光るものが・・・)

「ん？あつ、あつた、見つかりました」

「見つかった？」

「コレです」

そう言って見せたのは、黒い光沢があり、肩から掛ける紐のある、
いわゆる、エナメルのスーツバッグだった。

「見たことの無い素材ね・・・コレは布？」

「ちよつと違いますが、似たような物です」

「で？何が入ってるの？」

「スパナ・・・道具とか本とか・・・色々です」

「道具？」

「物を作ったり、直したりする道具です」

「本は？」

「学校の教科書です」

「学校・・・あなた・・・学生だったの？」

「え？・・・これも学校の制服ですが？」

「・・・そういえば制服って言ってたわね・・・

あなた、何歳なの？」

「何歳だと思います？」

「え〜と・・・12歳？」

こちらの世界でも日本人は若く見られるようだ。

「違います」

「う〜ん・・・13歳？」

「もっと上です」

「15歳!!」

「もう少し!!」

「17・・・なわけ「正解です」って、

嘘っ！？私と同じ年!？」

「フェリシアさんも17歳なんですわ」

「嘘よ・・・有り得ないわ・・・こんな小っちゃいのが

私と同じ年なんて・・・せかいの ほうそくが みだれているわ」

フェリシアさんが、凄く混乱してしまった。

どうしよう・・・ちよっと落ち着くまで待とうか・・・。

暫く待っていたら、フェリシアさんの混乱は治まったようだ。

「分かったわ・・・あなたは、12歳なのね？」
「17です」

「・・・どうやら聞き間違いじゃないようね」
「聞き間違いじゃないです」

「そう、じゃあ、あなたはカオル・サクライ、人間、17歳学生、性別は女「違います」・・・男、と」

「そうなりますね」

「ふゝん・・・じゃあ、敬語は無しね！！さんも無し！！」

「分かりました」

「違う！！」

「分かり・・・ったよ・・・これでいい？」

「もう一回」

「何回やんの!？」

「それでよし・・・ん、じゃあ改めて、私の自己紹介も・・・

私はフェリシア、犬狼族、17歳女、あなたと同じ学生よ、
これからよろしくね？」

そう言って手を差し出してくるフェリシアさん・・・フェリシア。

(ん?・・・あ、握手か・・・こっちでもあるんだ)

フェリシアさんの手を握り、

「うん、よろしく!!」

笑顔で言った。

第11話『ゼイスさんの魔法講座』（前書き）

すいません、今回はなんか中途半端になってしまいました。

第11話『ゼイスさんの魔法講座』

「よし！じゃあ、早く水汲んで帰りましょ」
「うん」

持ってきた桶2つに、水を汲む。
結構ギリギリまで水を汲んだ、運んでるときちょっとこぼれそうだ。

（ちょっと重いけど、アレぐらいの距離だったら大丈夫・・・かな？）

「ん・・・しょっと」
「行ける？・・・あなた以外と力持ちなのね」
「これでも男の子だからね」
「そう、じゃあ行きましょ」

そう言っただけでスタスタ歩き始めるフェリシア。

「って速っ！！なんでこぼさずにそんな早く歩けるの!？」

「へ？・・・＜固定＞の魔法を掛けてるから・・・
って、そうだった力オル魔法使えないんだった」

「魔法！？それも魔法なの！？」

「そうよく固定＞、物を固定する魔法ね」

「うーん・・・魔法・・・魔法かあ・・・」

「どうしたの？」

「えーとね、魔法って誰でも使えるのかな？って」

「向き不向きがあるけど誰でも使えるわよ」

「僕にも使えるかな？」

「え？使えるんじゃないかしら？」

「だって、僕別の世界から来たんだよ？それに、魔法なんかなかったし・・・」

「・・・それもそうね、帰ったらゼイスさんに聞いてみたら？」

「そうする、早く帰ろー！」

「そうね、ちよつと待って・・・＜固定＞これでこぼれないわ
「本当！？」」

恐る恐る桶を逆さにする。

こぼれない。

「・・・おお！凄い、凄い！！」

ブンブン桶を振り回す。

全然こぼれない。

「そこまで喜ばれると照れるわね」

「だって凄いもん!!」

「魔法、使いたいでしょ?じゃあ早く帰りましょ?」

「うん!」

「って速っ!!カオル、家の場所分かるの!?」

「・・・分かんない」

「カオルって子供みたいって言われたことない?」

「・・・たまに言われる」

僕自身それで困っている。本気で。

(もうちょっと身長が高かったらよかったのに・・・)

いつも僕の周りには、身長の高い人が集まる。――(カオル以外皆、平均か平均より少し高いぐらいの身長なのだが、カオルが飛びぬけて低いため、カオルから見たらそう見える)

(皆も、僕のこといつも弟か妹扱い――(周りから見れば兄弟もしくは、兄妹そのもの)

してばかりだったし・・・)

そんなこんなで、家に着いた。
ということ・・・

「ゼイスさん！！僕に魔法を教えてください！！」

「ほっほっほっ、初めからそのつもりじゃよ」

「初めから？」

「この世界の常識ぐらい教えようと思っておったからのう」

「常識？」

「そう常識じゃ、言葉はもちろん、お金や、歴史、後は魔法とか色々じゃ」

「そうだったんですか・・・何から何までありがとうございます」

（常識か・・・確かに常識は必要だね・・・）

（向こうでは普通に思っても、こっちではおかしいなんてことがあるかも・・・）

ゼイスさんには頭が上がりそうにない。

「よし、じゃあ魔法について簡単に教えようかのう」
「お願いします」

ゼイスさんによる魔法講座が始まった。

「魔法には、大きく2つ＜詠唱魔法＞と＜魔法陣魔法＞がある。
＜詠唱魔法＞は、想像と魔力を練り、ソレを古代語に乗せて、
＜詠唱＞し、発動する」
「はい先生、質問です」
「なんじゃね？カオル」
「古代語って日本語のことですよ？じゃあ僕は簡単にできたりします？」
「それは分からのう」
「なんでですか？」
「カオルは古代語の＜詠唱＞自体は問題ないとは思っくんじゃが・・・
魔力があるか分からんしのう」
「魔力・・・ですか・・・」
「心配するなカオル、そのための＜魔法陣魔法＞じゃ、
この世界には魔力が満ち溢れておる。それこそ空気のように、
どこにでも、なんにでもある、ソレを＜魔法陣＞を使い、
発動するものじゃ」
「・・・＜魔法陣＞とはどんなものですか？」
「ちよつと待っておれ」

そう言って、ゼイスさんが持ってきたのは一冊の本。

ソレを開いてゼイスさんが言う。

「これが、＜魔法陣＞じゃ」

見ると本には、よくファンタジーのアニメとかで見えるような、
＜魔法陣＞が描かれていた、ただそこには・・・

「・・・日本語」

「そうじゃ、古代語によつて、どのような、どれほどの魔法を使う
かが

書かれておる。」

「炎、魔力値二十、発現、と書かれているのは分かりますが間の記
号？コレは何ですか？」

「ああ、ソレはこちらの文字じゃ」

「そうですか・・・じゃあ、魔法を使うには、やはりこちらの文字
を学ばないといけないんですか・・・」

「大丈夫じゃ、＜魔法陣＞を書くのは古代語の方がいいしのう」

「でも、この＜陣＞は覚ええないといけないですね」

「そうじゃな」

「それと魔力値二十というのは？」

「そうじゃな、魔力値の説明もしなければな・・・

魔力値、まあ人が持っている魔力に値を付けたものじゃ、
人間種の平均は三十ぐらい、獣人種の五十ぐらい、妖精種は百ぐ
らい、

魔種は百五十ぐらい、魔獣は二百以上、以上というのは、種によ
つて差がありすぎるからじゃ、

竜種は分からん、というか、測りきれん」

「どうやって測っているんですか？」

「ここには無いが、測定器がある」

「便利ですネ」

「たくさん話して疲れたわい、ちょっと休憩にするかの」

まだまだ、ゼイスさんの魔法講座は続く。

第12話『ゼイスさんの魔法講座〜実践編：1』

「ちょっと、外に出るかの」

一休みの後、僕たちは外に出ている。

外と言っても、家の目の前に広がる森ではなく、少し歩いた所にある原っぱにきている。

後ろには森、向こうの方には森と山がある。

そして、綺麗な青い空が見える。

「すごい！！広っ！！見渡す限り緑！！」

「はしゃぎすぎよ、カオルくんなのはこの辺じゃ普通よ」

「でも・・・」

そっついながら振り返る。

「こんな綺麗な景色みたことないもん！」

「・・・」

「・・・」

黙りこくる、ゼイスさんとフェリシア。

「どうしたんですか？」

「絵になるのう」

「ええ、ゼイスさん、でも服がねえ」

「白のワンピースとかどうじゃ？」

「ソレいいわねゼイスさん！カオル！着替えに戻るわよ！」

「戻りません！！」

「まさか・・・ここで着替えるの？でもここには・・・」

「フェリシアよ、ワンピースならここにあるぞ」

「ナイス！！ゼイスさん！！」

「用意されてる！！」

「さあ、カオル」

「着替えません！！」

「あ、ちゃんと見ないようにするから・・・」

「心配するなカオル、ちゃんと着替え用の衝立とか持って来とるわ
い」

「用意周到！？って、そういうことじゃなーーい！」

「じゃあどういふことなのよカオル！！」

「どうもなにもワンピースなんか着ないってことー！」

「なんで！？ワンピースじゃなかったらいいの？」

「それも違う！！まず、僕、男だからね！！」

「また、そんな小さいことを・・・はあ」
「呆れられた!？」

その後、十分程度僕の説明や説得が続いた。

「それで？なんで、外に出たんですか？」
「なに、家にずっと籠って話してもつまらんじゃろって、外に出て、魔法の実践も含めて説明しようと思っただけ」
「おお！じゃあ、火がボーーーーーッ！！とか、光が、ピカーーーーーッ！！とか、瞬間移動とかが実際に見れるんですか？」
「そうじゃ、ただ瞬間移動は無理じゃ」
「何ですか？」
「めんどくさいからじゃ」
「そんな理由で!？」
「<詠唱魔法>だったら、ものすごい魔力を使うし、<魔法陣魔法>でも書くのがとても面倒なんじゃ」
「そうですか・・・」
「まあ、今度教えてやるわい」
「やった!!」

「じゃあまず見ていなさい・・・＜灯火＞」

ゼイスさんが唱えると、小さな炎がゼイスさんの手の上に現れた。

「おお!!」

「これが、＜詠唱魔法＞の基本じゃ、
ちよつとやってみなさい」

「はい!!・・・えゝと？起こすことを想像して・・・
魔力と一緒に・・・ってゼイスさん!!」

「なんじゃ？」

「魔力ってなに？」

「おお!!そうじゃった、この世界の者は、
小さいころから魔法や魔力に慣れ親しんでおるが・・・
カオルはそんなことが無かったんじやのう・・・
どれ、手を出してみなさい」

言われた通りに手を出す、ゼイスさんがその手を握り、

「今から、魔力を流すからの」
「はい」

暫くすると、手からピリピリとしたものが流れてきた。
ソレが、体の真ん中の方に流れていく。

（ピリピリして・・・ちょっと痛い・・・）
（・・・でも・・・温かい・・・）

「これが・・・魔力・・・？」

「分かったかの？」

「はい・・・たぶん」

「では・・・ソレを意識してもう一度してみなさい」
「はい！！」

もう一度挑戦する。

（イメージするのはライターの炎・・・）
（ソレを・・・魔力と一緒に・・・）

「＜灯火＞」

すると、小さな炎が手の上に現れる。

「出来た・・・おお・・・」

（なんだろう・・・本当に・・・）

（・・・異世界に来ちゃったのか・・・）

ちよつと、感傷的になっていると、
フェリシアがちよつと興奮しながら

「すごいじゃない！！カオル！！一日で魔法を使えるようになるなんて！！」

と言ってきた。

「え？なんで？この世界の人は、魔法とか魔力に慣れ親しんでるんじゃないの？」

「慣れ親しんでも、すぐに使えるようになるんじゃないの、よく考えてみて？<詠唱魔法>の使い方を」

「えーと・・・起こすことを想像して魔力と一緒に、

日本語・・・いや、古代語を・・・あ！！」

「そういうことよ、あなたが普通に考え、理解し、使っている、古代語・・・ニホンゴ？をこの人は知らないの、

カオルが、この言葉を知らないのと同じだね」

「・・・じゃあ、もし・・・僕がすっかり日本語で話したりしたら・・・」

「即、捕まる」

「もし捕まったら？」

「監禁される、研究される、愛でられる、のどれかね」

「めっ、愛でられるっ！？・・・この国の法はソレらを認めてるの？」

「法は認めていないけど、抜け道なんていくらでもあるし、もしかしたら、国に捕まるかもしれないし」

（監禁、研究って宇宙人みたいなことされるのかな・・・）

（それに・・・愛でられるって・・・）

「うう~~~~・・・どうしよう・・・そんなの・・・イヤだ~~~~」

暫く、僕の未来に起こりうるかもしれない事態について悩んでいたら、

「・・・ふふっ、冗談よ」

「・・・本当に？」

「本当よ」

「はあ~~~~よかった~~~~解剖されたらどうしようかと思ったよ」

「解剖されたら死んでるんじゃないの？」

「そうかもね・・・でも魔法があるなら・・・」

「・・・まあ、出来ないこともないわね」

「でしょ？」

「まあ、そういうものないから安心しなさい、

でも、今は冗談でもの凄く大げさに言っただけ、

カオルが二ホンゴで話すことはとても重大なことだということよ」

「うん、分かった、だったらちゃんと勉強しないとね、

うつかり、この人が知らない言葉でも使ったら、
面倒なことになるだろうしね」

ここでの生活は、なかなか大変そうだ。

第13話『ゼイスさんの魔法講座』実践編：2』

「よし、次は＜魔法陣魔法＞じゃ」

そう言つて、ゼイスさんがどこからともなく取り出した大きな紙。そこには、＜魔法陣＞が書かれていた。

「＜魔法陣魔法＞は、至る所に満ちている魔力を＜魔法陣＞を使って行つ魔法じゃ、使う魔力が自分の魔力ではないため、

大規模な魔法を行うときや、魔力の少ないものが使うことが多い」

「じゃあ、誰でも使えるんですか？」

「そういう訳でもないんじゃ、＜魔法陣魔法＞も＜魔法陣＞を書くときに、

古代語を使うために、必然的に古代語がある程度解る者でなければならんのじゃ」

「むむ・・・でも、ここには、こちらの言葉も書かれていますよ？
だったら、このこちらの言葉で全部書いたらダメなんですか？」

「そうじゃな・・・と言つたらいいんじやろうか・・・」

古代語は、魔力を乗せるものと言つたところじやろう？」

「乗せる？＜詠唱魔法＞の時もそう言つてましたよね？」

「そうじゃな、魔力を人として考えると、

言葉は、船みたいなもんじゃ、

こちらの言葉はその船が小さくて脆い、だから人を乗せられない、古代語は、大きくて強い、だから多くの人を乗せられる、

・・・と、そういうことじゃ」

「こちらの言葉には、力が籠めにくくて、日本語には、力が籠めやすい・・・

って、訳ですか？」

「そうじゃな」

「だから＜詠唱魔法＞も、＜魔法陣魔法＞も古代語が必要・・・と
「そういう訳じゃ、本来、＜魔法陣＞を書くのは、

古代語だけで書いた方がいいんじゃないが、

古代語だけで書くというのが、今ではほとんど出来なくなってる、

そのために、混ぜこぜの言葉で書かれておるが、そのせいで、
本来出せる力よりも小さな力しか出せないんじゃない、

じゃから＜魔法陣魔法＞は余り使うものがないんじゃない、

＜魔法陣＞を一から書くのも面倒じゃしもう」

「その＜魔法陣＞は何回でも使えるんじゃないんですか？」

「一回きりじゃ、＜魔法陣＞は使用時に魔力で掻き消えてしまふの
じゃ、

じゃから、魔法陣を主体として使うものは、

いつもあらかじめ書いたものを持ち歩いておる」

「それは、面倒ですね、かさばるし・・・じゃあ、

魔法で＜魔法陣＞を書いたらいいんじゃないんですか？」

「はて？」

「いや、だからですね・・・＜詠唱魔法＞で＜魔法陣＞を書いたら
いいじゃないですか」

「うむ？どうということじゃ？」

「うゝん、説明するのはちょっと・・・

ただの思いつきだし・・・」

「ちよっと、やってみなさい」

「ええ！？うーん・・・やってみます、＜魔法陣＞はこれでいいですか？」

「そうじゃな」

「では・・・」

目の前にある＜魔法陣＞に意識を集中する。

（＜魔法陣＞・・・こうなってるんだ・・・）

二重円の真ん中に、五芒星、外側に起こることが書かれている。

（読めるのは・・・“水”、“出現”）

（他は・・・読めない・・・そのままコピーしよう・・・）

（・・・よし、覚えた）

（この魔法陣が、手の上に・・・）

「＜展開＞」

すると、僕の手の上に小さなく魔法陣＞が現れた。

(あ、でた・・・)
(けど、使い方わかんない・・・)

「ゼイスさんく魔法陣魔法>ってどうやって使っんですか？」
「・・・」

返事がない、ただのしかばねのようだ。

「ゼイスさん？」
「・・・か・・・か・・・か・・・」
「か？」
「・・・かく、かつ、かくつ、かつく」
「フェリシアさん、ゼイスさんがおかしくなった」
「・・・」

こちらもしかばねだ。

「か、か、か、かくめい じゃあああああああ！！！！」
「！！」
「おおう！？ゼイスさん！？その年で革命はちよつと無理じゃ・・・」
「出来る！！出来るぞ！！魔法界に革命が起こせるぞ！！！！」
「うおおおお、燃えてきたあああああ！！！！」
「ちよつと、若返ってる！？」

いきなりどうしたというのだ。

ゼイスさんの興奮度合いが、いきなりマックスになってしまった。

「・・・フェリシア、助けて！」

「イヤ」

「なんで!？」

「自分でまいた種は、自分で刈り取りなさい」

「いやいやいやいや、刈り取る以前にもう燃え上ってるよ!!」

無理だよ!!火傷しちゃうよ!!」

「・・・しょうがないわねえ、可愛い妹の頼みは断れないわ・・・
<水弾>」

「起こす!!やってやるぞおおおおおおウエ آپ!!?」

「ちよつとフェリシアさん!?!今さらつと妹って言った!?!」

叫んでいるゼイスさんの顔めがけて大きな水の塊が飛んで行って、
きれいに当たった、あ、流された。
戻ってきた。

「何をするんじゃフェリシア!!」

「ちよつと、落ち着いてください、カオルが怖がっていますく水弾
>」

「うお!?!落ち着いた、落ち着いたからやめるのじゃ」

「落ち着きましたか?<水弾>」

「おひょ!?!語尾のようになく詠唱>を行うなフェリシア!!」

「くみ」

「分かった、わしが悪かった、すまんカオル取り乱してしまった、
どうじゃこれでいいだろう？」

「どうする？カオルくみ」

「いいから！！そんなに水びだしにしないで！？風邪ひいちゃうよ
！！」

「よかったわね、ゼイスさん」

「ふゝゝゝ死ぬかと思ったわい」

「ゼイスさん、大人げないです、いくら今のが凄くっても、
叫んだりするのは、大人げないです」

「『大人げない』と二回も言われた・・・」

「・・・ゼイスさん、そんなに落ち込まないでください、
確かに大人げなかったですけど・・・」

「・・・もうダメじゃ・・・カオルにも言われた・・・」

ゼイスさんの心が折れてしまった。

ゼイスさんが復活するまで、暫く待つことになった。

第14話『食卓事情』

「それで？」

「それではなんじゃ？」

「なんで、あんなに興奮してたんですか？」

回復したゼイスさんになぜあんなに興奮していたのかを尋ねる。

「それはのう・・・今まで面倒じゃったく魔法陣魔法>をカオルが
楽にしたからじゃ」

「はあ・・・？」

魔法について、よく分かっていないのでいまいちピンとこない。

「言ったじやろう、<魔法陣魔法>はいちいち<魔法陣>を書かね
ばならないと」

「？」

「カオルがやったのは、それを省略してしまうことじゃ」

「それで？」

「<魔法陣魔法>は、空気のようにそこら中にある魔力を使うため、

魔力の少ない者や、大規模な魔法を使うときに使用する、
だが、＜魔法陣＞を書くために、ある程度古代語を理解せねばならん」

「さっきも言っていましたね、でも、今の興奮とどうつながるんです？」

「さっきカオルはどうやった？」

「＜魔法陣＞を見て、憶えて、＜詠唱魔法＞で＜展開＞？」

「見て、憶えて、＜詠唱魔法＞だけじゃろう？」

「はい」

「要するに、記憶の中の＜魔法陣＞を外に引き出すだけ」

「そうですね」

「ここで、もう一度＜魔法陣魔法＞の特性を言っておこう、一度使った＜魔法陣＞は消える」

「うん」

「魔法を使うたび＜魔法陣＞を書かなければならない、が、カオルがさっきやったのは、一瞬で＜魔法陣＞を出現させること、ソレが意味することは・・・」

「＜魔法陣魔法＞の打ち放題？」

「そうじゃ！！カオルは＜魔法陣魔法＞界に革命を起こしたのじゃ！！」

「＜魔法陣＞を覚えさえすれば、誰でも、簡単に＜魔法陣魔法＞を使える！！」

「と、いう訳じゃ」

と、まあ色々あったが、自分にも魔法が使えるっぽい。
嬉しい。今度、いろいろ試してみよう。

「じゃあ、帰るとするかの」

「はい」

家に帰ってきた。自分の家ではないので、この表現は微妙な気もするが、

「じゃあ、ご飯にするかの」

そう言ってゼイスさんが、ご飯の準備を始めた。

「フェリシア、この世界って男は台所に立たないんじゃないの？」

「普通はね、でも私たちの家では、毎日交代でしてるの」
「ふん」

「明日から、カオルにもしてもらわよ」

「ええっ!？」
「一緒に暮らすから当然でしょ？それに、カオル料理それなりにできてるでしょ？」

「確かにそう言ったけど・・・知らない食材ばかりだから、どんな料理になるかは保証しないよ？」

「覚悟しとくわ」

「ところで、ここって森の中だけど、どうやって食材を仕入れてる

の？」

「家の庭で育てたり、森でとってきたり、あと下の村に買いに行ってるわ」

「お肉とか食べる？」

「肉？カオル肉嫌いなのか？」

「好きだよ、いや、そういうことじゃなくて」

「肉ってどうやってとってるの？」

「狩りね、あそこに弓があるでしょソレでとってる、

まあ街に行ったら、町のそばで畜産をしてるから、肉屋で売ってるけど」

「狩り・・・」

「カオル狩りに興味あるのか？」

「いや、無い訳でもないではないけど、いや、

僕の国って、狩りをする人なんてほとんどいなかったから」

「じゃあどうやって肉を手に入れてたの？」

「どこの村、どこの町にも絶対に、何でも売っている店があつてそこで売ってた」

「でも、そんな店があつても村に狩る人間がいないんじゃない、

新鮮な肉は手に入らないじゃない」

「えっと・・・色んなところに畜産農家があって、そこから全国各地に配送されたり、他の国から輸入したり・・・」

「他の国？」

「そう、僕の国は周りが海に囲まれてて、海の方の他の国から・・・」

「国がいくつもあるのか？」

「え？・・・そう・・・だけど？」

「面白そうね・・・ここには、二つしか国が無いから・・・東の国と西の国の二つだけ」

「へえーそうなんだ」

「あまり驚かないのね？」

「ここにいる時点で驚きだからね」

「まあ、それもそうね」

「それで・・・肉は、どうやって運んでたの？どうやって鮮度を保ったの？」

「凍らせて」

「凍・・・らせて？何で？」

「肉とか野菜とかがって、凍らせると鮮度が落ちないんだよ、それに、凍らせたままだったら長期間保存できるんだよ」

「へえゝ知らなかったわ、冷やしたら長持ちするぐらいは知ってたけど」

「じゃあ、冷凍庫・・・物を凍らせて保管する箱みたいなのは無いの？」

「ないわね、冷やす箱だったらあるけど」

「ふーん、じゃあ今度作ろう」

「え！？作れるの？」

「魔法もあるし作れるんじゃないの？」

「さあ？誰もやったことないし・・・」

「じゃあ、やってみよう」

することがまた一つ増えた。

冷凍庫の作成、魔法があるのできつと大丈夫だろう。

冷凍庫ができたなら、色んな料理、主にお菓子ができるので、早めに作りたいと思う。早く、アイスクリームが食べたい。

「できたぞい」

「じゃあ食べようか」

「いただきます」

晩ご飯は、お粥みたいなのと、厚切りのハムを焼いたものだった。
おいしかった。

明日は、僕が晩ご飯を作らないといけない、何にしようか？

第15話『お買いもの』

突然だが、今僕達は村に来ている。

魔法を教えてもらってから三週間がたった。

時がたつのは早いものだ。

では何故、村に来ているかというと、そう、買い物だ。

「カオル!! 早く、こっち!!」

「ちよつ、ちよつと待ってフェリシア」

「早く、早く!!」

「ほっほっほ、そう急かすな、時間はたっぷりあるわい」

「ゼイスさん、時は金なり、ですよ、過ぎた時間はもう戻ってこないんです、

でしょ? カオル」

「確かにそうだけど・・・」

あれから三週間、こちらの言葉や習慣、常識を僕は必死になって覚えた。

そして、フェリシアには日本語・・・古代語を教えた。

その一環で、ことわざなどを教えたが、どうも気に入ったようだ。

この買い物は、この世界で生活を送れるだけの、力を身に着けたかを測るための
いわゆるテストみたいなものだ。
そのはずだったのだが・・・

「カオル！次こっち、これ着て！」

「まっ、またこんな！！無理、イヤ、ダメ、着ないから！！！」

フェリシアがひっきりなしに服を着せようとしてくる。
それも、フリフリのとてもかわいい服を、

「似合っていらつしやいますよ？」

「店員さん！煽らないでください！」

「こちらなどどうでしょう？」

「それも、いいわね、カオルどっちがいい？」

「どっちも着ません！！！」

「そんなこと言わないで、ほら、こんなにかわいいんだよ？」

「可愛いから着たくないんです！！！」

「では、こちらなどいかがでしょうか？」

「いいわねそれ、凛として知的な感じ！カオルこれは？」

「いや、女物でしょ？それ、女物はイヤだよ、

男が女物を着てると、変態だと思われちゃうよ」

「・・・？」「」

「『この娘は何を言っているの？』みたいな顔しないでください！！！」

「というか、フェリシアは僕が男だって知ってるでしょ!？」

「……あ……ああ? うん……うん、分かってるわよ?」

「疑問形!?! まだ納得してなかったの!?! 男だからね、オ・ト・コ」

「なんですって?……男?……ちよつと失礼いたします」

ぺたり

と僕の胸を触る店員さん。

「……男?……女?……男?……?」

「ちよつと、いつまで触ってるんですか……恥ずかしいです……

無いでしょ? 胸なんか……男ですし」

「あつ、すいません……確かに胸はありませんが……

失礼ですが、胸の無い方だってさらにいますし……」

ちらり

とフェリシアさんの方を見やる店員さん。

「いや、それは失礼にも程があるんじゃないかな!？」

「フェリシアは確かにちよつとアレだけど……」

「確かに店員さんより細やかな物しれないけど」

「まだ子供だし、見込みはあるよ!……たぶん」

「あ……目があつた」

「カオル？今ものすごく失礼なこと考えてない？」

「！？い、い、否、な、何も考えてはござらんよ？」

「あはっ、話し方が変よ？」

フェリシア、笑顔が怖いよ、笑顔ってこんな怖い物なの？
怖すぎて、こちらの言葉ではなくて日本語で話してるけど、
この際もうどうでもいいや、

「あ、ああ、コレはね、僕が住んでた時代よりも、
百何十年ぐらい昔の言葉なんだよ」

「ソレを、今なんでこの状況で出してくるのかな？」

「え、いや、それは・・・」

「カオル」

「すいません」

「・・・カオルって、男の子なのね・・・」

「・・・うん」

（男って認められたのは嬉しいけど・・・）

（嫌な感じだな・・・）

「で、では、男性物をご用意しますね！」

店員さんが重い空気を換えようと、明るい声で服を探し始めた。

（あれ？今の原因作ったのは、店員さんじゃ？）

なんとなく、理不尽を感じながら店員さんを待つ。

「これなんかどうでしょうか？」

店員さんが持つてきたのは、村の皆が来ている様な普通の服。

今着ている、学校の制服と比べて、良いとはさすがに言えないが、紡績技術だって、そんなに進歩していないかもしれない、

自分は家の工場の手伝いをしていて、機会にそれなりに詳しいと言っても、工作機械とか、家でお遊びで作ったような物だけだ。

閑話休題。

この黒い髪自体が、結構目立つらしいので、

これ以上目立つのは嫌なので、コレを買うことにする。

「じゃあ、それで」

「ダメ！カオルはこっちの方が似合う！」

「似合う似合わないじゃないから！店員さんコレいくらですか？」

「・・・え、ええ銀貨三枚ね」

「はい、銀貨三枚です」

ここで、この世界のお金について説明しよう、
と言ってもすごく簡単である。

この世界には、銅貨、銀貨、金貨があり、銅貨百枚で銀貨一枚、
銀貨百枚で金貨一枚の価値がある。

正確には、日々その価値は変動しているが、商人以外の人間には
あまり関係がない。

「ご利用、ありがとうございます」

「また買いに来ます」

服を受け取った僕は店の外に出る。

「あ、ちょっと待ってカオル」

「ん？」

「ありがとうございました」

「フェリシア、何か買ってたの？」

「うん、さっきの服をね」

「さっきの？・・・ああ！！アレ買ったの！？」

「うんっ」

「うんって、着ないからね、絶対着ないからね！？」

「・・・え？」

「悲しそうな顔したって着ないからね！？」

買い物はまだ続く。

第16話『クラスメイツ（1）』（前書き）

えー

突然ですが、場所、時間が大きく変わります。

というか、カオルくんがトリップしちゃう日の朝まで戻ります。
主人公が変わります。

第16話『クラスメイツ（1）』

目が覚める。

いつもと変わらない朝。

いつもと変わらない、無味無臭、無味乾燥、無色透明な朝。
時計を見る。

時刻は午前8時3分。

いつものように準備をしていたら、学校に遅刻するだろう。
別に遅刻してもいいが、目立ちたくはない。

幸い、自分は一食ぐらい抜いても不自由しない人間なので、
朝食は食べずに学校へ行こう。

顔を洗い、歯を磨き、寝癖を直し、服を着替える。
時計を見る。

午前8時12分、今すぐ家を出て何もないければ、余裕で間に合うだろう。

家を出る。家族は居ない、家族は十年前に事故で死んだ。

そんな学生なら普通、施設に居るものだろうが、その施設も三年前に焼け落ちた。

今、自分の住んでいる家は築三十年超のアパートだ。

そんなオンボロアパートに住んでいる理由は一つ、家賃が安いからだ。

学校までは徒歩だ。自転車で行ってもいいのだが、徒歩で行く。理由は特にない。

交差点に差し掛かる。人が歩いている。

人、人、人。

彼らは、本当に生きているのだろうか？

いや、生きているのだろう。

そんなことを聞いたら変人だと思われるだろう。

だが、そんなことを聞く資格すら自分にはない。

死んでいないだけの、人間には。

生きていない、人間には。

「遅かったじゃないか、かず君」

『かず君』が何処かにいるのだろうが、自分ではない。

何故そう言い切れるかというと、『かず』なんて字は自分の名前にはないからだ。

「何故無視するんだ、かず君」

どうやら、『かず君』は無視しているらしい。

だがそんなことを気にしているほど、自分は暇ではない。

「逃げるな！——一二三（にのした ひふみ）——！」

どうやら、『かず君』は自分だったらしい。

『大人しい男子高校生』の『仮面』を被る。

人は、皆『仮面』を被って生きている。

そんな話を聞いたことがある。人に見せる顔、裏の顔、真の顔。自分が被る『仮面』もまた、その一つだ。

「な、何？」

「遅かったじゃないか、遅刻するぞ、かず君」

自分を『かず君』と呼ぶ人物。

光賀 光（こうが ひかり）。

金髪碧眼、祖母がイギリス人でその地が色濃く流れているそうだ。

その顔は整っている。美少女、というより美人に入るだろう。

その体も顔にあつて、完璧なプロポーションである。

性格も良好、非を打つところが全くない。

名前の通り、光のような人物だ。

彼女は自分の通っている学校の生徒会長である。

天才、才色兼備、文武両道、完璧超人、天上天下唯我独尊、e t c .
・

数々の呼び方をされているが、そのすべての人が口をそろえて言うのは・・・

「なんで『かず君』なんですか？『最強』さん」

「『最強』ね・・・人を称号で呼ばないでくれるかな、嫌なんだよそういうの、なんか愛が無いっていうか、分類で呼んでるみたいな感じがね」

「そうですか、何で僕のことを『かず君』って呼ぶんですか？『最

強』さん」

「む・・・まだそう呼ぶか・・・」

まあいい、君の名前は数字ばかりだろう、ただそれだけだ、意味はない、

そんなことより！遅い！遅刻するぞ！」

そうか、『かず君』は『数君』か。

まあ、どうでもいいが。

「大丈夫ですよ、本鈴が鳴る前には付きます」

「それではダメだよ、かず君、予鈴が鳴る前に席に座っているのがセオリーだよ」

「そうですか、じゃあ少し早く歩きますか」

「ああ、そうしてくれ・・・っと雰囲気になされていた、

かず君、今日こそは更生してもらおうぞ」

「はあ・・・またですか」

「そう、まただ、かず君は全然更生しないな」

そう、『最強』こと光賀さんは自分を更生させようと度々、いや、しょっちゅうなんらかのアプローチをかけてくる。

「更生も何も僕、悪いことなんかしてないでしょう」

「そう言われればそうなんだが、かず君はなんか危ない感じがするんだよ」

「危ない？僕が危ないやつに見える？」

何故だ？虫だって蚊やゴキブリぐらいしか殺せないのに。

教室でも壁のシミ、もしくは空気、あるいは机と一体化しているというのに。

「いや、違うな・・・危ないじゃなくて・・・危ういか・・・」

「危うい？」

「いや、聞き返されると困るんだが・・・まあ、勘だよ勘、そんな感じがするっただけ」

「それだけですか？」

それだけの理由でいつも付きまとわれるこっちの身にもなってくださいよ

更生させるべき相手はほかにもいるでしょう、

ほら、そこにいる影山君とか」

自分が示す場所にいる人物。

影山 影鷹（かげやま かげたか）。

黒髪黒目、まるつきり純粋な日本人である。

イケメンである。身長も高く、光賀さんと並ぶと、

学校の光と闇が並んでいるような錯覚を受ける。

そんな彼は風紀委員だ。学校に乗り込んできたヤンキーのチームと

ウチの学校のチームの戦闘を全員倒すことによって止めるという偉業を成し遂げた、

というのはこのあたりではとても有名な話だ。

その大乱闘は自分も見ていた。人が十人単位で吹っ飛んでいた。

彼はいつも何かにイラついていて、みんなに怖がられている。

「刺激したら、何かまずいことを言ったら吹っ飛ばされるのではないか」と。

それゆえについたあだ名は『最恐』。

「たか君か・・・たか君は大丈夫だ」

「なんでですか？」

「あいつは私の幼馴染だ」

「へーそうだったんですか」

普通の反応、普通の返事で返す。

「反応が薄いな？・・・人にこの話をするとか概、驚かれるんだが」

疑惑の顔で自分を見てくる光賀さん。

「え？そ、そうだったんですか！？」

「なぜ驚かれると言ってから驚かれたんだ？」

「は、はは・・・驚きすぎて」

「・・・そうか・・・？」

危なかった、危つく自分の『仮面』が剥がされかけた。
『仮面』が剥がれてしまったら、とても困る。

「たかくーん！！」

光賀さんが『たか君』、『最恐』こと影山君を呼ぶ。

「ん？よお、光」

影山君が振り返る。

「ん？誰だそいつ」

「覚えていないのか？というか同じクラスだぞ、私たち」

「ん？・・・ああ、俺の前の前に座ってる奴か」

「――一二三です」

「いいっていいって、さっきのは冗談、ちゃんと覚えてるから」

そう、覚えているのだ。

影山君は、ウチの学校の全生徒のプロフィールだけでなく、ウチの生徒にかかわる人間のプロフィールすら覚えているのだ。と言っても、自分の隣にいる『最強』も普通にしていることだ。もちろん、自分にはそんなことはできない。人の名前すらまともに覚えることができない。

「で？誰が俺が更生したほうがいいって？」

「え！？・・・いやっ、そ、それは・・・」

「ん？・・・言えないのか？・・・そりゃあ言えんよな」

「影山君です」

「はつきり言うなあ、オイ」

ぺしっ、と頭を叩かれる。

吹っ飛ばない、そりゃそうか。

この人は、『最恐』なんてあだ名がついていても、この人の本質は優しさだから。

第16話『クラスメイツ（1）』（後書き）

不安になりつつの投稿。

カオルくんのクラスメイトの話でした。

もう一話続いてから、カオルくんのお買い物話に戻ります。

第17話『クラスメイツ(2)』

ウチの学校は異常がありすぎる。いや、ありすぎて困る。
特に、自分のクラスとか・・・。

教室のドアを開ける。

目の前を塞ぐ大きな体。

「お、おはよう、五里山君」

「ウホ、おはヨウ、二ノシタ、コウガ、カゲヤマ」

「うむ、おはよう」

「おう」

顔を上げる。

そこには、黒い肌、出っ張った額、平たく穴の大きな鼻、突き出た唇、

太い眉、もみあげからおでこへ一つなかりに繋がった眉。

そこにあるのは、ゴリラ顔、というか『ゴリラ』の顔そのものだ。といいか、『ゴリラ』だ。

『ゴリラ』が制服着て、二足歩行して、話している。

「前から気になってただけど・・・五里山君ってさ、話すとき
ウホ、って始めに言わないと話せないんですか？」

「話せるぞ、それにカタコトなのもわざとだし、そもそも・・・」

「やめる五里山、それ以上やるとキャラが崩れる」

「ウホ、スマン、カゲヤマ」

「うむ、それでこそゴリラ君だ」

そんなブレた会話は放っておいて、自分の席に向かう。
いや、『ゴリラ』はないだろ、そのまますぎる。
まあいいか、人のあだ名なんか。

そこにはすでに先客がいた。

自分の席で気持ちよさそうに、枕まで使って寝ている。

「ほら、起きてください、猫さん」

「うにゃ？・・・あゝ・・・お魚」

「あなたはドラ猫くわえたお魚ですか」

「違うにゃゝそこは、お財布くわえたドラ猫だにゃゝ」

「現実的ですね」

「世の中金だからにゃゝ」

「猫に小判じゃないんですか？・・・おはようございます」

「おはようにゃ・・・きつとその猫は小判の価値を理解してるにゃ」

「そうですか、じゃあ、何で使わないんですか？・・・どいてください」

「はにゃ？私の席ここじゃなかったかにゃ？・・・きつと使い道が無かったのにゃ」

「それもありませんね・・・違いますよ、隣です」

「んにゃ、ほんとだにゃ、寝ぼけてたにゃ・・・きつとそうだにゃ」

「朝っぱらから寝ぼけないでください」

「朝っぱらだから寝ぼけるのにゃ、猫は夜行性だからにゃ」

「昨日はよく眠れましたか？」

「よく寝たにゃゝ、十四時間くらい」

「しつかり、がつつり、寝てますね」

「猫は寝るのが仕事だにゃ」

「そうですか」

「ふわあゝ・・・まだ眠いにゃ、かず君先生が来たら教えて」

寝言から始まり、ボケツツコミへとつながり、話題の二重並行という荒業をなしつつ、

自分の席に座る。

・・・『かず君』がいつのまにか定着している。

『猫』さん。

あだ名の通り、猫のような人物。

常にネコ耳を装着しており、よく眠る。

さらに身体能力も猫並みである。

夜目が効き、高いところに容易に飛び乗り、音もなく走る。

魚好き、動くものに目が無い。

ここまでで良く分かるように、この学校、自分のクラスはおかしい。
はつきり言って異常だ。

『最強』と『最恐』から、『ゴリラ』と『猫』、グレイタイプの『宇宙人』、転生したものの生まれる世界が間違っている『スライム』、『ロボット』であることを必死に隠そうとする者にそれを作ったと公言する『博士』、『お化けなんていない！私はエネルギー生命体だよ！』と言い張る『幽霊』、出席しているはずなのに姿が見えない『永久欠番』、どんなことがあっても無言を押し通す『完全言語』、そいつに話しかけることを生業とする『数の暴力』、使うのはもっぱら科学的な武器の『魔法少女』etc, , , ,
・・・本当に異常だ。

教室を見回す。

隣の席には、気持ちよさそうに眠る『猫』。

楽しそうに話し合っている(?)、『完全言語』と『数の暴力』。

タイムマシンについて熱く語り合う『博士』と『ロボット』と『幽霊』と『魔法少女』。

「というか、出来たよ、タイムマシン」

「「!？」」

「今度乗せて！」

「ダメ」

「えゝなんで」

「乗ったら、タイムパラドックスやバタフライエフェクトとかで世界が変わって大変な事になる」

「うゝ・・・それなら仕方ないや・・・」

・・・な、なんだと!?

体を使った一発芸をする『スライム』と、それを見て笑う『ゴリラ』と『宇宙人』。

「かおるちゃん、じゃあまた、放課後待ってるからね」

「うん、またね・・・ってまたちゃん付け!ちゃん付けはやめて!」

「バイバーイ」

「行っちゃった・・・おはよう、みんな」

「うむ、おはよう、かーちゃん」

「うつす、さっちゃん」

「ウホ、おはヨウ、サクチャン」

「かおるちゃん、おはよー」

「・・・僕、泣いてもいいかな」

涙目だ、カオルちゃん、可愛い。

みんなの顔がほころんでいるのが分かる。

『美少女』、櫻井 薫。

この学校きつての美少女だ。

本人は、男だと言って、頑なに女であることを否定している。

家が工場で、たまに学校に来るとき、黒い油を顔に着けてくることもある。

当然、それを拭くというイベントが発生し、その『拭ってあげる』という立場をめぐり、

度々大乱闘が行われていたりする。

うん、いつもながら皆仲が良くて、異常で、楽しいクラスだ。

第17話『クラスメイツ（2）』（後書き）

カオルはとんでもない学校に通っていました。
異常事態に見舞われているのに、割と冷静なのはそのせいです。

第18話『お買い物・・・武器屋にて』（前書き）

総PVアクセス数三万突破しました。
お読みいただき、ありがとうございます。

第18話『お買い物・・・武器屋にて』

むう～～・・・どれにしよう・・・

「カオル！早く決めて！」

「そうは言ってもね、僕こんなの見たのも初めてなんだよ」

「そんなの、適当でいいから」

「そんなのって・・・さすがに適当じゃダメでしょ」

「も、早くしてよね！私、外で待ってるから！」

「うん」

僕は今、買い物の続きで武器屋に来ている。

正確には『ガラタクの武器防具店』だ。

買い物の続きで、身を守るためにそういうモノもいるということで購入に来た。

それで武器を選んでいるところだけど、全くもって何がいいのか分からない。

剣？・・・剣術なんてできない。

ナイフ？・・・持ったことがある刃物は包丁位だ。

杖・・・は無かった。

斧？・・・無理だー！

結論・・・僕にはどれも使えない。

「ねーまだー？」

外から声が掛かる。

「んゝ・・・コレにしよう、おじさんコレください」

「ん？嬢ちゃんコレだけでいいのか？というかコレ持てるのか？」

「嬢ちゃんじゃないです、僕には魔法があるのでコレだけでいいし、ちゃんと持てますよー」

「おう、嬢ちゃん魔法が使えるのか！！だが持てるだけじゃだめだぞ、

ちゃんと使えないとな！！」

「むゝ・・・頑張ります・・・」

「頑張れよ！可愛い嬢ちゃんが店に来たんだ、ソレの値段は負けてやる、

銀貨十枚でいい」

「本当ですか！？ありがとうございます　！！」

銀貨を十枚出す。

負けてくれたと言ったけど元の値段はどれくらいなんだろう？

でも、それを聞くのは野暮な気がする。

もう一度お礼を言って店を出よう。

「ありがとうございます!!」
「ああ、また来な!」

店の外に出ようとしたとき、入ってきた人とぶつかってしまった。

「す、すいません!」

頭を下げ、そして顔を上げる。

「ああ?ん、おお君可愛い顔してんじゃん」

あ、コレ面倒なタイプだ・・・。

「いいよいいよ、君この村の娘？俺、冒険者でさ〜この村に来んのはじめてなんだよね、ちよっと案内してくんない？」

そう言って、手を伸ばしてくる。

コレは、ナンパだろう多分。

彼が言う『冒険者』は、魔族と人間種の戦争後にできた職業で、国経営の職業凱旋所、ゲームで言うなら『冒険者ギルド』で働く者のことだ。

『冒険者』は国や民間人からの依頼を受けて働く派遣社員みたいなものだ。

いや、今はそんな説明をしている場合じゃない。

ここでわざわざ『冒険者』を名乗るということは、言外に、

『俺は強いんだぞ』と脅しかけているということだ。

僕は、ひらりと『冒険者』の手をかわす。

「すいません、僕もこの村に来たばかりで、あまり詳しくありません、

ですから案内ならほかの人に頼んでください」

というか、今日はじめて来た。

僕は踵を返し店を出・・・

「ちょっと待てよ」

ようとしたら、肩をつかまれた。
痛い、結構な力だ。

「痛いっ、何するんですかつ、っつ、離してくださいー!!」
「下手に出たらしい気になりやがつて、ちょーリーと案内しても
らうだけつつてんだろ？その先でナニをするかまでは言っ・・・ぎ
やあああ」

『冒険者』の言葉が途中で途切れる。
それは何故か？

それは、僕が投げ飛ばしたからだ。
悲鳴の方は知らない、店の観音開きの扉の向こうで見えないからだ。
『投げ飛ばしたからだ。って何！？』と聞かれるかもしれない。
僕には悩み事がある。それは初めに言っただけ、それに伴うモノ
も。

そう、ナンパだ。僕はよくナンパされていた・・・男に。
その時たまに、今みたいに暴力に走ろうとする輩がいた。
その度に何処からか、クラスメイトの『最強』こと光さんや、
『最恐』こと影山君や、担任の『先生』が飛んできて助けてくれた。
でも、それじゃダメだと思った僕は、『最強』と『最恐』、

その二人に『僕を強くしてください』と頼んだ。

光さんは『おお、そうかそうか、強くなりたいか』と快く了承してくれて、

影山君は『どれくらい強くなりたい？』と聞いてきて、『自分の身を護れるぐらい』

と答えたら『そうか』とニヤリと笑いながら頷いた。

そうして、僕の強くなるための特訓は始まった・・・。

血反吐を吐く・・・ような事は無かった。

始めのうちは筋肉痛とかが辛かったけど、そのうちそれも無くなった。

光さんと影山君が教えてくれたのは、力をつけるための筋トレと、護身術。

どちらも僕が知らないものばかりでとても楽しかった。

そして、僕は暴力を振るってくるような輩を撃退できるぐらい強くなった。

とまあ、長々と説明したけれど、僕はそれなりに強いのだ（えっへん）。

「おー、やるなあ嬢ちゃん、もうちょっとしたら今の奴叩き出す所だったんだがな、

大丈夫か？怪我はないか？」

「大丈夫です、ちょっと肩が痛いですが・・・」

「そうか、嬢ちゃん、コレもおまけだ」

ガラタクさんが何かを放り投げた。

「え？ちょーつとつと・・・なんですかコレ」

「お守りだ、まあ、嬢ちゃんにはまだいらなと思うがな」

「へー・・・お守りかあ、コレなんのお守りなんですか？」

交通安全とかかな？でも、魔法とかがあるから精霊の加護・・・
みたいなの？

ガラタクさんはニヤリと笑って言った。

「安産だよ」

第18話『お買い物・・・武器屋にて』（後書き）

どうも、真島 真です。

後書きは何を書いたらいいんでしょうか？

よく見る『感想・ご指摘お願いします』

みたいなことでしょうか？

それとも『ネタ切れだー！ー！』

でしょうか？

正直私は文を書くのが苦手です。

話を考えるのも苦手です。

設定を考えるのも苦手です。

はい、全部苦手なんです、すいません。

ですので、この小説を楽しくするために、

どうか皆さんのお力をお貸し下さい。お願いします。

第19話『闇の中で』（前書き）

視点変更が多くてすいません。
でも、まだまだ増える予定です。
今回は、ヒフミ視点です。

第19話『闇の中で』

暗く明るい闇の中。

上も下も右も左もない黒の世界。

見渡す限り、人、人、人。

いつも見ているような風景。

だが、いつもと違い人の色が濃い。

人が、生きている。

．．．．．いつも？

．．．．．いつもって何？

．．．．．そういえば．．．

僕は誰？

私は誰？

俺は誰だ？

ここは何処？

ここはどこ？

ここは何所だ？

暗い・・・

明るい・・・

黒い・・・？

「ヒフミがどうしてここに？」

「あれ？なんでひーちゃんがこんなところに？」

「カズ、おめえー何でこんなところにいるんだよ？」

ヒフミ？・・・変な名前・・・なのかな？

ひーちゃん？・・・って誰のこと？

カズ？・・・誰だ？

「ヒフミ、何言ってるの？」

「キミはひーちゃんでしょ？」

「何寝ぼけたこと言ってるんだよ、カズ」

ヒフミ・・・それが僕の名前？

ひーちゃん・・・私はそう呼ばれているの？

カズ・・・俺の名前か・・・？

「そうだよ、ニノシタ ヒフミ」

「それが、キミの名前だよ、『ひーちゃん』の『ひー』は『ヒフミ』の『ひ』」

「それで、『カズ』はお前のあだ名で・・・」

ニノシタ ヒフミ・・・ああ、思い出した
ひーちゃん・・・そう呼ばれてたっけ？

カズ・・・の説明はいいや・・・なんとなく分かるから・・・

「じゃあ、もしかして」

「私たちのこと・・・忘れちゃってる？」

「いらんって・・・本当に要らないのか？しないぞ？説明」

もしかして・・・昔飼ってた犬のポチ？

近所に住んでた猫のタマ？

よく狩ってたオッサンの五郎？

「違うね」

「違うわね」

「ちげーよ！なんだよ、狩ってたオッサンって!？」

違うか・・・

やっぱり？

え？・・・ウソだろ？

「僕は××××」

「私の名前は」

「合ってる自信あったのかよ！？俺は○○○○」

僕の名前は・・・

ってみんな知ってるのか・・・

ていうかさっき教えてもらったしな

そうだ

聞きたい事があつたのよ
ここはなんだ？

「え」と・・・」

「ここは・・・」
「・・・死後の世界だ」

死後の・・・

・・・世界！？

俺は・・・俺は死んだのか？

「分からない？」

「私たちは死ぬ時の記憶があるの」

「覚えてないか？」

ちょっと待って・・・思い出してみる・・・
・・・うゝん・・・思い出してきた・・・
いつものように帰っていて・・・いつもの学校の帰り道・・・

そしたら・・・いつもみたいに
『最強』と『最恐』の二人が来て・・・
たわいもない会話をして・・・

そしたら・・・！？

黒い・・・黒い・・・ああ・・・
あ、穴が・・・

「穴が？」

「穴？」

「穴がどうしたんだ？」

うう・・・うああああああああああああああああああああ
あああ！！

ああああああああああああああああああああああああああ
ああっ！！

おおおおおおああああああああああああああああああああ
あああ！？

「！？」

「どうしたの！？ひーちゃん！？」

「おい！大丈夫か！？」

ああああ・・・

・・・あああ・・・

ああああああ・・・

「大丈夫？」

「何が・・・何があったの？」

「・・・・・・・・（言う事が余ってねえ）」

・・・・・・・・うん

穴が・・・穴がね・・・

歩いてたらこう・・・

いきなり何もない所から出てきて・・・

その穴を見て・・・

ヤバイ！！って思ったんだよ・・・

でも・・・

でも体が動かなくて・・・だけど『最強』と『最恐』は動けてたみたい

・・・・・・・・んで呆然としてたら・・・

その穴から・・・ブウワ~~~~って

グワァ~~~~って腕みたいなのが沢山出て来て

その腕が俺に迫ってきて・・・

後ろから『最強』さんが何か叫んで・・・
『最恐』くんが動くのを感じて・・・
それで・・・

「気付いたら・・・」
「ここに居たと・・・」
「んゝゝゝ・・・それだけじゃ死んだか分かんねえな」

「・・・そうだね・・・分かんないね」
「なんかそれじゃ死んだというより」
「取り込まれた・・・もしくは、引き込まれた、だもんな」

「僕達には記憶があるんだよ」
「死ぬ時の記憶がはつきりと」
「例えば、火に焼かれた！！とか、刺された！！とかな」

そう・・・なんだ・・・
みんな・・・
苦しい思いをしてたんだな・・・すまん

「なんで君が謝るのさ」

「私たちのこと憶えてないんでしょ？」

「なら謝る理由も無いだろ？」

いや．．．謝らないといけない気がする．．．ごめん
皆．．．ごめんなさい

・
・
・
本当にすまなかった

「そんなに謝られても……君は悪くないよ……（本当に）」

「……………」
（本当に忘れたんじゃないのかも）」

「……………（心の奥で自分が悪いって思ってたのかもな）」

[illegible]

「ほつ、ほら！！そんな湿っぱいのはなし！！」

「まだ死んだって決まったわけでもないんだし！！」

「たまにいるんだぜ、生き返るやつ」

・・・うん

・・・分かった

・・・生き返る？

「いや、正確には分からないんだけどね・・・」

「まだここに來て間もない人とか、ある程度時間がたった人とかが
たまに・・・」

「光に吸い込まれるんだよ」

へえ~~~~・・・

そうなんだあ~~~~・・・

でも後のは成仏なんじゃないか？

「それはないよ」

「よく考えてみて？」

「ここが死後の世界だぜ？」

・・・！？

本当だ・・・

・・・気が付かなかった

「・・・あ」

「噂をするところ・・・」

「・・・ああ、来たな」

何？

来た？

何が？

カツ！！と降り注ぐ強烈な光。

・・・え？

ちょっと待って！！

まだ話したいことが・・・話さないといけないことが！！

「大丈夫だよ」

「またここに来たとき話せばいいんだし・・・」
「俺等はお前から・・・離れられないしな」

光に吸い込まれる身体。

変わらず僕を引っ張り続ける強力な力。

・・・この感じ

初めてじゃない!?

もしかして・・・っ!?

忘れていた記憶がフラッシュバックする。

『みんな』の記憶。

自分の周りで死んでいった『みんな』の記憶

僕は・・・!?

私は・・・!?

俺は・・・!?

自分は・・・!?

『みんな』に言わなきゃならないことが!!

「・・・やっと思い出したか」

「・・・でも、またお別れね」

「・・・ああ、またな」

『みんな』・・・!!?

そして、光がヒフミを取り込み、
強烈な閃光を発し、それが消えると、
そこには、初めから何もなかった様な、
暗く明るい闇が残っているだけだった。

第20話『目が覚めて・・・』

「・・・『みんな』!!」

手を伸ばすが、そこにあるのはみんなの姿ではなく、あの闇の世界でもなく、

知らない天井だった。

知らない天井・・・。

ああ、きっとアレを引き起こした張本人の家かなんかだろう。

そんなことに興味はない。いや、それなりにあるが。

それよりも・・・。

「『みんな』・・・。」

（・・・あれ？ヒフミ？）

（ホントだ、やつほー）

（なんだ？どつから声が？）

「うえっ!？」

声がある・・・さっきも出会えないと思った『みんな』の声が。

「『みんな』？・・・どこにいるの？」

（・・・さっきと同じとこだけど？）

（皆でひーちゃんのお話してたとこだよー）

（ああ、変わらなくなつたあの世・・・死後の世界だ）

「『みんな』の音が聞こえるんだけど？」

（うん、僕たちも）

（ひーちゃんの声、聞こえてるよー）

（不思議だな）

「不思議だ・・・っていや、それどころじゃない気がする」

（へ？）

（うに？）

（なにが？）

「そりゃあ・・・」

（そりゃあ？）

（ん〜？）

（なんだ？）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

（思いつかねえのかよー！！）

うん・・・なんだろう？大変な気もするし、そつでない気もする・・・

・
みたいな？そんな感じ？

(・・・・・・・・・・)

(・・・・・・・・・・)

(みたいな？じゃねえよ！！)

いや、そんなこと言われてもね？ほら・・・・・・・・ね？

(・・・・・・・・ねえ)

(・・・・・・・・さっきから)

(ね？じゃねえよ！！大体お前いつも

考えてるような顔して何も考えてねえじゃねえか！！)

それは酷いよ！！自分だつてそれなりに考えてるよ！！
今月の食費の事とか、バイトの事とか！！

(ちょっと待つて二人とも！！)

(止めて！！)

(この苦学生が！！・・・って、なんだ？)
「なに？」

(よし)

(えーと・・・じゃあひーちゃん、何か考えてみて)

(どうしたんだ？いきなり)

「考えるって何を？」

(なんでもいいよ)

(好きなものとか、好きなものとか、好きなものとかでいいよ)

（それ選択肢が一つしかねーじゃねーか！！）

「それ選択肢が一つしかないよ!」

(ちよつと黙つてて)

(静かに)

(
・
・
・
すまん
)

「ごめん」

考える・・・何を考えようか？

好きなもの？・・・別にないな。

よし！！何も考えないでおう。

[illegible][illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{pmatrix}$$

(. . . うん)

(・・・聞こえるな、声が)

「え！？嘘！？」

もしかして考えてることが筒抜けなのか！？

いや、そんなはずは無い！！
自分は何も考えないはずだ！！

(いや、凄いと思うよ？考えてって言われてるのに何も考えないなんて・・・)

(さすがひーちゃん)

(でも・・・その前から全部聞こえてるんだよ)

ぬわぁ～～！！猛烈に恥ずかしい！！

(ぬわぁ～～！！猛烈に恥ずかしい！！)

(ぬわぁ～～！！猛烈に恥ずかしい！！)

(ぬわぁ～～！！猛烈に恥ずかしい！！)

「やめて！！復唱しないで！！」

数分間『みんな』からのいじめに悶絶していたら、自分の耳が物音をとらえた。

その音はだんだんこの部屋に近づいて来る。

ちよつと黙つて

（なに？）

（誰か来たりしたの？）

（ああ、分かった）

そして、扉が開かれる。

そこには、『最強』さんとメイド？さんがいた。

「『最強』……さん？」

「おお！！起きたか！！カズ君！！」

抱きついてくる『最強』さん。

ちよつと苦しい。

大分苦しい。

とても苦しい。

「『最強』さん、どうしたんですか？」

「良かった！！成功した！！」

「成功？・・・う・・・ぐ・・・くる・・・しい」

「カズ君は死にかけてたんだ！！」

死にかけてた？

うん、たぶん「死にかけ」じゃなくて「死んでた」よ？

それより今の方が「死にかけ」なんだけど？

そろそろ息が・・・

「良かった！！本当によかった！！」

そう言ってさらにきつく絞められる。

「・・・う・・・あ・・・『みんな』すぐそっちに行くよ」

・・・ガクッ

「『みんな』久しぶり」

「久しぶり、何年ぶりくらい？」

「この前会ったのがついさっきのように思えるよ〜」

「おう、久しぶり、なんだ？十分ぶりくらいか？」

第21話『弾む話と進まないストーリー』

「あれ？カズ君？カズくくくん？・・・あつ、死んでる！？
戻ってこい！！戻ってこいカズ君！！・・・せいっ！！」

カッ

「眩しいなあ」
「確かにちよつと明るすぎるね」
「電気の無駄遣いだよくくく」
「そうだな、いや、電気がどうか分かんねえがな」

カッ

「良かったー！！死んだかと思つたよ！！」
「今確かに死んでましたよ？僕」
「うつ！！・・・すまない」
「まあいいですけどね、何回か経験ありますから」

「良かった・・・って、良くない全然良くない！！
何？死んだ経験が何回あるだと？」

「ええ・・・さっきまで忘れてたんですね、
今のでまた一回増えました」

「ぐっ！！・・・すまない・・・というか許してないだろカズ君」
「それで？」

「それでは何だ？」

「この状況ですよ・・・何か知っているんでしょう？『最強』さん」
「あ、ああ、この状況のことな、ちよっと待っていてくれ」

そう言つて『最強』さんが後ろにいるメイド？さんに何か話しかける。

そしたら、メイド？さんが部屋から出て行った。

「＜空間遮絶＞・・・これでよしと」

「『最強』さん、何なんです？今の」

「魔法？」

「僕に聞かないでください」

「魔法・・・」

「言葉尻を濁さないでください」

「魔法！？」

「驚かれても困ります、っていうかそれはそっちのセリフです」

「さすがだなカズ君、起きたばかりなのにツツコミが冴えている」

「起きたばかりなのに突っ込まさないでください」

「厳しいなカズ君は、ご飯を用意して息子の帰りを食卓で待つお母さんの様だ」

「なんか優しそう」

「ただしその間お父さんも娘も食卓から動くことを許されない」
「厳しい！ー！というか怖い！ー！」

「息子は34歳・独身・フリーター・持っている夢は大きい」
「しかも悲しい！ー！」

「娘は再婚した夫の連れ子・25歳・独身・OL」
「さらに盛ってきた！？」

「息子と娘は幼馴染だった」
「なんか複雑！ー！」

「そして現在両思いだ」
「家族間で禁断の恋が！ー！」

「しかも実話」
「重い！重いよ！ー！『最強』さん！ー！」

「だけど先が気になる！ー！どうなったんですか！？息子と娘は？
お母さんは？お父さんは？」

「その娘と息子が私の両親だ」
「なにiiiiiiiiiiiiiiii！？」

「まあ、最初こそ揉めたらしいが、今ではいい思い出そうだ」

「今明かされる『最強』出生の秘密！ー！」

「このネタは良い値で売れるかもしれない。」

「カズ君は『新聞部』には黙っていてくれるかな？」

『新聞部』、ウチの学校で学校新聞などを発行している部という事になっている。

表向きには・・・という前置きが付くが。

その実態は教師も生徒も関係なく、

暴いた過去や痴態などを校内で振り撒く、

学校一の『嫌われ者』だ。

『新聞部』には『新聞部』のポリシーがあるらしいが・・・

『新聞部』でない自分は知らない。

「いいえ」

「カズ君は『新聞部』には黙っていてくれるよな？」

「良い値で売れそうなので断ります」

「カズ君は『新聞部』には黙っていてくれるよな？」

「きっとこのネタは一万円ぐらいで売れます」

「もうちよつとするんじゃないか？」

「それ位が妥当じゃないですかね？」

「自分で言うのもなんだが『最強』のネームバリューは凄いぞ」

「そうですね・・・そのことも考えないと・・・」

「売るなよ？」

「え？売りますよ？」

「売ったらその時は潰すからな、

具体的に言うなら、この腕で、物理的に」

ふざけ過ぎた。

物理的につぶされるのは嫌だ、まして『最強』さんに潰されたらミートペーストになってしまう。

これは冗談なんかじゃない、本気だ。

『最強』さんの腕力は、異常だ。

ホームに落ちた女の子を助けるために、電車を受け止めるぐらいなのだ。

腕力どころの問題じゃない気もするが。

まあ、『最強』の名はダテじゃないという事だ。
潰されるのは嫌なので話をそらす。

「・・・そんなことより！！話がずれてます。

『最強』さんが魔法を使うの初めて見ました。凄いですね、魔法」

「『が』？もしかして、お前は魔法を見たことがあるのか？」

「？『魔法少女』が居るじゃないですか、ウチのクラス」

「いやいや、それはただのあだ名だろう？」

「何を言ってるんですか、

そのあだ名通りのあなた言いますか『最強』さん、

じゃあ、『ゴリラ』の五里山君は何なんですか？」

「ゴリラっぽい人」

「なんですか？『っぽい』って、

じゃあ『スライム』の洲羅（すら）君は何なんですか？」

「スライム・・・もしかして、ウチの学校・・・

ウチのクラスっておかしいか？」

「おかしいですね・・・ってまた話がずれてます」

「そうか・・・ウチの学校はおかしかったのか、

ん・・・どこまで話したっけ？

ああ、なぜカズ君のあだ名はカズ君なのか？だったな」

「違います」

もういいよ!!いつまで引っ張るんだ!!

(話、進まないね)

(うん、でも楽しそう)

(・・・もしかして俺たち忘れられてないか?)

第21話『弾む話と進まないストーリー』（後書き）

何でだろう？

話は弾むのに話が進まない。

会話が八割を占めている。しかも、ボケとツッコミの応報がほとんど。

第22話『最強』と『力』

「よし、それじゃあ、話を元に戻して、宇宙誕生について話そうか」
「元に戻ってません」

「そうか、なら鳴海の渦巻の中心にかかる力について・・・」
「もういいです、疲れました」

本当に疲れた、この人は頭が良いのにその能力を発揮する場所を間違えている。

「（１）疲れた（２）憑かれた（３）突かれた（４）搗かれた、さあどれ？」

「１番です」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・残念！！正解は２番です！！」

「何だって！？僕は憑かれていたの！？何に！？」

まあ、心当たりは無い訳ではないが・・・

(む・・・それは僕たちの事かな?)

(ひーちゃん酷い!!)

(俺達は幽霊なんかじゃないぞ・・・まあ、死んじやいるが)

「そうだ、酷いぞカズ君、人を幽霊扱いするんじゃない」

べ、別に幽霊扱いなんかしてないんだからね!!

(誤魔化した・・・)

(誤魔化したね・・・)

(ちよつと待て、おかしいぞ)

「何がだね?」

なにが?

(なに?)

(へ?)

(俺たちの会話はカズの考える事が聞こえるからできてるだろ?)

「そうだな」

そう・・・だったね・・・

(うん)

(それで?)

(そうすると・・・おかしい所があるんだ・・・

さつきから・・・何度も・・・)

「何所だ?」

ど・・・こ・・・っ!??

(・・・!!?)

(・・・!!?)

(そう、声に出して会話している奴がいるんだよ・・・)

「ふむ、それは私の事だな」

「『最強』さん!?人の考えてることを軽く読まないでください!

」

「それより誰だ?さつきからカズ君と話してるのは」

「友達ですよ」

「そうか、友達か」

「何所にいる？」

「死後の・・・世界？でいいのかな？」

「そうか、うむ、そういう事もあるのだな。」

うむうむ、私は光賀 光、カズ君のクラスメイトだ。

職業は学生兼二代目勇者、好きな物はラムステーキ、

嫌いな物は、というか事は割り箸がうまく割れないこと、

得意技は『スーパードラゴン』だ。

宜しく頼む」

（あ、はい、こちらこそ宜しくお願いします。

僕は××××です、ヒフミと同じ施設にいました。

職業は冥界組合事務部長です。

好きな物はトリュフのホイル焼きで、

嫌いな物はピータンです。

あ、えと、得意技は『昇○拳』です）

（わたしは だよ～～よろしく～～。

ひーちゃんと同じ施設にいたよ～～。

仕事は冥界組合会長の秘書でエンマさんのお手伝いをする事。

好きな物はとんかつパフェとキャビアのクラッカーのせで、

嫌いな物はハラペーニョソース、

得意技は『骨はずし』です）

（俺は○○○○だ。

カズとは同じ施設だった。

今は冥界組合営業部長兼宴会部長をしている。

好きな物はフォアグラ井、

嫌いな物は・・・特に無いな。

得意技は『ライダー○ツク』だな）

「それでだな、死後の世界？であつてゐるのか？

どんな感じなんだ？本当に死んだのか？

カズ君は昔どんな感じだったんだ？」

（意外とここは快適なんですよ、暑くないし、テレビとか色々あるし）

（死んだのはホントだよ）私は森で熊さんに襲われて死んだんだよ）

（カズは昔『冥探偵』と仲良かったな、知ってるか？

あのドラマ『冥探偵』困難な事件簿』ってヤツ、

アレ実は実際にあつた事件だったんだよ）

「アレか！アレよく見るぞ！！大ファンだ！！

そうだったのか！！ビックリした！！でも『呪いの館密室殺人事件』

の『犯人は本当の悪霊だ』ってのは流石に嘘だろう？」

（あ、それホント）

（うん、ひーちゃん取り憑かれて天上歩いてたりしてたよ）

（まあそれは事件後のオチみたいな感じでまとめられてたけどな）

「いやー、カズ君、大変な思いをしてたんだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？どうしたんだ？カズ君」

「あ、いや・・・別に・・・うん」

いや、ツッコミどころが多すぎる！！

『みんな』の得意技が必殺技なのは、知ってたからいいけど・・・

『みんな』が何かあつたときいつも必殺技をのっけから連発してたのは

見てたからいいけど・・・いや、ダメだけど！！

『最強』さんの得意技はダメだ！！

フ○ーザとその兄貴が使ったヤツか！？

それとも、セフィ○スのヤツか！？

どっちにしる星が壊れるヤツだ！！

しかも『みんな』の職業なんなの！？

冥界組合って何！？しかも結構偉いっぽいし！！

『最強』さん、二代目勇者って何！？

しかも『みんな』の好きな物が世界三大珍味ってどういうこと！？

「ああそうそう、私たち＜召喚＞されたんだ」

「ああそうですか・・・ってんなわけないでしょ！！

いや、そうじゃないかなー！？って思ってたけど！！

勇者ってなんですか！？」

「勇気ある者の事だな」

「ですよー」

「そうだな」

「って違う！！なんで勇者やってるのかってことですよ！！」

「私は勇気があるからな」

「そうですね！！そうでしたね！！確かにあなたの勇気は凄いです

！！

だがそれも違う！！なぜ職業が勇者なのかってことです！！」

「＜勇者召喚＞でこっちに来て勇者になったからな」

「はっ」

「なぜ鼻で笑った！？」

「あ、いや、自分もついにここまで来たかあ（チクショウ）、思
いましてね」

「チクショウだと？」

「いや畜生です」

「変わりがないぞ！？」

「そうですね、どっちにしろ同じことです」

「同じことって酷いなカズ君！！

・・・カズ君、なんか目が覚めてから変だぞ？」

「へ？」

「いつもと雰囲気が違う」

「ん~~~~・・・ああ、そうか」

『大人しい男子高校生』の『仮面』を被る。

「これで、どうです？」

「・・・いつものカズ君だな・・・どういうことだ？」

「説明するのが難しいですね・・・」

「じゃあ、説明はいいからもう一度見せてくれ」

「はい」

『大人しい男子高校生』の『仮面』外す。

「さっきのカズ君・・・いや、これが元のカズ君か」

「そういう事です」

「ふむ、面白いな、他は出来るか？」

「出来ますよ」

『テンション高めの男子高校生』の『仮面』を被る。

「どうツスカ？」

「ほう、話し方まで変わるのか」

「ハハッ！ー！そうなんスよー！ー、イヤお前は何モンだっつてね」

ウザい感じがしないでもない。

『テンション高め男子高校生』の『仮面』外し、
『最強』の『仮面』を被る。

「ふむ、それは私か？」

「まあ、見た目はそのままだし本物の十分の一の力しか出ないがな」

「要するに、雰囲気と話し方、それに少しの力を真似るとい事だな」

「うむ、そうい・・・うこ・・・と・・・だ・・・な・・・
ガハッ」

「どうした！？カズ君！！」

急いで『最強』の『仮面』を外す。

「ふっ・・・うつ・・・ふう・・・はあ・・・はあ・・・」

「大丈夫か？」

「・・・だい・・・じょうぶ・・・です・・・はあ~~~~」

「何があつたんだ？」

「調子に乗りすぎました」

「うん？」

「あなたの力が強すぎるという事ですよ『最強』さん、
十分の一の力でも、体が耐えられなかったという事です。
本当にあなたは人間ですか？」

「失礼な！！私は人間歴何年だと思う？」

「五百二十年？」

「そうだ！！五百二十年だ！！」

「違う！！十七年だ！！十七年間も人間として生きてきたんだ！！
それなのに人間ではないと言われるのは心外だ！！」

「ク。プトン星人かも」

「スー。ーマンか私は！！」

「それを言うならスーパードウ。ンでしょう・・・」

ふう、スーパードウ。ンとスー。ーマンの違いが分からないなん
て、

期待外れですよ『最強』さん・・・・・・まったく・・・・・・」

「何故そこまで呆れられる！？」

「今私に悪いところあったか！？私が悪いのか！？」

「そうですよ」

「肯定した！？」

「あなたは超人じゃない、もう超人の域すら超えてるよ・・・・った
くっ！！」

「カズ君、ただ口が悪いキャラになっているよ！！」

「ああ？なんだって？もういつペン言ってみな」

「ガラが悪いキャラになった！？」

戻ってくれ！！私が悪かったから、昔のカズ君に戻ってくれ！！」

「そう簡単に俺様のキャラが戻るとでも思うのか！！」

「愚民めが！！フハハハハハハア！！」

「良く分からないキャラになった！？」

「何だこの安定感の無さは！？」

「あゝゝゝ・・・飽きた、もういいや、ふざけるのはここまでです」
「飽きただと!？」

「あ、キャラが定まらないのは元からです」

「まだキャラが定まっていなかったのか!？」

「キャラが定まらないキャラが居てもいいかと・・・」

「良くない!! 疲れる!! 誰がとは言わないが疲れる!!」

「今ここに、勇者or魔王or村人or商人or魔物or冒険者or吟遊詩人or

魔法使いor僧侶or古代人or賢者orその他諸々が生まれる
!..」

「選択肢が多すぎる!! しかも最後面倒になってまとめただろう!!」
「..」

「そしてどれも選ばない!!」

「選べよ!!」

「だが断りもしない!! が、進んで選びもしない!!
選んでもすぐに変える!! それが自分」

「ただの優柔不断だ!!」

「そう!!..その通り!!..」

「自信満々だ!!..それはダメだろう!!..少なくとも胸張って言う事
じゃない!!..」

「そう・・・そのとおり・・・ううっ」

「うむ・・・なんか・・・すまなかった・・・」

第22話『『最強』と『力』』（後書き）

『骨はずし』・・・時代劇・必殺仕置。人の必殺技

第23話『状況報告はサクリと』

「＜召喚＞されて、しかもそれが＜勇者召喚＞だっていう事は分かりましたが、

それ以外が全く分かりません」

「そうだな、全く説明していないしな」

「あの、穴と黒い腕みたいなのが＜勇者召喚＞と関係あります？」

「うむ、まさにそれだな」

「アレに引き込まれて＜召喚＞ってことでいいですか？」

「うむ、アレが出て来て私とタカ君はすぐに動いて、

アレを撃退しようとしてたんだがな、カズ君が引き込まれてしまつて、

引き込まれたカズ君を、追って穴に飛び込んだんだ」

「アレを撃退って・・・どうやって？自分は動けずらしなかったのに」

「普通に殴って」

うん、まあそんなこんなで『最強』さんと『最恐』君と自分はここに来たらしい。

自分が寝ている間に、騎士との対決や、お転婆なお姫様や、王様との謁見など、

所謂、王道的なイベントは全て網羅したらしい。

そして、今のところ元の世界に帰る方法は分からないらしい。

分からない。知らないではない。『最強』さんだけなら帰れるよう

だ。

流石『最強』。だが、自分や『最恐』君がいるとなると話は変わってくる。

複数人で世界を渡るといふのは危険が大きいらしい。

「あれ？　そういえば、『最恐』くんは？」

「タカ君か、タカ君は出て行った」

「何所に？」

「北」

「そんな漠然とした答えが返ってくるとは思ってませんでした」

「ああ、いや、北の辺境に村があつて、そのそばの森に『賢者』がいるらしい、

その『賢者』が帰り方についてなにか知っているのではないかという事で、

飛び出していった」

「ふ~~~~ん」

「うむ、それで今私たちは人質としてここに居る」

「はあっ！？　どういうこと！？」

「いや、表向きは人質じゃないがな、まず私は人質にするには強すぎるし」

「そうですね、拘束するのは絶対に無理ですね」

「ここでカズ君の登場、カズ君が人質にされてしまったという事だよ」

「ああ~~~~死んでる間にそんな事になつてたのか~~~~」

「うむ、カズ君が人質にされてしまつては、私もここで勇者として働かないといけないのだよ」

「働くんですか・・・何するんです？　そもそも勇者の仕事ってなんですか？」

「それが、何も無いのだよ、することが」

「魔王退治は？」

「魔王は孫が大好きなおじいちゃんだった」

「それは・・・倒しちゃったらダメですね」

「だが、その好々爺をここの王は倒せと言ってくるのだ」

「どうするんです？」

「今は一応訓練中という事になっているが、いつか倒せと言ってくるだろう。」

よって、目標はそれまでにここから脱出する。という事になる」

「もし帰り方がそれまでに見つからなかったらどうするんです？」

「その時は、その時さ」

そう言って『最強』さんは笑った。

「うむ、そういう事で状況報告は終わりだ」

「ここまで長かった・・・本当に・・・」

「それはまあ・・・すまなかった・・・」

「何故ここまで長くなってしまったのか？それを知る者はもう、いない」

「いや・・・それはどう反応したらいいんだ？」

「総スルーで」

「何故言った？」

「ノリで」

「ノリか、ノリなら仕方ないな」

「仕方ありませんね」

「うむ・・・・・・忘れていた!!」

「何おう!？」

「字がちよつと違うぞ」

「何を!？」

「そうだ・・・王様に謁見しなければならないのだった」

「孫が大好きなおじいちゃんの国に攻め込もうとしてる王様に？」

「そうだ」

「ええ～～～」

「イヤかもしれないが、仕方ないのだ」

「挨拶して、んじゃ!!じゃダメ？」

「ダメだな」

「ワタシ、コトバ、ワカリマセーンでは？」

「まあ多分それでいい」

「いいんだ!？あ!!そう言えば言葉は？」

「全然違うな、英語、フランス語、中国語、日本語とか、私たちの世界の

言葉全てを全部混ぜたような言葉だった。

意思の疎通は重要だからな、私とタカ君はすぐにマスターした」
「すぐにつてどれくらい？」

「十分」

「早っ！！無理っす、それは無理っす。自分、英語とフランス語とドイツ語と」

韓国語と中国語と日本語で精一杯です！！」

「めちゃくちゃ話せるじゃないか・・・」

「ソレはもう、文字通り命懸けでしたから！！」

「胸張って言わないでくれ、こっちが悲しくなってくる」

「マフィア映画の内容が、それはもう分かること分かることったら・・・」

「マフィアか・・・良く抜け出せたな」

「死体袋に入られて海にポイツとされました」

「死んでるじゃないか」

「ええまあ」

「照れるな！！」

「その時が五回目ぐらいですね、小学五年生の時ですかね」

「マフィアに殺される小学五年生ってどうなんだ」

「まあ、そんなことがあっても・・・良くないですね、うん、良くない」

「自己完結した！？」

「とまあ、言葉は命が懸つてたから憶えた様なものなので、普通に勉強しても、覚えられる気がしません」

「はあ、ダメだなカズ君は、カズ君はダメだな」

「二回も言われた！？」

「そんなカズ君のために私がとっておきの魔法をかけてあげよう」

「たすけてー！！ドラ。もん！！」

「ドラじゃないな、勇者だ」

「勇者様！！お願いです！！助けてください！！」

「よおーし！！いくぞ！！＜言語理解＞！！」

「わあー！！・・・って何もありませんね
光とか、エフェクトが、地味ですね」

「そうだな・・・よし!!<光>よ!!」

「目が!!目がああああ!!」

「すまない・・・強すぎた」

第24話『王様への謁見』

衛兵っぱい人が叫ぶ。

「王様！！勇者様がお出でになりました！！」
「うむ、通せ」

無駄に豪華な扉が開かれる。

その先には真っ赤な絨毯、ものすごくフカフカしそうだ。
更にその先には、これまた豪華な玉座、そこに座る人物が
その玉座の主であり、この国の主である王。

アビヤヌス・ソロモン・サトー。

サトーって！！

と思ったこともあったが、『最強』さんが二代目勇者であったこと
から、

初代勇者がいることは、分かっていた。

流石に勇者をしてたというサトーさんが、

王様になっていたのには驚いた。

この王は、その初代勇者サトー・イチローの息子らしい。

ちなみにソロモンがサトーさんが付けた名前らしい、

サトーさん・・・遊んでんな。

「王様、勇者光賀　光参上いたしました」

流石だな『最強』さん、様になつてゐる。

自分は、最強さんのまねをして頭を下げてゐる状態で良く見えないが。

多分、様になつてゐる。

「顔を上げよ」

「はっ」

顔を上げる『最強』さん。
自分はまだ顔を上げない。

「此度は何故此処に来た？」

「はい、眠つていたもう一人のく召喚者>が目覚めましたゆゑ、ここに來たしだいです」

「ふむく召喚者>とな」

「はい、こちらに居ますのは二ノシタ・ヒフミ、私と同じ学校に通つていた者です」

「そうか、その者、顔を上げよ」

まだ顔は上げない。

『最強』さんと打ち合わせをして、自分はまだこちらの言葉が分かっていない、
という設定にしているからだ。

「申し訳ございません王様、この者はまだこちらの言葉が分からないのです」

「そうか、なら勇者殿が伝えてくれ」
「はい」

『最強』さんがこっそり耳打ちしてくる。

「カズ君、こっちの言葉は分かるか？」

「凄いですね、魔法」

「顔を上げて、適当な言葉を言ってくれ」

「はい」

顔を上げる。

「ドウモー、ヒゲダー、モサモサシテルー、
アッ、ワタシ、コトバ、ワカリマセーン」

棒読みである。

「えー、こちらの者は、『初めまして、これから宜しくお願いたします。』

言葉はまだ解りませんが、おいおい勉強します。お髭が立派ですね』
と申しております」

『最強』さん、凄く良く訳したな。

「そうか、この髭の良さが分かるか、
言葉が分からないのは大変だろうが、早く馴染んでくれ、
魔王との戦いもある故な」

王様、髭が誉められて若干上機嫌だな。
別に自分は誉めてないが。

「そのことですが王様・・・」

『最強』さんが口をはさむ。

「この者は、魔王との戦いには、参加することはできません」
「何だと？」

一気に王様の顔が険しいものになる。

「この者は、私と同様、戦いと無縁の国に生まれた故、戦い方を知りません」

「だが、おぬしともう一人、カゲヤマは騎士隊長を倒すほど強かったではないか」

「それは、ひとえに私とカゲヤマが戦いなれていただけだからです」

「おぬしたちは特別、と言いたいのか？」

「はい、ですから、この者は戦いに加えないでほしいのです」

ナイス！『最強』さん！！

自分は戦いなんかまっぴらだ！！
人が死ぬのはもうたくさんだ。

「戦えない、戦わないでは、ないのだな」

「はい」

「ふん、いいだろう」

「ありがとうございます」

「代わりに、この城で働いてもらっかな」

え？今なんて？

「では、下がれ」

「失礼いたします」

「家賃とかの心配をしてるのか？」

「そうです！！自分のアパートボロくて、家賃が安いっていつでも、あそこら辺では、っていう但し書きが付くんです！！

高校生のバイトの収入では、結構いっぱいはいなんです」

「ああ、その辺なら心配することないぞ」

「どうして？」

「こつちとあつちの時間の流れ方が違うからな」

「浦島太郎みたいに？」

「そうだな、ちょうど逆といったところか」

「というと？」

「こつちの一ヶ月が向こうの一週間ぐらいだ」

「どうやって調べたんですか？」

「行ったり来たりを繰り返して、ちよつと計算」

「結構気軽に行ったり来たりするんですね・・・

そうだ、学校には？」

「ああ、もう連絡してある」

「学校はなんて？」

「『次元の穴はこちらでも確認した。異世界に通じていたのか。たまにあることだから、頑張れ』」

「たまにあるんだ・・・」

「『無事に帰ってきたら、ちゃんと単位はやるから、時間は気にするな、あ、そつちで手に入れた珍しい物は

学校で買い取るから、冒険者なり勇者なり、

好きにやるといい』・・・だと」

「・・・はは」

流石、ウチの高校、異常だ。

第25話『のんびり馬車の旅』ゼイスさんは空気』（前書き）

カオル視点に戻ります。
説明回です。

第25話『のんびり馬車の旅』ゼイスさんは空気』

「カオルー！準備できたー？」

「うん」

「では、行くとするかの」

今まで色々あったけど、出発だ。

僕たちは、勇者で王様だったサトーさんの日記が残っている、図書館があるという、王都に行くために村を出た。この前のお買い物は、そのための準備という事だ。

「おー、馬車かー、初めて見たよー」

「じゃあ、乗るのも初めてね」

「うん・・・あ、馬車って揺れが激しかったりする？」

「そんなことないわよ、この馬車、高かったし」

「どれくらい？」

「金貨二枚ぐらい（約二百万円）」

「うわー、高いなー、やっぱゼイスさんお金持ちなんだー」

「ほっほっほ、使わないだけじゃよ」

馬車に乗り込む。

馬車は、二頭引きで、

大きさは軽のワゴン車ぐらいの大きさ、屋根に荷物を積めるようになっている。

外装は、飾り等は殆どなく、極めて質素なものだ。

内装は、外装に比べお金がかかっているらしく、

外と中の差に驚く人が居るかもしれない。

椅子は、扉をはさんで、対面するようにして備え付けられている。

その椅子も、長旅でも疲れないように、少し硬めの椅子だ。

僕と、フェリシアが中に入り込み、ゼイスさんは御者台に乗る。

「なんか、思ってたのと違うかな」

「どう？」

「なんかもっと、赤い絨毯みたいなのが椅子とか床とか壁とかにある感じ」

「ははっ、いくらなんでもそれは無いわよ」

「そうなの？」

「悪趣味じゃない、まあ、他の金持ちはどうか知らないけど」

「そうだよ」

きつと、ゼイスさんが特別なんだろう。

昔は、普通に働いてたと言っていたし、金銭感覚が普通の人に近いかもしれない。

ガタガタと、馬車が走る時速30キロぐらいだろうか。

「意外と、揺れないんだね」

「そりゃあ、さす・・・さすなんとかが入ってるからよ」

「サスペンション？」

「そうそれ！サスペンションが入ってるからよ！！」

「へっ」

馬車にサスペンションが入ってるのは意外だ。

「サスペンションも勇者サトーが伝えたものね」

「サトーさんは一体何をしたかったんだろう？」

「そういえば、あんまり武勇伝みたいなのは残ってないわね」
「そうなの？」

「ドラゴンを倒したとか、そういうのはあるんだけど、意外と少ないのよね」

「あるじゃん、ドラゴンを倒したのが」

「ううん、それでも少ないのよ、

ましてや何百年も続いてきた戦争を終わらした勇者なのよ？
もつとあってもいいはずなのよ」

「そんなに少ないんだ？ゼイスさんのは？」

「それが、勇者サトーよりも多いのよ」

「158年も生きてるんだったら当たり前じゃないの？」

「それも無いのよ、ゼイスさんは勇者サトーに会うまで、
ずっと古代語の研究をしていたらしいの」

「古代語ってことは、日本語の研究をしてた？」

「そうね」

「じゃあ、サトーさんに会って、古代語、日本語を話す

生きた資料が目の前に現れたから、もう研究する必要はないと？」

「そういう事になるわね」

「それが、58歳の時」

「そして勇者サトーと共に旅をした」

「それだったらおかしいね」

「おかしいでしょ？」

「王都に着いたら、そういうのを調べるのも面白いかもしれないね」

「その前に、することがあるわ」

「なに？」

「面白い物でしょ？おいしいもの食べて、カオルに可愛い服を着せて、
面白い物を買うの、ついでにカオルが学校に編入するための手続き」
き

「おいしいものは食べたいけど、可愛い服はやめて！！」

学校に編入するための手続きが何でついでなの！！」

「なんでよ!!服は重要じゃない!!」

この前買った服だって着てくれないし!!」

「イヤだよ!!あんなの!!」

「そんな!!カオルのために買ったのに……」

そうね……カオルは男の子だもんね」

「そうだよ」

「だったら、カオルが女の子になればいいだけの話じゃない!!」

「なんで!?!」

「男の子だから着れないんでしょう?」

「そう……だけど……そういう問題じゃにやいよ!!」

「噛んだ」

「……そういう問題じゃないよ!!」

「無かった事にしたくても、顔が真っ赤だぞ」

「はう!!」

僕達が行こうとしている王都の学校は、

国内トップクラスの学校らしい、そんな所に僕が入れるの!?

と不安になったけど、そこはゼイスさんの弟子という事で、

簡単に入れるらしい。

王都には、国の主要機関がいくつもあり、

王城や、議会などもあるらしい。

この国には、王都と言うだけあって、王様がいるらしい。

初代王様であるサトーさんの息子さんだそうだ。

王国で王様が居ても、王政ではないそうだ。

そのために、議会があり、その議会で国の方針を決めるらしい。

だが、まったくもって王様に権力が無い訳ではない、

いくらか王様も権力を持っているそうだ。

権力を持っているのは、裁判所、日本の警察機関にあたる警備隊、

議会、王、の四つ、三権分立ならぬ四権分立だ。

たぶん僕の生活には関わってこないだろうが、これも常識、小学生でも知っている知識だと、ゼイスさんが教えてくれた。

「そろそろお昼ね、ご飯にしようか」

「うん、お腹すいた」

「ゼイスさん！！ご飯にしよう！！」

「ほお、もうそんな時間かね？」

馬車が止まる。

第26話『のんびり馬車の旅〜魔法コンロ〜』

さて、王都への旅が始まって、初めての食事だ。王都へは、三つの村を中継して行くことになる。始めの村までは、この馬車で四日程かるらしい。何もなければ、という言葉が冠に着くが。

何はともあれ、食事だ。

きょうの食事当番は僕だ。

前々からしてみようと思っていたことをしよう。

「カオル、何してるの？薪は？」

「魔法があるんだし、どうせなら魔法でできないかなー？って思ってたね」

「ほう、魔法を使って料理か」

「うん」

火に関する＜魔法陣＞を思い浮かべる。

魔法に関してだが、僕は魔力が少ないことが分かった。魔法の練習をしていて＜詠唱魔法＞四発撃っただけで、

倒れてしまったからだ。

それにより、直接現象を起こす＜詠唱魔法＞が僕は余り使えないことになる。

しかし、＜詠唱魔法＞で頭の中の＜魔法陣＞を＜展開＞することで魔力の消費を少なく魔法を使える。

＜展開＞の魔法は＜詠唱魔法＞ではあるが、

頭の中のイメージを光にして表すだけなので、

魔力の消費がとても少ないのだ。

これは、僕だけに当てはまる事ではなく、魔力が少ない人全般に対する救いになる。

魔力が少ない人は、それだけでいじめを受けたり、仕事の幅が少なくなったりするそうだ。

「＜展開＞」

「カオル、何を考えてたの？」

「へ？」

「ほっ、＜魔法陣＞とカオルの魔力に関すること、カオルが発見した＜展開＞の魔法の使い方についてか」

「うわ！？全部出てきた！？」

「へえ、カオル、いろいろ考えてたのね」

「見ないで、恥ずかしいから見ないで」

「ほっほっほっ、まあこういう事もあるじゃろっ」

「うう」

気を取り直して、火に関する＜魔法陣＞を思い浮かべる。
その＜魔法陣＞に＜弱火＞、＜中火＞、＜強火＞、＜継続＞、＜切替＞
などの文字を追加していく、その時に火のイメージを文字に乗せる。
そして・・・

「＜展開＞」

「今度はちゃんと出来たみたいね」

「ふう、よかった」

「ほう、見せてご覧なさいカオル」

「どうです？」

ゼイスさんに出来た＜魔法陣＞を見せる。

「ほう、火の＜魔法陣＞に色々文字を追加したのか」

「はい、多分それでコンロ・・・日本のつていうか、元の世界の料理道具で、

火の大きさを調整出来る道具があるんですけど、ソレみたいなことができると思います」

「いいのう、カオルの世界には便利なものがあるんじゃないのう、羨ましいわい」

「まあ、便利になった分、人も怠けますけどね」

「便利になりすぎるのもダメってことね」

「そうだね」

「では、起動させてみなさい」

「はい・・・＜起動＞」

＜魔法陣＞が僕の声に応じて、＜起動＞する。

＜魔法陣＞より少し浮いた位置に炎が現れる。

小さな炎、いわゆる＜弱火＞だ。

「ふむ？炎が少し浮いた位置に現れるのは何故じゃ？」

「この＜魔法陣＞を触ることで火力を調整できるようにしました。

なので、＜魔法陣＞から直接炎が出ていると触れないからです」

「ほう、触ってみてもいいかの？」

「はい」

ゼイスさんが、＜魔法陣＞を触る。

すると炎が＜弱火＞から＜中火＞に変わる。

「もう一度触ってみてください」

「分かった」

今度は、＜中火＞から＜強火＞変わる。

「もう一度触ると、また＜弱火＞になります。

そして、＜消火＞と唱えると、火が消えます。

また点けたいときは＜着火＞と唱えればつきます」

「いいわね、コレ凄いいじゃないカオル！！」

「へへへ」

誉められるのは、純粹に嬉しい。

ちなみに、普通＜魔法陣魔法＞は発動し、現象が起きたら＜魔法陣＞は消え、

もう一度使えないのだが、＜継続＞や＜維持＞などの文字を＜魔法陣＞に

組み込むことで、＜魔法陣＞が消えずにもう一度使えることができる。

これもまた、僕が発見したことだ。

このような事は勇者だったサトーさんが見つけててもいいような事だが、

サトーさんは勇者だけあって魔力も多く、主に使うのは＜詠唱魔法＞だったそうだ。

きっと、魔法をバンバン撃ってカッコよく戦っていたんだろう。

「偉い子のカオルには、ご褒美にぎゅーっとしてあげましょう、ほら、おいで！」

「行かないよ！！」

「よし、ならばわしが行こう」

「イヤ！！ゼイスさんは来ないで！！変態！！」

「な！！変態！？・・・い、いや、ちよっとした冗談じゃよ」

「冗談でも、変態は変態です！！」

「ゼイスさん、フェリシアも年頃の女の子なんだよ、そういうのをちゃんと考えて？」

「昔はフェリシアも素直に受け入れてくれたんだがのう」

「子供は成長するものです」

「そんなこと言っても、この中で一番ちっちゃいのはカオルだけだね」

「ゼイスさん！！フェリシアが僕に酷いことを言うよ！！」

僕が一番、気にしていることを言うんだ！！」

「フェリシアよ、人にはそれぞれ個性というものがあつての・・・」

「何ですか？変態」

「カオルよ！！フェリシアがわしに酷いことを言うんじゃない！！」

助けてくれ！！このままではわし、立ち直れないかもしれん！！」

「ゼイスさん！！」

「カオル！！」

ゼイスさんが腕を広げる。

ソレが意味することは・・・すなわち、熱い抱擁。

「いや、ちょっと・・・ごめんなさい」

「カオル!!! さあ!!!」

「そういわれても・・・なんか、イヤです」

ゼイスさんの心が折れる音がした。

第27話『魔物』（前書き）

遅くなつてすみません。

この中で書かれている馬車の御者の仕方は、
調べた物ではないので正しくありませんのであしからず。

第27話『魔物』

お昼ご飯を食べた僕たちは、また馬車に乗り込んだ。

今度は、フェリシアと僕が御者台に、ゼイスさんは中に座る。

御者台にわざわざ二人も乗ったのは、僕が御者の方法を覚えるためでもある。

「いい？カオル、こうやって馬に指示を出すの」

縄をピシッ！とする。

すると馬が、歩き出した。

「これで歩け」

ピシピシッ！！とする。

「これで走れ」

ピシピシピシッ！！！

「もっと走れ」

ピシピシピシピシッ！！！！！

「もっともっと走れ、それで・・・」

「と、とりあえず！！叩いたら走ってくれるんだね！！」

「そ、そうね」

「ごめんね、お馬さんいっぱい叩いて・・・
届かないと思うけど、一応念じておいた。」

「他は？」

「この縄を後ろに思いっきり引っ張ると、止まれ。
軽く引っ張ると、速度を落とせ。右に引っ張ると、右に曲がれ。」

左に引つ張ると、左に曲がれ」

「うん、覚えた、簡単だね」

「やってみて」

「うん」

走っているお馬さんに、速度を落とせの指示を出すため、縄を軽く引つ張る。

すると、お馬さんがその指示に従ってくれる。

「おおー、ありがとう！お馬さん」

「何言ってるの？カオル」

「お礼」

「なんで？」

「初めての僕の指示に従ってくれたから」

「そりゃ、しっかり訓練された馬だからね、

ちなみに名前は、左がイギーで右がノラ、どっちもオスよ」

「そうなんだ・・・宜しくお願いします」

任せておけとばかりに、お馬さんたちが嘶いた。

「良かったわね、認めてくれたみたいよ」

「ほんと？じゃあ改めて、僕の名前は櫻井 薫宜しくお願いします」

「馬にまで自己紹介するのね、カオル、でもたかが馬よ？」
「馬って賢いんだよ？ねーお馬さん？」

うんうんと首を振るお馬さんたち。

「ほらね？」

「本当ね、知らなかったわ」

御者のしかたは憶えたので、
僕に教えるために御者台に乗っていたフェリシアは、馬車の中に入
った。

だから僕は今一人だ。
御者を覚えたと言っても、お馬さんたちは頭がいいから道が悪い所
は避けてくれるし、

急ぐ旅でもないので、走らす必要もない。

景色は見渡す限りの草原、

初めて見たときは感動したけど、ずっと見ていたら慣れもする。

お昼ご飯を食べたのは二時間ぐらい前だけど、

ほとんど何もしていないので、小腹も空かない。

僕がこないだ武器屋で買った物も、そう手入れするような物でもない。

魔法だって、僕が使うく魔法陣>は全て覚えだし、

こんなところで魔法を使う必要もない。

ぶっちゃけて言うと今僕は・・・

「暇だよ・・・お馬さん」

お馬さんに語りかけてみた。

お馬さんは、それはどうしようもねえよ、と言いたそうに首を振った。

このお馬さんたちは妙に人間臭い。

「昔は人間だったとか・・・ないよね？」

お馬さんたちがビクツとした気がするけど・・・まさかね・・・

「ひまゝ ひゝまひゝまゝ ひっまひまゝ」

と歌ってみたけど、悲しくなったからやめた。

僕が暇を持て余していると、突然お馬さんたちが止まった。

「あれゝ？どうしたのゝ？」

お馬さんたちは前を見て、それから僕を見た。

「向こうに何かあるの？」

向こうの方に点々と何かがあるのは分かるけど、遠くて良く分からない。

「フェリシアー、ゼイスさん」

馬車の中にいるフェリシアとゼイスさんに呼びかける。

「なんじゃ？」

「どうしたの？カオル」

「お馬さんたちが止まってね、向こうになんかあるみたいなんだよ」

「ほう、フェリシア」

「うん、これは・・・魔物の臭いね」

こんなに遠くからでも分かるのは、フェリシアが犬狼族だからだ。犬狼族は才力ミヤや犬の魔獣と人間の間に産まれた者の子孫だ。代を経る毎に魔獣から受け継いだ力は薄れて行っていて、

フェリシアも魔獣の力など殆どないとは言えども、
普通の人よりも魔力や身体能力が高い、それは努力や才能だけでは
なく、

魔獣の血を引いているからだ。

「魔物！？うわわわ、どうしよう」

魔物と魔獣は大きく異なる。

魔獣には大きな魔力、高い知性、飛び抜けた身体能力があり、
そして何より人語を解す。性格は温厚だが、それは礼を持って接し
た場合だ。

人を襲う事は基本的に無い、無礼な者や、己を殺そうとして来た者、
そして己を愛するものを傷つけた者には容赦しない。

魔物は凶暴で、人、魔族、関係なく襲う。

だが百年以上前、サトーさんが人と魔族の長年続いてきた戦争を止
めるまでは、

人間の間では、魔族が魔物を操っているなどと言われていたそうだ。
その関係で昔気質な人間の間では、魔族を嫌う、魔族を差別する様
な人が居るそうだ。

これがこの大陸、人間種、獣人種、妖精種が住んでいる東の大陸で
の常識だそうだ。

「フェリシア、行きなさい」

「分かりましたゼイスさん」

「行くってどこに？」

「魔物を倒しにね、ちょっと待っててね」

「え？・・・ちよっ！..」

そう言ってフェリシアは僕が止める間もなく走って行ってしまった。

ここから見える（と言っても点のようにしか見えないが）

魔物の数は約四十、それが固まっている。

その塊に向かっていく一つの点、フェリシアだ。

フェリシアはもの凄いスピードで塊に迫って行く。

元の世界でのスピードを出せる人間は少ないだろう、

光賀さんと『怪足特急』と呼ばれている人しか思い浮かばない。

「速い」

「そうじゃろう、アレは獣人の脚力と身体強化の魔法を使っておる」

やっぱり魔法を使ってるのか、どうりで速い訳だ。
やっぱり光賀さんは凄いんだ。

とも思うし、魔法ってすごいとも思う。
だけど魔法は便利すぎる。

僕が見てきた限り、この世界の技術レベルはファンタジーでよく読
むような

中世ほど、それに魔法という技術が加わり一部発展しているという
状況。

冷蔵庫はあるのに冷凍庫は無い、上水道はあるのに下水道は無い、
何故そんな中途半端な発展具合なのかというと、
食品を冷やしたら長持ちするのは分かるが、

それがなぜ長持ちしているのかが分かっていない、
下水がたまったらく浄化>で綺麗にしたら良い、という具合だ。

何故そんな事になったのかというと、やはり魔法があるからだろう。
おばあちゃんの知恵袋的に魔法が教えられているからだ。

『ずっと汚れたまましていると病気になる』

なので、定期的に<浄化>をしましょう』みたいに教えられてい
る。

そこには『汚れたまましていると病気になる』というのはあるが、

『病気とは何なのか？』が無い。

簡単に言うと・・・

元の世界・・・病気になった↓何の病気が調べよう↓病気の治療

この世界・・・病気になった↓魔法で病気の治療

みたいな感じだ。

要するに何故？どうして？が無いのだ。

『魔法で治るからそれでいい』のだ。

だが、このままじゃダメだと思う、毒や菌（このせかいでは悪い精

霊に例えられている)

の概念はあるものの、細胞などの知識が無い、ゆえにこの人たちが使う魔法では

まだ治せないものが沢山ある、ガンや腫瘍などがいい例だ。

この世界の魔法は日本語である古代語と魔力、そして個人のイメージから成り立っている。

このイメージ日本人なら簡単にできるだろう。

しかし、この世界ではイメージの元となる情報そのものが少ないのだ。

体の中をイメージしたいなら、体の中を見たことが無ければならない。

その上、病気についての知識が無いので打つ手がない。

再びフェリシアを見る。

フェリシアは塊に突っ込む寸前だった。

第28話『対一角兎』（前書き）

初戦闘、ここまで長かった・・・
フェリシア視点です。

第28話『対一角兎』

私は駆ける。

前方にいる魔物の群れを殲滅するために。
カオルを守るために。

片手に一本ずつある短剣を握りしめる。

長年使ってきた愛剣であり、ゼイスさんから貰った大切なプレゼントでもある。

久しぶりに手に持ったけど、まるで毎日使っている包丁のように手になじむ、

この剣は私のために作られた物だということを改めて感じる。

「<身体強化>!!<知覚強化>!!」

一瞬もの凄い速さで景色が流れたように見えたけど、
すぐにいつもの様に見えるようになった。

「行くわよ、よく見てなさいカオル」

魔物をよく見る、まだぶつかるとまでは少しある。

白や斑、黒の体毛、額から長く突き出た角、長い耳、口からはみ出る鋭い牙、

大きく発達した後ろ足、大きさは人間の子供ぐらいの大きさ、この地域でよく見る魔物、一角兎ね。

普通ならこのような群れを成すことは無いはずだけど・・・

「目が赤い・・・繁殖期？」

繁殖期になると、この魔物は子孫を残すために群れを作り、群れの中で交尾をし、そして群れで子育てをする。そして繁殖期の間はより凶暴性が増す。

その期間は非常に短い、一週間か長くても十日位、

この魔物は非常に成長が早く、生まれてから三日ほどで成体になる。だが、数が増えすぎて問題になることは余りない、増えてもすぐに他の魔物や冒険者に狩られるから・・・この一角兎、魔物の中での強さは最底辺に位置する。そのためよく冒険者の初心者への依頼の中でよく扱われることが多いそうだ。

頑張れば子供でも倒せるぐらいに弱い。

しかしやはり魔物は魔物、とても危険だ。

一番目を引くのがやはり角だろう、刺されるのを想像するのは容易い。

だが一角兎の一番注意すべきはその脚力だ。

角に注意して背後に回り込んだものの、

蹴り飛ばされ内臓をダメにする者が毎年必ずいる。

魔法を撃つために魔力を練ると同時に想像する。

「<風刃>!!」

「ピギヤアアアア!!」

魔物の群れの両側に風の刃が通り過ぎる。

魔法の余波の強い風で悲鳴と血飛沫が舞い上がる。

これで一角兎の戦力の三分の二は削れたと思う。

一角兎たちが大きな耳を立てこちらを見る。

私は、一角兎たちが戦闘態勢に入る前に斬りかかる。

右手での一閃、まず通りすがりに私の右側にいた一匹の喉を斬る。

返す右手で剣の柄を使い、正面にいた一匹の頭を殴り飛ばす。

犬狼族の力に＜身体強化＞の魔法が上乘せされた一撃だ、ほぼ即死だろう。

その飛んで行った一角兎は他の一匹に激突する。

その時、運よく一角兎の角がぶつかった一匹に刺さる。

「ピギヤアアアアアアッ!？」

刺さった角を抜こうと、上に乗るもう動かない仲間をどかそうとしてもがく、

だが、余計に深く挟り込むように刺さって行く。

もうあの一匹は気にしなくていいと思う。

残り十匹になったところで、左右同時に角で突き刺そうと飛び込んできた。

爆発的な脚力で飛んできたソレは、普通ならばまさに矢のような速度だろう、

だが＜身体強化＞、さらに＜知覚強化＞の魔法が掛かっている今の私には、

スライムの体当たりほどの速度でしかない。

「フッ」

軽く息を吐いて、後ろに少し下がりがり剣を振りかぶり構える。そして、目の前に飛んできた二匹に剣を振り下し仕留める。

「ギャッ！」

「ギャピッ！」

残り八匹、今度は私の背後から飛び掛かってくるが、振り返りざまに剣を振る、一閃目で自慢の角を切り落とし、二閃目で首を刈る。

「ピャウッ！！」

残り七匹、同時攻撃もダメ、背後からの攻撃もダメと本能で分かったのだろうか、一斉に飛び掛かってきた。

そして、この時を私は待っていた。

カオルが見つけたく詠唱魔法>とく魔法陣魔法>を組み合わせて使う魔法。

頭の中に思い浮かべるのは、土に関する魔法陣

「展開！」

私の周りの地面に幾つもの<魔法陣>が現れる。

それとほぼ同時に一角兎たちも魔法陣の上に乗る。

う。
一角兎たちの身が一瞬すくむ、魔法陣に集まる魔力に驚いたのだろ

フッフ 本当にすごいわね、カオルは。

「＜発動＞！！」

すると、地面が揺れ始める。

そして
・
・
・

—!—
シ
ム
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ

今まではそこに無かった無数の柱が現れる。

ソレは土の〈魔法陣魔法〉によって出来た長大な柱であった。

〈魔法陣〉に設定された範囲だけの地面、

そしてその下に広がる地層がそのまま、もの凄い勢いで上に突き出したのだ。

きつと、ここに地質学者が居たら狂喜乱舞する。

それはともかく、その地面に乗っていた一角兎たちも、ものすごい勢いで突き出されたわけだ。

一角兎たちは慣性の法則に従って上に飛んでいく、やがてその速度はゼロになり、今度は下に落ち始める。

一角兎たちは自分たちがなぜ空を飛んでいるのか、さっきの魔力の集まりはなんだったのか、

そう思いながら体を地面に叩き付けられてその生涯を終えた。

「よし！！＜解除＞！！」

土の柱が突き出た時と同じような音を立てながら地面に戻る。

「いまのく魔法陣魔法く本当はあんなに強くないのにな」

やっぱりカオルが教えてくれた古代語をく魔法陣くを組み込んだからかな？

「うわくベトベトだく気持ち悪」

カオルがいるから、カッコイイ所を見せようと頑張りすぎてしまった。

体中が血や泥で、ベタベタだ。

早く戻って、服を着替えて体を綺麗にしたい。

何よりもカオルの反応が見たい、カッコイイと思ってくれたらいいな。

第28話『対一角兎』（後書き）

初めて戦闘描写をしたのですが、とても難しいです。
もっと派手に、格好く書けるようになりたいです。
そもそも文系ではない私には無理な話なのか・・・
ご指南、ご指摘、駄目出し、ご希望、感想、お待ちしております。

第29話『アップダウン』（前書き）

ネガティブ回
カオル視点に戻ります。

第29話『アップダウン』

フェリシアの戦闘は凄かった。

女の子なのに、あんなに強いのは余り居ないと思う。

あ、フェリシアが戻ってきた。

あれ、なんか・・・？

「お待たせーカオルー、どうだった？私っカッコよかった？」

「ひっ！ー！」

「カオル、どうしたの？」

赤い、真っ赤だ。

そうだ、フェリシアは戦闘をしてきたんだ、コレは・・・魔物の血だ。

フェリシアの血という事は無い、フェリシアはこんなにピンピンしてる。

コレは、魔物の血なんだ。人も魔族も襲う魔物の血なんだ。

フェリシアはイイコトをしたんだ。魔物が居たら色んな人が困るんだ。

だから、フェリシアはイイコトをしたんだ。コレはイイコトなんだ。大丈夫なんだ。大丈夫大丈夫、大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫イ・・・

「元気ないわね？見て！！今日の晩御飯は一角兎のシチューよ！！」
「あ、あう・・・」

フェリシアの手には力なくグッタリとしている角の生えた大きな兎が。

いや、兎だったモノが・・・

「ちょっと待っててね、着替えたらご飯の支度し始めるから」
「では、わしらはキャンプの準備をするかの」

分かっていた、分かってたはずだ。

ここは、剣と魔法のある世界、ドラゴンがいる世界、魔物がいる世界、

何故魔法という便利なモノがあるのに、技術がそこまで発展していない？

答えは簡単、発展するほどの暇が無いからだ。

たとえ新しい技術が出来たとしても、隅々まで伝わらないからだ。なら何故、伝わらないのか？

百年前までは戦争、今は魔物が世界に蔓延っているからだ。

百年前の戦争で人が死んだ原因の一番は、戦争そのものではなく、戦場に向かうまでに魔物に襲われるか、戦場に魔物が乗り込んでくるか、

戦争のために兵が出はからった村が、魔物の大群に襲われるなどだ。そう、この世界で何よりも危険な物は魔物なのだ。

この世界は常に戦闘が絶えない。

人と魔族との戦闘はもう無いが、人と魔物、魔族と魔物の戦闘はまだ続いている。

比較的、今は平和らしい、平和と言っても常に死と隣り合わせの平和だ。

常に死と隣り合わせなのは、元の世界だって同じだ。

だけど、こっちの世界は、もっと、もっと簡単に人が、生き物が、死んでしまう世界なんだ。

それなのに、それなのに僕は、何を楽しそうに、他人事だと思って。

「・・・はい」

声に力が入らない、声だけじゃない、体中に力が入らない。さっきの兎みたいに・・・

「ではカオルはこの棒を持って立っててくれるかの？」

「はい・・・」

瞳孔が開き切った赤い目、生き残るために必要であっただろうが今は力なく垂れた耳、

力強く素早く動くための手足だがそれも生気を失い力なく伸びている。

そして、赤い一本の筋の入った首。

全く生きている気配が感じられない。死に切ってしまっている。どうしようもなく死んでしまっている。

「カオル、顔色が悪いのう・・・少し休んでおくかの？」

「・・・はい」

「馬車で休んでなさい、夕食になったら呼ぶわい」

「・・・」

「あ~~~~~~~~気持ち悪~~~~~」

まだ目が血の赤い色でチカチカしてる気がする。
フラフラとした足取りで馬車に向かう。

「ちょっと寝よう」

こういう時は寝るに限る。
寝たら夢に出そうだけど……。

「はあ~~~~~」

ガチャリと馬車の扉を開けて、ソファ馬車の椅子に倒れ込む。
フカフカ、ではない堅めの椅子に
置いてあるクッションに顔をうずめる。

「もふもふ」

モフモフするといくらか気が紛れる気がする。

そういえば、無限に出来るプチプチや枝豆があつたなあ。
と思つてゐるのは、ある程度回復したからか。

「もふもふもふもふ」

意味も無くモフモフし続ける。

「何してんの？カオル」

「もふっ！？もふいふあもふもっ！？（フェリシア居たの！？）」

「何言つてるのか分からないわよ？」

「ていうかなんてカッコしてるの！-！」

「ん？ハダカ？」

「聞かないでよ！？」

「裸よ！！」

「そんな胸張つて言わないで！？ああもう！！早く服着て！！」

「別にいいでしょ？どうせ・・・」

「同性じゃないからね！？ねえ、いつまで引つ張んのこのネタ！？」

「飽きた？」

「飽きたよ！！」

「飽きたなら仕方ないわね・・・どうする？」

「『どうする？』じゃないよ！？僕はそこまで日常にネタは求めてないよ！！」

「ごめんなさい・・・」

「うんうん、さあ早く服を・・・」

「頑張つてツツコむカオルが可愛くてつい」

「そんな理由だったの！？いや、早く服着て！！」

僕だつて男だよ！？可愛い女の子が裸で目の前に居たら・・・分かるよね」

「分かつたわ・・・」

「じゃあ早く服を・・・」

「来なさい！！カオル」

「どうしてそうなるの！？」

「でも・・・初めてだから優しくシテね？」

「何をするの！？」

「何つて、男と女の営みよ」

「な！？なjkそldんfnさ／／／／／」

「カオル！？ちょ、どうしたの！？言語機能が崩壊してる！！」

冗談、冗談だから！！そんなことシないから！！ていうか先に言つたのカオルだし！！

落ち着いて！！・・・ほら、ひーひーふー」

「ひーひーふー」

「ひーひーひーひーひー」

「ひーひーひーひーひー・・・ぶはうつ！！えふつ！おふつ！！」

「落ち着いた？」

「酷いよ・・・フェリシア」

なんか色々あつて涙目だ。

「・・・ごめん／／／」

「何で顔赤くしてるの？」

涙をぬぐいながら言う。

「な、何でもないわよ!!」

「・・・?っていうか服!!もうこれでいいから着て!!」

僕の服を脱いで渡す。

「いいの?」

「いいよ?」

「私の裸はダメでカオルの裸はいいの?」

「いいの!!」

「って言う事は・・・私からカオルを襲うのはアリ?」

「ナシ!!冗談だよね!?ソレ冗談だよね!?」

「・・・」

「黙らないで!!」

「・・・ふふっ」

「何で笑うの!?もしかして僕襲われるの!?」

身の危険を感じた僕は、荷物から上着を取り出し羽織って逃げるよ

うに馬車を出た。

カオルが逃げちゃった、あとちょっとだったのに。
まあいいか、カオルが元気になったから。

第29話『アップダウン』（後書き）

ネガティブは長く続かない。
というか続けない。文才の無い私には。

第30話『のんびり馬車の旅〜夕食前と夕食中〜』（前書き）

猛烈に話が進まない！！

第30話『のんびり馬車の旅〜夕食前と夕食中〜』

僕がフェリシアから逃げるように馬車から降りてくると、もうキャンプの準備は出来ていた。

馬車の屋根から出た布とそれを支える柱でできた日よけ、もう夕方だからいらないけど。

どうやって持ってきたのか煉瓦でできたしっかりとした釜戸。

その上に乗った鍋からは良い匂いがする。

ああ、そういえば一角兎のシチューだったけ……今は食べたくないなあ。

「おおカオルか、もう良いのか？」

「……うん、なんかもう、どうでも良くなった」

「そうか」

「何であんなだったかとか聞かないんですか？」

「あのタイミングでソレ以外に理由などないじゃろう」

「ああ、そうですね」

「本当に良いのか？馬車から悲鳴が聞こえておったが？」

「まあアレは……」

「カオルー！！待ってー！！」

「まさか、馬車におったフェリシアが……」

「そうなんです……」

「カオルに襲われた」

「違います」

「そうなのかの？」

「どちらかと言うと襲われたような・・・」

「カオルー！！なんで逃げるの！？」

「あの状況で逃げない方がおかしいよ・・・」

「ああいうことは好きな人同士でするもんでしょ」

「私はカオルの事が好きだよ？」

「・・・あ、うん、ありがとう」

「なんか反応がよそよそしい！！やめて私が悪かったから！！」

「あ、そういえばゼイスさん、えと、オロンでしたっけ？どんな街なんですか？」

「そうじゃのう・・・」

「無視しないで！！ごめんなさい本当にごめんなさい！！」

「もうしない？」

「もうしない」

「本当に？」

「本当に」

「今度したら、僕はフェリシアの事を軽蔑するよ？」

「にあっ！？しない絶対しない！！金輪際しない！！約束する！！」

「じゃあ許すん」

「どっち！？」

「ごめん、噛んじゃった。許す」

「良かったあ~~~~！！」

そう言って抱きついて来た。

僕の胸に飛び込んできたフェリシアの頭をなでる。

「計画通り」そんな声が聞こえるが気にしない。

フェリシアの方が背が高いのに、僕の胸に顔をうずめるのはつらくないのだろうか？

「でも軽蔑された眼で見られるのもいいかも・・・」と言つのも聞こえない。

「カオルのこの無い胸もいいわね」・・・

「フェリシア、全部聞こえてる・・・」

「え、嘘！？カオルの二オイがたまらないとか、カオルの体が柔らかいとか全部！？」

「そんなこと思つてたの・・・？」

「はっ！？言っちゃた！！」

なんか壮絶だった。フェリシアが変態になつてしまった。初めて会つたときは、もっとキリッとしてたのに。どうしちゃったの？

これは僕のせい？僕はこの旅の間、安全に過ごせるだろうか。

「前のフェリシアに戻つてよ」

「分かつたわ、カオルが言うならね」

「戻つた！？」

ええ~~~~？そんなすぐ戻るものなの？

ご飯を食べながら、気になっていたことを聞く。
もちろん、僕のお皿の一角兎のお肉は除いている。

「そうそう、どんな街なんですか？オロンって」
「まあ、簡単に言くと温泉街じゃな」
「いつも通るけど、あの臭いには慣れないわね」

温泉街かぁ、楽しみだな。

こっちに来てお風呂には、毎日（ゼイスさんの家にあつたので）入っていた。

だけど、温泉とお風呂は全然違う。

情緒とか効能とか色々あるけど、あの落ち着いた雰囲気が好きだ。

「料理は？料理はどんなのがありますか？」

「うん？料理が気になるのか？」

「そりゃあもう、旅においしいご飯は付き物ですから」

「なにそれ？」

「あれ？そういうの無いの？」

「旅は大変なものよ、疲れるし、長旅だと最後の方はおいしい物なんか食べれないし」

「うむ、勇者との旅で一番辛かったのは、戦闘でなく旅そのものじやったな」

「わかった？カオル」

「うん」

「でも、私たちはそんな不自由はしないわよ」

「え？なんで？」

「まず、村から村、町から町までの距離がそこまで遠くないから。」

次に、馬車がいいし、食べ物も新鮮に保管できるしから」

「二番目に二つも入ったね」

「いいじゃないそんな事、最後にカオルが可愛いから」

「ソレ、入るんだ？」

「入るわ、むしろコレが一番。ね、ゼイスさん」

「そうじゃのう、カオルを見ておると、心が安らぐしのう」

「ええ〜〜？・・・まあいいです、それで、オロンのご飯はおいしいんですか？」

「ええ、ちよつと変わってるけどね」

「変わってる？」

「魚を生で食べたり、なんかあんまり味の無い穀物を蒸す？茹でる？なんか調理したのが出てきたりするの」

「それは、多分・・・」

「そうじゃ、カオルが思っておる通り、カオルの世界の料理、いや、

「二ホン料理じゃな」

「やっぱり？じゃあ宿も畳、草のマットみたいなのがあったりする？」

「いや、それはないのう」

「そう、なんですか・・・」

「落ち込まないでカオル、草のマットなんかより綿がいっぱい入ったマットの方が気持ちいいわよ？」

「そうだけど・・・そうじゃないんだよ」

「意味が分からないわよ？」

「むう、説明し辛い」

どう説明したらいいんだろう？畳の良さって。

畳の香りとか、ウチの工場の休憩所とかが畳で、

そこで一仕事終えた後に飲むお茶のおいしさとか、

そのまま座布団を枕にしてうたた寝をする気持ちよさとか、

あ、畳関係ない。

第31話『のんびり馬車の旅〜基本ゼイスさんは空気〜』

時は流れ今は夜中である。

僕とフェリシアは、所謂寝ずの番と言っている。

寝ずの番をするのは初めてなので、フェリシアもいる。

ゼイスさんとの交代までは、まだ二時間もある。ゼイスさんは今のうちに寝ている。

「星が綺麗」

「そお？」

「うん」

見上げる空には満天の星空と満月。

こんな景色は、日本ではなかなか見れなかった。（見たことが無い訳ではない）

「日本ではね、電気、科学の力で街に光が溢れてたからね、星が見えなかったんだよ」

「いいじゃない、ソレも綺麗なんじゃないの？」

「綺麗っちゃ綺麗なんだけどね、そこにずっと住んでると飽きちゃ

「うよ」

「贅沢な悩みね、こっちなんか夜なんか暗くて勉強できないわよ」

「ごめん」

「まあ、カオルが古代語を教えてくれて、

<魔法陣魔法>の新しい使い方を見つけてくれたから、

これからは夜でも勉強できるけどね」

「そうだ、こっちには街灯とかある？」

「主要な町にはあるわよ」

「ソレはどうやって光ってるの？」

「勇者の魔法」

「え？」

「正確には勇者の魔法の欠片」

「うん？」

「簡単に言うと勇者が莫大な魔力を込めて<発光>の魔法を使ったのを切り分けたの」

「魔法を切り分ける？魔法って切れるの？」

「普通は切れないわね・・・」

「じゃあ、普通じゃなかったら切れるの？魔剣が何か？」

「・・・そうよ、っていうか良く分かったわね」

「僕の友達に、そういうのが居るから」

「魔剣を使えるって、どんな友達よ」

「どんなって、そう言われても・・・幼馴染としか言いようが無いなあ」

「・・・おさつ！？えええええええつ！？」

「そんな驚かなくても、こっちじゃ魔剣なんかそれなりに在るんじゃないの？」

「在るわよっ！！在るけどっ！！」

魔剣って其々が意思を持っていて、選ばれた者しか使うことができないし、

そもそも魔剣に触ること自体が無いに等しいし！！」

「ああ~~~~そうだ、魔剣って危ないでしょ、使用者の登録とかしてる？」

「私のテンションは無視！？・・・そうね、魔剣は殆ど登録されているわ」

「殆どってことは、何本か登録されてないってこと？」

「そうね、遺物としてどちらの大陸も躍起になって探してるわ」

「その中に喋るのってある？」

「ん~~~~・・・あ、あるわ!!」

「黒くて柄に宝石が埋まってる？」

「そうね、っていやいやいや!!いくらなんでもソレは無いでしょ!!!」

確かに、見つかってないけど、カオルの世界にあるわけないでしょ
「よ」

「僕がここに居るのにそれを言うかなあ？」

「う~~~~、ソレを言われると反論できないわね」

よし、これで僕が元の世界に戻る希望がまた増えた。

あの喋る魔剣がこの世界の物かは分からないけど、

アレがこの世界の物だったとしたら、この世界から魔法を使わないでも、

元の世界に戻る方法があるのかもしれない。

あくまで、かも、だけど。

とまあ、何だかんだ話していると、フェリシアが急に黙った。

「どうしたの？」

「魔物よ」

「どこ？」

「そこ」

ナニかが僕に飛びかかってきた。

「わきゃ！？」

「カオル！！」

フェリシアがアタフタと魔力を練り上げている。

「<火・・・」

「待つて！！フェリシア、それだと僕も・・・！！」

「球>！！」

「<展開>！！」

僕は咄嗟に<魔法陣>を<展開>した。

僕に、正確には僕の抱えている魔物に向かってくる火球は、僕にぶつかる前に消え失せた。

「ああ、カオル！！つてあれ？」

「危なかったあ~~~~、死ぬかと思ったあ~~~~」

「今、何が？つてそれよりも魔物！！」

「この子の事？」

「ソレよ！！早く離しなさいカオル！！魔物よ危ないのよ！！」

「そう？」

僕の手には今、小ぶりのメロンぐらいの大きさの兎がいる。角が一本生えているから、やっぱり普通の兎ではなく、魔物だ。

それも、今日の午後にフェリシアが倒した一角兎の生き残りだろう。晩ご飯のシチューになった一角兎は、僕の腰ぐらいの大きさがあったので、

この子はまだまだ子供なんだろう。

なによりも、カワイイ！もっふもふ、もっふもふだ。

ソレはもう、触っているだけで心が洗われるような、

さわり心地はまさに、天使の産毛とでもいえると思う。

もう逆に、産毛まみれの天使だ。・・・うん、ソレは嫌だ。

もうこの子を離したくない！！

「大丈夫、この子は危なくないよ」

「何故そんなこと言えるのよ」

「ん？君は危ない事する？」

「キユイ？」

「ほら」

「何がほらよ、魔物に人間の言葉が通じる訳ないじゃない、危ないから、カオルその子を離して、お願い」

「イヤ」

「離して」

「どうしても、ダメ？」

「うつ・・・仕方ないわね」

「やったー」

「キユー」

「でも！！」

「にゅ？」

「キユ？」

「カオルが怪我するような事があつたら、その時は・・・分かったわね」

「分かった！！よし！君の名前は今日からキュー太郎にしよう」
「キュー！！」

「待つて！！いくらなんでもキュー太郎は無いわカオル」

「いーじゃん、可愛いじゃんキュー太郎」

「キュー！！」

「あなたはソレでいいの？」

「キュー？」

「分かっでないみたいね、カオル、この子の名前は私が決める」

「ええー」

「ええー、じゃない！

・・・そうね、キュー、キュー、く、くる・・・クルトンに
しましよう！！」

「待つて！！それじゃパンを堅く揚げたやつみたいになっちゃうよ」

「いいじゃない、クルトン、可愛いわ」

「それに心なしが美味しそうだよ！！」

「はい、クルトンに決定！！ワー、パチパチパチー！！」

「僕の拒否権は無いの！？」

「キュー！！」

「そこで鳴くんだ！！」

「クルトンー、今日から私があなたのママでちゅからねえ」

「フェリシアの初めの態度は何所に！？」

クルトンが仲間になった。

第32話『真夜中の襲撃』（前書き）

遅くなつてすいません。

ヒフミ君の話ですがヒフミ視点ではありません。

第32話『真夜中の襲撃』

男は夜の街を駆け・・・ではない。徒歩である。

夜の街を走るなど、どこからどう見ても不審者のする行動である。

服も普通の服である。まあ、普通の服と言ってもそれなりに金のかかった服である。

今から行くところには、それ相応の服装をして行かなければならない
暫く街灯のともった道を歩き、目的地に通じる門の前に着く。

門には夜勤の兵士がいる。

「身分証を見せてもらおうか」

「これです」

男は身分証を渡す。

「うむ、確かに身分に偽りはないようだな、通っていいぞ」

「お勤めご苦労様です」

「お互い様だ」

男は兵士の労をねぎらい、堂々と門を通る。
城内に入り、防衛のために入り組んだ廊下を通り、目的地の扉の前に立ち止まる。

「今からお前を殺すが、許せ」

これは、男が“仕事”の時に言う、言わば矜持の様なものだ。
改めて目標に関する資料を思い出す。

資料には写真（魔法で撮られた物）があった。

目標の特徴は、この国、いや、この大陸では珍しい黒髪黒目。
顔は、彫りの浅いまだ幼さが多く残る顔、しかしその目に映るのは
深い絶望。

男は仕事柄そういう目をしている者を見ることは多かった。

しかし、今回の目標の目に映る程では無かった。

気持ち悪い。男は素直に気持ち悪いと思った。

どうすればこの年齢でそれ程の絶望を体験することができるのか。
何故ここまで生き続けることができたのか。何故それでも生きてい
るのか。

いやいや、これから自分が殺すのだから、そんなことを気にする必
要はない。

そう男は気を取り直しノブに手を掛ける。

なるべく音を立てずに暗い部屋の中に入る。

目標がベッドに寝ているのを確認する。

男は資料に間違いが無い事をひとまず安堵する。

が、油断はしない。

目標と指定された者が、自分に対する刺客という場合も無いではな

いのだ。

目標は規則正しい寝息を立てている。

ベッドの傍に立ち、男はナイフを抜く。

そのナイフはわずかな光も照り返さないように黒い塗料で塗られている。

男はナイフを首筋に、喉笛を絶つように一閃する。

まだ切った訳ではない、一撃で確実に仕留めるためのデモンストレーションだ。

そうして、最後の確認をした男はナイフを振りかぶり・・・

「ぐえっ!？」

変な声が聞こえた。

目標の喉笛を絶ち切るはずだったナイフを見る。

「濡れていない!？」

男はすぐさま、逃げようと身を翻す。

“仕事”は失敗だった。目標は生きている。理由は分からない。そう遠くない扉のノブに手を掛ける。

「開かない!!」

「ああ~~~~このドア、建付けが悪いんですよ~~~~」

男の切迫した声に、間の抜けた声が答える。

「建付けが悪い、だと!?!」

そんな原因で捕まりたくはない、男はそう思った。

「そ、建付けが悪い、無理に出ようとしたら大きな音がして隣の部屋の人起きちゃうよ」

「ならば窓から!!」

「うんうん、そりゃ窓から出ようとするよね~~~~」

「この部屋・・・窓が無い!!」

「いや~~~~いい反応~~~~おじさん芸人に成れるよ」

逃げられない!!男は焦った。
何でこうなった!!

「あ、『何でこうなった？』って思ってるでしょ」
「・・・いや、思っていない」

凶星だったが、男は虚勢を張った。
そう言いながらナイフを目標に向ける。

「逃げれないから、僕を殺して、ゆっくり帰る？」
「そうだ」

「僕は叫べばいいだけだよ？」
「叫ばないだろ？」
「うん」

「じゃあ、すぐに終わらせてやるから大人しくしている」
「いや」
「そうか、まあ関係ないがな・・・はっ！！」

男は、目標の目に向かってナイフを突き出す。

「おっとお」
「そういえば、さっき何故ナイフが通らなかった？」
「言っと思っ？」

「それもそうだなっ!!」

男は、目標の腹に蹴りを放つ。

「うっ!!」

「ナイフは通らなくても、衝撃は通るのか」

効くと思わずに放った蹴りだったが、どうやら効いたようだ。

「いったあゝゝゝ、そういえば、おじさんって殺し屋？」

「いや違う、何でも屋だ、金さえ払ってくれば何でもする」

「そう、じゃあ今回のコレも依頼主の金払いが良かったから？」

「ああ、前金で金貨一枚、依頼成功で金貨三枚」

「じゃあ、僕がそれ以上払うって言ったら・・・僕を殺さない？」

「そうだな、無理だと思うが」

「出来るよ」

「何、だと!？」

「出来るよ、ね?『最強』さん」

む、呼ばれたか。

ここまで長かったぞ、そもそも私は語り手をするのは好きではない。ならば、登場ぐらいいは派手にやらせてもらう！！

「呼ばれて飛び出て華麗に見参！！みんなのアイドル！！みんなの勇者！！」

弱者を助け、強者も助け、悪を撃ち、正義を助く！！ただし有料！！

光賀 光、美麗に顕現！！」

小規模な爆発とともに決め台詞を言い放つ！！

「長いし、煩いし、ゴロが悪い！！しかも金取るんだ！！」

「それはそうだろう、金が無いと何も出来ん」

「・・・・・・・・」

男は啞然としている。

まあそうだろう、私は天井に立っているのだから。

「おい、啞然としているところ悪いが、戻って来てくれ」

でないと話が進まない。

第33話『回想〜メイドさんと〜』（前書き）

ヒフミ視点、相変わらずキャラが定まらない

第33話『回想〜メイドさん〜』

さて、何故あんな事になっていたのかと言うと、話は数日前まで遡る。

仕事をしろと王に命令された自分は、メイドさんや執事さん（使用人と言うのか？）たちと一緒に、この城で言葉を覚えながら（『最強』さんの＜言語理解＞の魔法で言葉は分かるものの、この魔法が解けた時、もしくは魔法無しでも会話出来るように）働くという流れになった。

まあ、それが数週間前の話である。

なんだかんだ言っても、ここの生活には慣れてきた。

『人は慣れるものである』昔の偉い人が言っていたような気がする。それには自分も、大いに納得できる。

いやむしろ、それ以外なんだって言うんだ。

自分の人生、慣れなかったら即アウトな人生だった。

各国のマフィアに潜り込んだ事もあった。

絶海の孤島で殺人鬼と一緒にサバイバルした事もあった。

超高層ビルのエレベーターでの超知能犯罪者と『冥探偵』の一騎打ち、

問題が出されて答えられなかったら、エレベーターが落ちるというのもあった。

ソレ等が、まだマシと言える人生だ。

たかだか異世界に飛ばされたくらい、大したことない。

「今日はここを掃除します」

「ハイ、分かりました。今日もフラフィーさんハ、お美しいデス」

「全くそんな言葉ばかり覚えて、さっさと掃除を始めなさい」

「すみマセン、もうイチド、ゆっくり言ってクダサイ」

「さっ・さ・と・掃・除・を・始・め・な・さ・い」

「ハイ！！分かりました！！マイマスター！！」

「な！？ちょ！！待ちなさい！！マイマスターって何です！？」

カタコトの演技は忘れない。あとボケも忘れない。

自分に指示を出して下さった、メイドのフラフィーさん。

初めて見たときは艶のある銀髪かと思ったが、よく見たら薄っすらと紫色な髪色。

目は大きくやや釣り目気味、鼻はそこまで高くないもののとても形がいい。

唇は薄すぎず、厚すぎず。手足が長く、体の線が細く見えるが、弱

くは見えない。

胸は普通だ、だが全体のバランスが非常に取れているため、とてもカッコイイです。

アレか、いわゆる補正と言われるヤツか、登場人物全て美形なのか。

「何をジロジロ見ているんです？」

「~~~~・・・フラフィーさんの？・・・アッ！！カラダ？」

ゴッ！！つとホウキによる突きが額に突き刺さる。

いいツツコミだ！！だけどホウキは痛いから止めて！！

さて、真面目に掃除するか。自分の任せられた場所は廊下。城の掃除に当たって注意すべきは、やはり豪華な調度品の数々だろう。

傷を少しでも付けたら、一生掛かっても返せない程の金額を要求さ

れるかもしれない。

だが、傷を付けてもきつと、『最強』さんか『最恐』君が帰り方を見つけて、

さつさと元の世界へ帰るだろう。

たとえば、『最強』さんや『最恐』君が帰り方を見つけれなかったとしても、

『最強』さんが元の世界に居る『博士』に、『世界を複数人でも越えられるモノ』を

依頼しているので、元の世界で早くて一ヶ月、

長くても三ヶ月もすれば造り上げてくれるだろう。

元の世界で一ヶ月、こちらの世界での一ヶ月が元の世界での一週間だから、

単純に計算しても、こちらの四ヶ月で向こうの一ヶ月である。

長い、下手すると一年もここに居なければならぬ。

それ程の間、家（ボロアパートの一部屋）に帰らなかったら、大家さん位心配してくれるだろうか？

しないか、何日も居ない事なんかよくあったし。

家賃もまとまった金が入った時――『冥探偵』の『お供』としての仕事の報酬）に前払いしてる。

まあ、帰った時の心配をしなくていいのはとても楽だ。

『冥探偵』との仕事は、沢山の金が入るものの、その度に死んだり、死にそうになるし、

帰ったら家が無くなっていったというのもよくあった、

部屋とか家とかが自分の所有物ではなくなっていた、

ではなく物理的に、いわゆる更地、英語で言うならグラウンドゼロである。

グラウンドゼロ・・・中学生が好きそうだ。

はてさて、さつきから思考が脱線しっぱなしだ。

今は掃除だ、掃除。

大理石の様な石の壁を濡らした雑巾で、ん？雑巾？なんか汚そうだな。布巾で拭く。

洗剤みたいなものが在れば良かったものの、生憎そういうモノは無いらしい。

コレもまた、魔法が発展している代償と言っやつだろうか。

魔法、つくづくファンタジーだな。

自分に使えるだろうか？無理か？無理だな。うん、きっと無理だ。

『最強』さんは、『最強』さんだから魔法が使えたんだ。

徒然なるままに思考を垂れ流していたら、向こうの方から人が二人歩いて来た。

「アレは・・・大臣の息子と姫様です。やることは分かっていますね？」

「ハイ、アイアンクローですネ」

「違います、何です？それは」

「間違えましタ、アイアンボムDEATHネ」

「一体何の事だかわかりませんが、発音が一部違うことを指摘しておきましょう」

「ム、このボケが通じないノデスカ・・・」

「あなたは何がしたいんです？」

「漫才」

「今とてもいい発音でしたが、それを求めても何の得にもなりませんし、

今すべきことは全く違います」

「ハイ、分かっています」

「分かっているなら初めからしなさい」

「ハイ、スミマセンでした」

「うん、よろしい」

「ところで、何をするのデスカ？」

「ダンッ！！と勢いよく突き下ろされるホウキ、そしてその先には
「ッ！？足がつ！！足がああああ！！ただのボケなのにいいいい
い！！！」

第34話『回想〜登場!〜お転婆姫〜』(前書き)

なんかヒフミ君がただの変態になった気がする。

第34話『回想／登場！！お転婆姫』

とまあ冗談一（？）はさておき、無駄な会話をしているもこの廊下は異様に長い。

今の会話もほとんど向こうには聞こえていないだろう。

することとは、掃除していたのを素早く片付け、礼をすることである。

やはりこちらの世界でも、礼をする時の角度、姿勢等、厳密に決まっているらしい。

腰を折る角度は30度とかそんなのである。多分。きっと。

うむ、自分の記憶ですら曖昧だ。

「早くしなさい、敬礼です」

「ハイ」

敬礼とは、あの手を頭にビシツとする奴じゃない。

アレは軍隊の敬礼だ。こちらの世界でも軍隊の敬礼は手をビシツとする奴だ。

コレもまた勇者サトーの残したモノである。

何やってんだサトー！

メイド、執事など使用人の敬礼は、いわゆるジャパニーズOZ
IGIだ。

何やってんだサトー！

ちなみに、メイド服、執事服も勇者サトー考案である。
何やってんだサトオオオオオオ！！

「はあ、はあ、はあ」

「どうしたんですか？」

「イエ、別に大した事ありません・・・」

「そうですか？ならいいんですが・・・」

「チョット、お辞儀した時に見えるフラフィーさんの足に興奮して
だけですカラ」

「前言撤回します、齒を食い縛りなさい」

「エッ！？チョットマッ」

急に暗くなる視界、顔に感じる柔らかい感触、これは・・・手が。
今自分は、アイアンクローをされているのか。

「フツ、アイアンクロー如きじゃワターシは倒せませんよ」

「四つ、言わせていただきますしよう。

まず一つ、何様ですか貴方は。

二つ、これはアイアンクローと言うのですか、初めて知りました。

三つ、それにまだ終わりじゃありません。

四つ、遺言がありますか？」

「ナン・・・っておいしいよね」

「遺言はそれでいいですか？」

「いい・・・くない！！良くない！！死にたくない！！」
「もう、遅いです。さようなら」

そう言い終えると、自分の顔にかかっている圧力はさらに強くなる。

「ぐぎ！？頭蓋骨がつ！！ミシミシっ言ってるっ！？」

痛い！！猛烈に痛い！！顔が取れる！！

だが、それで終わりではないのがフラフィーさん。

何所にそんな力があるのか問いたくなるような腕力で持たれている顔に、新たな力が掛かる。

その力とは、顔を支点に下に掛かる重力。

そう！！自分は今持ち上げられているのだ！！

それはもう、手足がプランプランするぐらいだ。

そして、この状況ですんなり降ろしてくれるほどフラフィーさんは優しくない、

ならば、残る選択肢は『叩き付けられる』のみである。壁か、床に。

「さつき磨いたバカリなので、壁はやめて下さい」

「却下します、今から床と壁が汚れますが貴方が掃除しなさいね」

「両方！？待って・・・ガッ！！」

壁に叩き付けられ、目の前に星が飛ぶ。

ここで『待つてくれ話せば分かる』と言おうとしていた、自分のネタに対する執着に驚く暇もなく、壁から離れる。

世界が回るような感覚と、風を切る音が聞こえ、瞬間床に叩き付けられる。

そして、流れるような攻撃をしたであろう、フラフィーさんのスカート際のキワドイ所を見たのを最期に、自分の意識は途切れる。

ここからは三人称視点でお送りいたします。

なんてね。

だけど立てない、後頭部に致命的なダメージを受けた直後で立てる程、自分は頑丈ではない、だが、意識が途切れるのが一瞬だけというのは、やはり自分も人間離れしている証拠なのだろう。

「……ぐ……う」

まさしく、グウの音も出ないとはこの事か。いや、違うか。

手足の先の感覚が無い、もしかしたら神経がイカレているのかもしれない。

ふむ、死なない程度に痛めつけるとは、フラフィーさんもなかなかやり手である。

もしかしたら、フラフィーさんはとても強いかもしれない。いやいや、『かも』じゃないな、フラフィーさんは確実に『強い』それも、自分の知る中でもトップクラスである。もちろん、トップは『最強』さんだ。

「ちよつとあなた！！何やってんのよっ！！」

「これはこれは姫様、少し不届き者に教育をしてたまでです」

「これが教育！？教育ですって！？あなた良くそんな事が言えるわね！！！！」

ああ、こんなにも血が！！死んでるんじゃないでしょうねコレ！！

「それは大丈夫です。人も強さを見抜くほどの『眼』は私も持っておりますので」

「でも！！！！」

そこに聞こえてきた勝気な声、自分は今うつ伏せに倒れている。(床に叩き付けられたときは仰向けだったが、今は通行の邪魔になるかなんかで、端にどけられているのだろう。)なので、姿は見えないもののフラフィーさんが『姫様』と言っているから、この声の主は『最強』さんが以前言っていた『お転婆姫』なのだろう。いやはや、流石である。あのフラフィーさんに口答えするとは。突然話が変わるが、この城の中のパワーバランスの話をしようと思う。

この城の中で今知る中で、力を持っているのは『勇者』であり『最強』である光賀さん、持っている力といえばそのまま『最強』な力と『勇者』に関するネームバリューがある。

『王様』であるアビヤヌス・ソロモン・サトーは、まんまこの城一番の権力者だ。

『騎士団長』であるセマクヤ・タルタク・アクシャフ、『騎士団』と付いてはいるがこの騎士団は戦力を王に集中させないために国民に忠誠を誓っているとか。

国民の代表である『大臣』達、国民達による選挙で選ばれた『議員』達から更に選ばれた者。

そして最後に『メイド長』であるフラフィーさん本名フラフィール・ルル・ルラード、曰く『国内最古にして最強』だとか、曰く『勇者サトーの最も近くに居た者』だとか。

うん、二人ぐらい呼び名に『最強』の文字が入ってる。絶対おかしいよねコレ。

勇者サトーの最も近くに居たって、フラフィーさんは何歳なんだ？とか聞いたら確実に殺されるよね。

そんなフラフィーさんに口答えするとは、『お転婆姫』もなかなかやりおる。

「大丈夫!？」

そう言っ
て抱えあげられる、お姫様に抱っこされるコレもまたお姫様抱っこである。

くだらねえ、もう一度自分に言う、くだらねえ。

「ええ・・・まあ・・・死ぬほど痛いですが」

「もうちよつと我慢してね、今すぐ治療師のところへ連れて行ってあげるから」

本当に、『お転婆姫』なのか? 『最強』さんから聞いていたイメージと合わない気がする。

第35話『回想／＼海草と海藻は別物である』(前書き)

遅くなつてすみません。

ヒフミ君視点、なんか最後にヒフミ君は云々書いていますが、特に意味はありません。

第35話『回想　海草と海藻は別物である』

「それで？あなたは何故あんな事になったの？」
「？」

あんな事？何の事だろうか？
それより今の状況を話しておこうか。
誰にだって？ふん、そんな事は分かり切っているだろう。
そう！！君たちにだ！！

（うるさいよ、ヒフミ）
（どういうテンションなの？）
（っていうか知ってるよ、ずっと見てたし、何でそんなこと言うんだ？）

え？そうでもないよ『みんな』の出番が無いかもしれないと思うて。

（あ！！本当だ、今まで全然出番なかった！！）
（意外と真面目な答えが返ってきてびっくりしたよ）
（そんな事心配しやがって、俺たちは導入のためのキャラ、もしくは要所要所出てくるようなキャラ だから、そんなに出なくたっていいんだよ）

まあ、そんなこと関係なく説明はする。

今、自分は医務室の様な所に居る。さつき、フラフィーさんのアイアンボムによって出来た傷を治療するためだ。それで、治療、魔法―――医者？治療術師？というのだろうか？『＜治療＞おおおおおおお！！』と叫んでいたので治療術師だろう―――による治療を受けていた。そこには、ここまで自分を運んで来た『お転婆姫』もいる訳で、今はこの部屋に居た治療術師でさえ退出させられ、何故か自分は尋問を受けているわけだ！！
どうだ！！分かったか、この野郎！！

（だから、知ってるって）

（だから何なの？そのテンション・・・）

（もう、面倒臭えコイツ）

「ああ、あなた言葉が分からないんだっけ？」

「ハイ！！」

「そんな自信持って言われても困るわよ」

「ハイ！！」

「ちゃんとやってること分かってる?・・・そうだ、分かってない
んだった、はあ」

「ハイ!!」

「あなた、ホントは分かっているんじゃないの?」

「ハイ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ヤバ」

「・・・ヤバって、まさかあなた・・・」

しまった!!!ノリと流れて「はい」と言ってしまった!!!

(わざとだ)

(ゼツタイにワザとだ)

(お前・・・どうすんだよ・・・俺等なんもできねえぞ?)

マジで?本当なんか出来ない?記憶の消去とか・・・あの世的特権
で、

だって『みんな』ってなんか、お偉いさんでしょ?

(え?そんなこと言ったっけ?)

(何でそのこと知ってるの?)

(まさか・・・バレていたのか、俺が宴会部長だということが)

無理にポケ盛らなくていいから、言っただじゃん『最強』さんに自己紹介した時に。

（・・・確かに言っただね）

（でもダメだよ）

（そういう決まりだからな、甘えんなカズ）

出来るには出来るんだ・・・。

うん、分かった、自分でどうにか誤魔化す。

（そもそも自業自得だからね？）

（エンマさんも気のいい人だけど、甘やかしたりしないからね）

（そうそう、可愛い幼女だしな）

そんな情報いらないよ・・・え？幼女？カワイイの？年齢は？
見た目小学校高学年以上は、幼女とは認めないからね？

（めっちゃ食いついた！！）

（食いつかなくていいから！！ひーちゃん、私たちと会ってない間に何があったの！？）

（まさかここまで食いつくとは思ってなかった・・・いや！！今はそれよりも姫さんだ、

変な間が空いてる！！）

う・・・うん分かった、後でどんな子が聞くからね？

「アー、イエース、アイキャンスピーキング」

（なぜに英語）

（しかも、今の英語的にはおかしいしね）

（反応はどうだ？）

これで誤魔化せたか？

「ふざけないで、あなた、言葉、話せるのね？」
「・・・はい」

誤魔化せなかった!!

「それで？何で話せることを隠してたの？」

もう隠せないか・・・仕方ない、話すか!!仕方なくな!!

(うわぁ~~~~嬉々としてるよ)

(それでいつつも死にそうになってるのに)

(お前さぁ、いい加減止めろよそういうの)

何を言う!!自分はエムなんかじゃない無い!!ノーマルだ!!

(そんなこと言ってない!!)

(もう疲れたよ、ひーちゃん)

(コイツのこういう性格は昔からだ、諦めろ)

「話せるとなると、面倒な事になりそうだからです。

それと、今話せているのも魔法のおかげなので、

魔法なしでも話せるようにと勉強しようと思ひまして」

「それが理由？何故面倒な事になると思うの？」

「『最強』、いや『勇者』で通りますか？」

「＜召喚＞された彼女達の事？」

「そうです。私もその＜召喚＞で呼ばれたんです」

「知ってるわ」

「なら、大体分かるんじゃないんですか？」

「うん？・・・分からないわ、どう言う事？」

ホントにこの人『お転婆姫』か？なんか凄い大人しいけど。あとちよっとバカっぽいけど。

そっうえば名前、聞いてない。ま、いいか後で。

「では、『勇者』の特徴を上げてみてください」

「特徴？綺麗とか、カッコイイとかそんなの？」

「はい」

「綺麗で、カッコよくて、スタイル抜群で、手足が長くて、胸が大きい、

でも、その胸もただ大きいだけではなくて、形がとてもいいわ、

それに顔も、もし天使と会ったことがある者が居るとすれば、

十人中十人、

違うわね、十万人中十二万五千人の人が天使だと言うでしょうね」

「それもそうですが、もっと他の事です（二万五千人どっから出て

来た)」

「とても強くて、頭がいい？」

「では、どう強いでしょうか？」

「あなたちよつと、私の事バカにしてない？」

「バカになど（ちよつとしか）してませんよ、どう強いでしょうか？」

「力が強くて、剣術もとても強くて、とても速くて、どんな魔法でも使える」

「そうです、魔法です」

「魔法？それがあなたにどう関係あるの？あなた魔法は使えないんでしょう？」

「ええ確かに、全然使えませんね」

「じゃあ関係ないじゃない」

「それが、そうじゃないんですよ。姫様は、魔法使えますか？」

「そんなの当たり前じゃない」

「では、魔法はどうやって使いますか？」

「＜詠唱魔法＞なら魔力を練って、起こすことをイメージして、

それに合った古代語を言う。＜魔法陣魔法＞なら、＜魔法陣＞を書いて＜起動＞する」

「その通り！！」

「これくらい、基本中の基本ね。でもこれがどう関係するのよ？」

「そのどちらにも必要なものが在るはずです」

「そんなの、魔力と古代語に決まってるじゃない」

「はい、その通り、正解です。ヒューヒュー！！」

「絶対バカにしてるでしょ！！」

「とまあ、姫様を小馬鹿にするのは止めて・・・」

「やつぱりバカにしたた！！あなた、許さないわよ！！」

「まあまあ、そんなこと置いといて、では、私たちの出身は？」

「そんな事！？人を馬鹿にするのがそんな事ですって！？」

「ほら答える！！早く！！」

「えっ、うつ、つとお・・・異世界!!」

「もつと細かく!!」

「うう・・・に、二ホン?」

「正解!!では、そこで話されてる言葉は?」

「そんなの、分からないわよ・・・二ホン・・・語?」

「正解!!あと一息!最後に、日本語と魔法の関係は?」

「分からない!・・・ヒント!!ヒント頂戴!!」

「あげない!!もうちよつとだから!ほんの、もうちよつとだから!良く考えて!!」

「ケチ!!・・・う～～ん・・・魔法・・・魔力・・・

古代語・・・

二ホン語・・・語?・・・もしかして、言葉?・・・古代語と二ホン語は同じ?」

「さあ?」

「ええ!?!」

「細かい所は分かりませんが、大体同じだと思いますよ?」

「ふ～～ん・・・で?」

「で?とは?」

「そんな話をしたからには、何かあるんでしょう?」

「いえ、別に」

「ええ!?!・・・もつとなんか、こう、ないの?交渉的なものがない!!」

「ちよつと待ってください・・・

・・・特にありませんね」

「ええ!?!」

「なんにも、ないな・・・うん、ない。よし、帰るか!!」

（血の）掃除もしないといけないし。

あ、名前聞いてない。まあいいか、フラフィーさんに聞けば。

「では、これにて失礼させていただきます」

「ちょ、ちょっと待って!!」

掛かった!!

「何でしょうか？」

（こうして、また一人、犠牲者が増える訳か）

（ひーちゃん、物凄くいい笑顔してる）

（ホントこえーよな、カズって）

第36話『海藻く間違えた、回想』

「ちよちよちよちよつと待って!!」

「何言ってるのあなた？」

「いえ、少しふざけただけです……それで、何でしょうか？」

「あなた、私と手を組まない？」

ホイ来た、直球ど真ん中!!

「手を組むとは？」

上手くいきすぎて、笑いそうになるのを堪えながら言う。

「私付の使用人になれてことよ、後何ニヤニヤしてるのよ」

「っ!?!……すいませんつい、思い出し笑いで」

「思い出し笑い!?!この状況で!?!」

「すいませんツブツクツアハツアハツフウ……ハハハハ

「ハハハア！！」

「すいませんと言いつつ大爆笑！？しかも最後悪役笑いだし！！」

「ふむ、それで？」

「切替早っ！！それでって何よ？」

「姫様付の使用人になることで、私に何のメリットがあるんですか？」

「う・・・うん・・・それは・・・」

やっぱり考えてなかったか、ならまだ隙があるな。

ここでの姫様側のメリットは、自分の秘密を知っているという事、それに自分から日本語を教えて貰えるという事だ。

「なら、私から条件をお出ししましょう。ソレを守ってくれるならば、姫様の使用人になりましょう」

「条件？」

「きつとこの国には、王族、もしくは王族の認めたものしか入れない場所が在るはずです。そこに自由に、とまではいいませんが、入る権利を頂きたい」

「いいわよ」

「え？」

ダメもとで言ったのに偉くあっさり許可されてしまった。

「その代り私からも条件があるわ」

なるほど、そう言う事が。

どんな一難題（面倒事）が待ち構えている？

「はい」

「私と一緒に学校に行って!!」

「はい？」

学校？何故？

「なによ!!この条件が飲めないっていうの!!」

「いえ!!分かりました。それでいいです」

「じゃ交渉成立ね」

そう言って差し出される手。

「？」

「？ニホンには握手無いの？おかしいわね・・・あつたと聞いているんだけど」

「いえ！！ええ、ありますとも！！！」

手を握る。

「よろしく」

「こちらこそよろしくお願いします」

いやはや、自分には詩的センスが全く無いものだと思うけど、『お転婆姫』の笑顔はとても明るく、向日葵のようだった。
あ、名前聞いてない。

医務室から出ると、病院の待合所に在る様な長椅子に、大臣の息子さんが座っていた。

「あら、待っていてくれたの？」

「当り前です！！」

「別にもう帰ってくれても良かったのに……」

「そんな事出来ません！！こんな得体の知らない奴と姫様を二人きりにして置いていくなんて！！」

そう言つて、まるで親の仇を相手にするかの様なものすごい形相で睨んでくる大臣の息子、え？何で？何でそんな睨んでくるの？確かに得体のしれない奴かもしれないけどさあ。

「そんな顔しないで下さいよ、大臣の息子さん、綺麗なお顔が台無しですよ」

息子をあえて強調したのは、彼が大臣の息子でしかない事を分からせるためだ。この国には貴族や世襲制などと言う制度は無く、あくまでも実力主義である。それゆえに、……って言うかなんだかんだ言つても親が権力を持つていても息子には全く関係のない話なのだ。親が大臣や議員だと、親が仕事を居やすいように、城や議会場近くの邸宅に住まわせてもらえる。ただそれだけの事だ。しかし、王族は違う、王族はこの国の成人年齢より権力を持っている。

その代りに、王族はまだ小さな頃より国を治めるための教育を徹底的に受け、なおかつ国の現状を見るために、護衛はあるものの危険な旅に出たり、庶民の生活を知らなければならぬ、と言う理由で農民や商人の家で暮らしたりしなければならぬ。言っちゃえばそれだけの働きをしているのだ、この『お転婆姫』も、どれ位お転婆なのか良く分からないけど。

「くっ!!」

自分の意図する事が分かったのか大臣の息子さんは苦悶に顔を歪めている。

「ほら、私はこの通り大丈夫です。だから、心配しないでください」

「ですが、姫様!!」

「大丈夫です」

「くうっ!!.....お前、覚えておけよ!!」

そう言つて、どこかに去って行く大臣の息子。

何でそんな捨て台詞吐かれないといけないの？自分別に大したことしていないよね？

それより一国の姫相手に挨拶も無しに帰るとか失礼じゃない？

「・・・・・・・・・・はあ」

「どうされました？」

「あいつ、メンドくさいよね、事あるごとに、姫様、姫様！！って」

「はは・・・それより、何で私に接するときは猫被らないんです？」

「あんた相手じゃ、多分猫被っても無駄かと思ってるね」

「それはそれは、光栄の極みです、姫様」

「まっ、またバカにしてる！！牢獄にぶち込むわよ！！」

「おゝそれは怖い、失礼いたしました、姫様」

「治す気無いわね！！それに、私にはエレアノール・アビヤヌス・

ソロモン・サトーって立派な名前があるの！！姫様なんて呼び方やめて！！」

「エレア・・・長っ！！呼びづら！！もう、略してエアソーサーでいいですか？」

「あんたって本当に無礼ね、それだと空気皿みたいな感じになるから止めて」

「じゃあ、エア」

「空気になったー！！」

「エ」

「もう、名前なのか文字なのか分からない!!」

「E」

「ただの頭文字!!」

「まだ不満ですか、仕方ないちゃんと繋がりますよ……EASS、
イースでいいですか？」

「イースでいいですか？じゃないわよ!!もう、普通に読んで普通に!!」

「姫様」

「ああもう!!振出しに戻った!!」

「天井はお笑いの基本だよね」

第37話『穴二つ』

以上、回想終わり。

うん、何の事だか分らん。自分でも分らん。いやはや、自分の記憶ですら曖昧で信用が出来ないとは。

「と言う訳で、あなたの雇い主は分かっているんです」

「何が『と言う訳』なのか理解出来ないが、確かに俺の雇い主はソイツだ。だが、どうするんだ？ソイツから金なんか搾り取れないと思うぜ？俺は契約書とか書いてないからな」

「口約束、か」

確認を取るように質問したのは『最強』さんだ。

「ああ、それよりも聞くが、お前は何時までソコに居るんだ？」

自分を襲ってきた男がそう言うのも最もな事だ。何故なら、かれこれ三十分程あのか天井に立っている状態なのだ。

「うむ、降りるタイミングを完全に見失ってしまつてな、降りてもいいか？カズ君、私は放置プレイなどと言う特殊な趣味は無いが、カズ君がどうしてもと言うなら、私は甘んじてこの状況を楽しみ、愉しみたいと思うぞ」

「降りてきてください」

「そうか・・・」

「何でちよつと残念そうなんですか」

「よっ！！」

ズゴツという、抜けた掛け声とは裏腹に凶悪な音がしたかと思うと、音も無く自分の隣に降り立つ『最強』さん。

ズゴツ？

「ああっ！！天井が！！」

そつ、開いているのだ。穴が。そりゃあもう、クツキリ、ハツキリと、二つ。

という事は『最強』さんは、天上に立っていたのではなく、刺さっていたのである。

「どうするんすかアレ！！パラパラ粉落ちてくるし！！っていうか天井って石なのはどうやって刺さってたの！？」

「それはだな、砕かないように慎重に素早く突いてだ」

「なんて力技！！っていうかそんな事出来るの！？」

「私に掛ければこんな事、文字通り朝飯前だ」

「確かに朝食前だけど！！」

今は深夜である。こんなに騒いで人が来ないのが不思議だ。

「それは私がく防音>しておいたからな、心配するな」

「アレ？今何も言っていないのに・・・心読まれた、コワイ」

「そんな事、身体に書いているぞ」

「顔じゃないの！？」

「話を戻しましょう」

本当に。

気を取り直し、尋問を再開する。自分を襲った男は、逃げられないと分かったらしく、観念した様子で大人しく座っている。

「僕を狙った犯人、もとい依頼人は、この名前も知らない大臣の息子、ですよな？」

「ああ」

「それで、あなたは金さえ積みめば何でもする何でも屋、という事でいいですか？」

「ああ、庭の草抜きから戦略の立案まで何でもござれだ」

「じゃあ、金は有りますんで今回の依頼は無かった事にして下さい」「いやいやいやいや、その金は何所にあるんだよ、無いことには話にならないぜ、ちなみに言うがな、今回の依頼、前金で金貨一枚だぜ？しかも成功したら更に二枚追加、そんな大金どうやって払うんだよ？」

金貨一枚だと！？自分ごときに？金貨一枚って言ったら大体百万位だから、成功したら三百万！？ヤバッ、どんな金銭感覚してるんだ、大臣の息子。

「なんだ、それだけか、良いだろう、払うぞ、何枚欲しい？」

「今後の事を考えると、最低でも六枚は欲しい所だな、お前らみた

いな「よし、二枚プラスで八枚だ」のがそんな大金払えるんだ、スゲー！！八枚！？こんな大金初めて見た！！」

人がまだ話していると言うのに『最強』さんはさっさとお金を払ってしまっていた。

「それは置いておいてだな、これでカズ君も目を付けられる事になっってしまったわけだ」

「そうですね」

「よっ大将！！おやつさんに何処まで付いていきます！！！」

「というか、回想を回想するほとんどの原因がカズ君にあるな」

「いやあ、そんな事は無いんじゃないかなあ？と思う事も無きにしてもあらずですが」

「そこはハッキリしてくれよ」

「無視ツスか！？俺の事無視ツスか！！くうく！でも、俺、頑張るツス！！」

「ただ、ハッキリしたことが一つ有ります」

「なんだ？」

「腕立てしちゃうツスよ！！よっ！！ほっ！！はっ！！」

「この胸が不自然にドキドキする感じ、これが、恋」

「それはただの心不全だ、それにお前はアレだろう『冥探偵』一筋だろう」

「やっぱり？じゃあ、フラフィーさんを前にするとものすごくドキドキするのは？」

「腹筋もしちゃうツス！！ふっ！！ふっ！！ふっ！！」

「フラフィーってあのメイドさんか・・・あの人の前に居てドキド

キするだけなのはカズ君もさすがだな」

「そんなに凄いんですか？」

「ああ、戦ってみないと分からないが、多分、私といい勝負だぞ？」
「うわっ！！じゃあ、もしかして」

「ああ、この城で一番強いなメイドさん、いや『冥土』さんか」

「なにその怖いあだ名！？」

「さすがにずっと無視はツライツスよ………光賀さん、二ノシタ君」

「どうした？『田中』」

「っていつか居たんだ『田中』君」

自分を襲った男。

改めて『田中』登場である。

第38話『世界征服まであと少し』（前書き）

つい、ファンタジーの世界観越えちゃいました。

第38話『世界征服まであと少し』

数日後、同じ部屋、と言いか自分の部屋。深夜。

「それでは、『第一回3-A緊急会議』……情報は力なり!!まさかの大量異世界迷い込み!!俺たちこれからどうするよ!?あ、ちなみに俺は……」を始めたいと思いまゝす。何時もあなたの傍に『田中』、社会生活を応援する『田中』、おはようからお休みまでを見守る『田中』の提供でお送りいたします。司会進行も『田中』、まさに自作自演!!」

「副題、長っ!!俺は、の後何なの!?気になる!!」

『田中』、その姿は、自分を襲った男ではない、紺色の制服と、所謂エプロンドレス(ぶつちゃけ言つとメイド服)を着用している、見るも可憐な女性の姿だ。

ここに『最強』さんの姿は無い、『最強』さんは自分の部屋でまた別の『田中』を迎え入れているはずだ。

「はい、皆さんからのいいツッコミが貰えました。それでは、改めて、始めたいと思いまゝす、というか始める、口調戻すわ、人の目

がある訳でも無し」

何故姿が違うのか？と言うかそもそも『田中』は何者なのか？

それは、『悪の秘密結社：ヘルアーク』、地獄悪なのか悪が減るのか良く分からないような、子供が考えた様な名前の『悪の組織』のボスである『五代目統括』の息子である。

「はい！！」

「なんだ？」

「今回の会議、誰が参加してる？」

『田中』の『力』【支配力】、『悪の組織』のボス（ではない、なるつもりも無いらしい）らしい『力』だ。その『力』【支配】は『田中』に直接触られる、もしくは【支配】されている人間に触られる事でそれは広がって行く。まるで、と言うよりもまさにそのものと言った方がいいような気もするが、接触感染で広がって行く、まさにウィルスのように、その『力』を使えば『組織』が掲げる『世界征服』の野望など瞬く間に叶えてしまう。まあ、そんな野望も『世界平和』みたいな夢も持ち合わせていない。

『田中』、それこそが、田中君の本名、あだ名ですら無い、そんな呼び名、だが、彼のすべてを表していると言っても過言ではない（気がする）。

「そうだな、この世界、星か？名前は分らんが今、【支配率】は大体70%だ、その中に居る、もとい俺のネットワークに掛かっているのは、光賀、影山、一、櫻井、洲羅、猫屋敷、朝霧、夕暮、赤井、佐藤、堀内だ。そのうち参加しているのは、光賀、影山、一、櫻井、洲羅、猫屋敷、朝霧、夕暮、赤井、佐藤だ」

「そんなに来てるの！？」

「もつと居るかもしれないがな、見つけた奴には声を掛けてる」

「堀内君は？何で参加してないの？」

「あいつはアレだ、ダンジョン探索だよ」

「納得……それにしても珍しいね、『田中』君が積極的に、しかも広範囲に渡って【支配】するなんて」

「……あんま……やりたくないんだけどな、こんな状況だしそつも言つてらんねえよ」

本来『田中』は今の様に、人の体を操作するほど【支配】する事も無ければ、これ程の規模で人々を【支配】することも無い、『田中』はとても真面目で気の優しい、それでいて少し口の悪い人間だ。ならば何故そんな事をしているのか？

『田中』は周りの環境、もとい自分の関わるモノを無理やり変えられる事が嫌いだ、むしろ嫌悪している、忌み嫌っていると言つてもいい。もし、『田中』に関係するモノ、特に人物などを害そうなどとする輩が現れた場合、その輩は徹底的に排除される、その痕跡を残すことすら許されない程に。

そんな『田中』が、この世界に迷い込んでしまった、いや、自分や『最強』や『最恐』の＜召喚＞が原因であろう今回の事だ、＜召喚＞を行った者に相当な怒りを抱いていてもおかしくは無い。

「よし、じゃあとりあえず皆の状況を、自分の口から言ってもらおうか」

「何で自分の口から？全部見てたんじゃないの？」

「全部なんか見てないし、それに俺は客観的にしか見れないからな、その人の意見つてのは物凄く貴重な情報なんだよ、まあ【支配】した人間なら主観的にも見れるんだが」

「うん？じゃあ僕達も【支配】すりゃいいんじゃないの？」

「それが出来ないんだよな、俺のこの『力』は強力な『個』は支配出来ねえんだよ」

「強力な『個』？」

「そう『個』、パーソナルだよ、強いやつは支配出来んのよ」

「強い？僕が？あんなに『普通』な佐藤君が？」

「お前なあ、ソレ本気で言ってるのか？あの高校に通ってる時点で『普通』じゃないだろ」

「それもそうか・・・でも、強くは無いよ？」

「俺の言う『強さ』は『力』や『戦闘力』じゃない、『個性』の強さだ」

「だから『個』？」

「そうだ、言ってしまうば普通に強い奴なんか五万いや、五億と居るからな」

「『力』がいくら強くても『個性』が無かったら『田中』君は簡単

に【支配】出来る？」

「ああ、親父の『組織』って、いつも『ヒーロー』と戦うとき、あの全身タイツみたいな奴らと、毎年同じような『怪人』しかいないだろ？勝ちたいなら『怪人』を大量にぶつけりゃいいだけの話だろ？」

「そうか、いつも同じことしか言わない奴らは『個性』が弱いから簡単に大量に【支配】できる、でも『怪人』は『力』も強いけど『個性』も強いから多くは【支配】出来ないのか」

「まあ、それでも『怪人』は似たようなのが沢山いるから、いくらか『個性』は落ちてんだがな」

「そうなんだ、でもいくらかは『個性』は『強さ』に比例するよね？」

「まあそつだ『絶対的強者』はどこにでも居るもんよ、身近なモンで言えば……………」

「『最強』とかな」

第39話『第一回緊急クラス会議』（前書き）

遅くなつてすみません

第39話『第一回緊急クラス会議』

「話がそれだな、じゃあ言ってもらおうか」
「分かった、じゃあ……」

自分の身に起きた事、こつちに來た状況、今までどう過ごして來たかなどをかいつまんで話した。

「一度死んだつてお前……」

「正確には二回ね」

「いや、いやいやいやいや！！お前、良くソレでさっきのセリフ言えたなオイ！！」

「ウチの学校じゃそんなに珍しく無いでしょ？」

「ゾンビとかそんな奴のことを言つてんのか？」

「うん」

「言つておくがな、普通人は死ぬとそれまでだ、この世界でも地球でもな」

「……え……そ、そうなの？」

「ちよつと待て……待つてくれ……おかしい、主にお前の常識とかが……」

「そんな！？常識から疑われるの！？」

「そりゃそうだろう！！お前を育てた奴に会いたいわ」

「今度会う？」

「オウ、会わせろや」

「あの世に居るけど」

「あの世かよ！！無理じゃねーか！！」

「え？」

「何だよ、『え？』って、オイまさか会えるとか言わねーよな」

「逢えるけど？」

「確かに『会える』とは言ってるが、殆ど字の違いじゃねーか！！」

「良く分かったね？」

「お前は大体そういう奴だからだよ！！っていうかどうなんだよ！！」

「だから、いったん死んで・・・」

「それが普通は無理だっつってんだろ！！」

「それでもないよ、ほら、こういう感じにナイフを突き刺すんだよ、そしたら楽に死ねる」

「ああ！！もう、メンドクせえコイツ！！そう言う事言ってるじゃねよ！！」

とかなんとか、文句を垂れながらも付き合ってくれる田中君であった。

「あ、そついや他の皆は何してんの？てかどこに居んの？」

「いきなりだな」

「それが僕だよ」

「……まあ、いいか、言っても仕方ないし……
そつだな、少し待ってくれ」

そついうと、田中君は部屋から出て行った。

「待たせたな」

「待ったよ」

「……正直に言つな」

暫くして戻ってきた田中君は、抱えるようにして何かを持ってきた。

「それは？」

「世界地図だ」

「あれ？地図？こついう所にある地図って、正確じゃないって聞く

けど？」

「描いてきた」

「あ、それで」

地図を書いてたら、遅くなることも当然か。

「これがこの世界、この星の世界地図だ」

「おお！！」

その世界地図は、この世界の大陸の形を知らない自分でも分かる程正確な物だった。この世界にある、大陸の形、それは砂時計を真ん中で切り、少し放した位置に置き、間にドングリを置いたような形だ。だが、その見た目はパツと見の、一目見ただけのものだ、よく見れば、大陸の端の凹凸や、曲がりくねった川、それらが合流して大きな一本になる場所や、大小の島々、ヒマラヤの様な大きな山脈、各都市、町、村の位置まで書き込まれている。

「この俺の力をもつてすれば、こんなもんよ」

「・・・おお」

「反応薄っ！！」

「いや、驚きすぎてね、イマイチ反応が出せないんだよ」

「そう・・・か？それなら、まあ・・・いいんだが」

「いやいや、凄いなー、スゴイスゴイ」

「そこはかとなくム力つくんだが」

「それはまあ置いといて、この薄い色で色分けされてるのは何？」

「大体の人口分布、いや生物分布だ、赤なら人族、黄なら獣人族、緑は妖精族、青は魔族だ」

「ふーん……この斜線の部分は？」

「俺が【支配】できてない所だ」

斜線の部分はいくつかあった。鉱山の近くの町、あるいは森の中、あとは大陸と大陸の間にある大きな島。

「この、鉱山の近くにある町と、森の中に居るのは何か大体分かるけど、この大きな島に居るのは何？」

このファンタジーな世界で鉱山の近くに居ると言ったら、『土の民』ドワーフ以外にあるまい。森の中に居ると言ったら、『森の民』エルフ以外にあるまい。

「ドラゴンだよ」

「え？」

「ドラゴンだよ、ドラゴン、トカゲみたいで、火を吐くアレだよ」

こんな形で、ドラゴンの事を聞くとは思ってもいなかった。ファンタジーには欠かせない『世界最強』『王の中の王』、勇者に倒されたり、ラスボスだったり、勇者の友だったり、話を盛り上げる要員としては欠かせない、あのドラゴンだ。

「やっぱ、エルフとか、ドワーフとか、ドラゴンって物凄い長命らしいのよな、それだけ『個』も強いって事だ」

「なるほど、それで【支配】率70%なのか」

「そうだ、俺が見つかってない奴がいるかもしれないって言ったのは、そういう【支配】しきれていないところに誰がいる可能性がまだ残ってるからな」

「入れないの？」

「ん？」

「【支配】出来なくても、その町だとか、里だとかに、入ることぐらい出来ないの？」

「それが何故か出来ないんだよ、何故って言うほどでもないか、多分そういう所には、強力な結界みたいなのがあって、外敵を自動的に排除でもしてるんだらうよ」

「その何かで入ろうとしたら弾かれる、と」

「そう言う事だらうな」

「話がそれだな、元に戻すか」

「それ俺のセリフ……まあいいさ、戻そう」

「他の皆は？」

「そうだな、手始めに櫻井、カオルちゃんから言おうか」

「カオルちゃん元気？」

「ああ、元気だ、そして可愛い」

「よかった」

「カオルちゃんは今、温泉の街、オロン、この地図で言うと、王都から北に二つ目の街だな、そこに居る、影山と一緒に」

「なんで？」

「どうもそこで偶然会ったらしい」

「そういえば、影山君って北に向かって旅してたわけ？『賢者』に会いに、そのオロンって街に、カオルちゃんはずっと居たの？」

「いや、カオルちゃんも王都に向けての旅の途中だったって」

「カオルちゃん一人で旅してた訳じゃないよね、今までの期間中襲われることも無く無事だったってことは」

「お、鋭いな、カオルちゃんは、この世界に迷い込んだ時に拾われた人と一緒に旅をしている」

「優しい人もいたもんだね」

「全くだ、悪い人がカオルちゃんなんか見たら真っ先に襲うからな」

「その優しい人ってどんな人？」

「『賢者』だ、どうも『森の賢者』と呼ばれているらしいおじいさんと、獣人族の女の子、それと一角兎って言う魔物、あ、魔物は旅の途中で拾ったから違うか」

「『賢者』！？影山君が探しに言った人！？」

「そうだな、これで影山の目標は一応達成されたわけだ、んでそこで俺の第一回緊急クラス会議が入った訳だ」

「なんかえらくあっさりしてない？それに一応って何？」

「影山の『賢者』に会うつっていう目標は達成された、だがその先の帰る方法を見つけるという目標は達成されなかったって事だ」

「なるほど、じゃあこれから影山君はどうすんの？」

「世界を回ってみる、だと」

「ふーん」

「そっちにある、図書館に勇者の日記に何か載ってるかもしれないから見てくれ、だと」

「その情報は？」

「これも『賢者』だ、カオルちゃんもそれを見るために王都に向か
つてたんだと」

「そうなんだ、じゃあ時間が在れば図書館に言って探してみるよ」

「それと、カオルちゃんは王都にある学校に入るらしい、なにも図
書館には学生にしか入れないところがあるだとか」

「カオルちゃん学校に入るの！？なんて学校？」

「それ位、簡単に予想がつくだろっ」

「全然」

「お前ワザとだろ？」

「いや？」

「お前が、姫様と行く学校だよ」

第39話『第一回緊急クラス会議』（後書き）

早く他のクラスメイト出したい。

第40話『温泉の街 オロン』（前書き）

遅くなつてすみません。毎回言っているような気が……

第40話『温泉の街 オロン』

「うわぁー!!」

「・・・やっぱり臭いわね」

「久しぶりの温泉じゃ、まったりするかのう」

僕達は今、『温泉の街』、オロンの防壁の門の前の馬車や観光客の行列のただ中に居る。

「それにしても、凄い行列だね」

「ここは何時もこんなもんよ」

「そうなの？」

「そうじゃ、この街は昔、百年前までは小さな村じゃったんじやが、村を通りかかった時に勇者サトーが『いい加減に、風呂に入りたい!! チクシヨー!! 掘ってやる!! 温泉出るまで掘ってやる!!』と、言って、気が狂ったように穴を掘り始めたんじや」

「それで、温泉が出たんだ」

「結果的には、じゃが」

「？」

「掘り始めたのは良いモノの、なかなか出なかったのじゃ、ソレで途中から自棄になって『裏側に突き抜けるまで掘ってやる!!』と、言って、深く深く掘って行ったのじゃ、そしてその狂気に囚われた

様な勇者サトーの姿を一目見ようと観光客が集まって来たのが、この街の発展の礎^{いしづえ}じゃ」

「なんか嫌な発展のしかた!!」

「そうじゃろう、それに温泉が出たのも地底の神がむやみに穴を掘りまくる勇者に呆れて、勇者の掘っていた穴に温泉を繋げたから、だったからのう」

「カツコ悪!!」

「しかも二か月もかかったんじゃ、そのおかげで『泥んこ勇者』とか『スコップ勇者』とか『穴掘り勇者』とか言われておったのう」
「ホント、何やってんの!？」

オロンの街には、門が東西南北に一つずつある。その内の北門の前に僕たちは居る。

周りを見回した僕は、もう一つ列があることに気付いた。

「あっちの列は？」

クルトン（まだ僕はコレを名前だと認めていない）を抱いているフエリシアに聞いた。クルトンは撫でられて気持ちよさそうにしてい

る。

「キユイ」

「ふふ、柔らかい・・・アレの事？」

「次抱かしてね・・・そう、アレ」

「アッチは人用の門に並んでいる人たちよ」

「人用？門って一つだけじゃないの？」

「人用と馬車用、合わせて一つとして数えるの、あっちの行列はその人用の門に続く行列よ」

「人用と馬車用ってどう違うの？」

「昔は、通る時の税率の違いとかあったらしいけど、今は個人の所得によって税率が変わるから、そういうのは無くなったわ」

「つまり？」

「大きさだけ、でも、荷物審査はするわよ？違法なものが持ち込まれていないか？とか、これは盗品じゃないか？とかね」

「そうなんだ・・・あっ！！」

「どうしたの」

「どうしよう！？」

「落ち着いて、何が、『どうしよう』なの？」

「クルトン！！魔物でしょ？」

「キユ？」

そう、クルトンは魔物なのだ。クルトンは可愛くて、もふもふで、大人しい。だが、本来魔物は人に害を与える、そういう存在なのだ。そんな危険（クルトンは除く）なものが、街に入れるとも思えない。

「そういえば、そうだったわね」

「そう！だから、どうしたらいいんだろう！？」

「どうしたんじゃ？」

「なんか、クルトンが魔物で、魔物はいれないかもしれない！」

「そうじゃのう」

「です！！」

「今ので分かったんだ、ゼイスさん」

「アレが使えるかもしれんのう」

「アレってなんですか！？」

「＜契約＞じゃ」

「それは、使い魔契約とか、そういうの？」

「・・・ホント、カオルってそういう事だけ勘が良いわね」

「そうじゃのう、と言っても＜契約＞していることにするだけじゃから、別に心配する必要もないわい」

「そんな事で通れるの？」

「なーに、心配するな、ちゃんと通れるわい」

「ええーーーーー？」

結果から言うと、通れてしまった。

「それは？」

「使い魔じゃ」

「嘘を吐くな」

「使い魔じゃ」

「何だお前は？」

「ほう、儂を知らないのかのう？」

「知らない」

「そうか、残念じゃのう・・・のう？隊長殿」

「隊長？・・・ああ、隊長、このお爺さんがこの魔物を使い魔だと言つて門を通ろうとするんですよ・・・隊長？」

「も、ももつ、申し訳ありませんでしたー！ー！ー！」

「隊長！？」

「ほらお前も頭を下げろ、バカア！！・・・この方がどんなお方が分からのか馬鹿物おー！」

「ほつほつほつ、いいんじゃよ別に儂も無理を言ったことだし」

「そんなっ！？」

「後ろもつかえている事じゃし、もう通つても良いかの？」

「どうぞどうぞー！」

「いや、すまんのう」

「いえいえいえ！ー！楽しんで行つてくださいー！」

とまあ、こんな感じだった。ゼイスさんスゴすぎる、さすが勇者パーティーに居た魔法使いだけあるな。

今はそれは置いて・・・

「入ったはいけどこれからどうするの？」

「そうじゃのう、とりあえず宿をとるかのう」

「じゃあ、宿をとったら街を見て回ろう、カオル！！」

「うん、楽しみ！！」

広場の近く（地図を門のところで見つていたので分かった）に差し掛かった時それは起こった。いや、正確には聞こえた、と言った方が正しいだろう。

それは、くぐもった爆発音。僕にとっては、三か月半ぶりに聞く音。

「なに？花火？」

フェリシアが言う。

「違うようじゃのう」

ゼイスさんの言うとおりだ。次に続くのは悲鳴、何か大きなものが落ちる音。

これはやつぱり・・・

そして、その広場が見える場所に着く。広場の真ん中には噴水がある。

僕の視線の先には、僕の予想通りの人物が、数人の武装した男と対峙している、その周りには大量に人が倒れている、そしてそれを物陰に隠れ遠巻きに見ている野次馬達。

「カオル大丈夫よ、私がちゃんと守るからね」

「え、いや、そうじゃないんだよ」

「・・・？」

「・・・おーい！！」

「え、ちよつと何してんのカオル！！あんなの絶対危ない奴に決まってるじゃない！！」

ざわり、と空気が動くのを感じた。大勢の人の視線がこちらに突き刺さる。

「……しまった」

「ほら見なさい！！こういう事になるのよ、もう！！降りないといけないじゃない！！」

「分かった、降りる」

馬車の扉を開け、馬車から降りる。フェリシアも慌てて降りてくる。

「え、ちよつ、ちよつと待つてよ！！」

「大丈夫だよ、それに魔法もあるんだし」

「本当に？何か危ないことがあったら、すぐに逃げるからね」
「うん」

僕は喧噪の真ん中に居る人物のもとへと歩き出す。フェリシアは少しビクビクしている。

「大丈夫？フェリシア」

「大丈夫な訳ないじゃない！！こんなに大勢の人に見られる事なんて滅多にないんだから！！」

「そうなの？僕はよくあるんだけどなあ、何でだと思う？」

「それは力オルが……！！もういいわよ、教えてあげない」

「フェリシアのいじわる!!」

そんなこんなで、目的の人物（どれだけ引つ張るんだ、とさすがに自分も思ってきた）のところに着いた。

「久しぶり〜」

「おう、久しぶりだな、カオル・・・っていうか何でここに居る？」

「それはこっちのセリフだよ」

「俺か？俺は光賀と一と一緒にく召喚ニフシタされたからだ、カオルは？」

「僕は、車にはねられて気が付いたら、ここに居たって感じ、正確に言うならこの子に拾われてベッドに居た、けどね」

「そうか・・・」

そんな会話を遮って、誰かが雄叫びを上げた。その『誰か』は当然僕達ではない、そもそも、遮ったのは僕達の方なのだから。

「うおおおおああああつ!!」

「一瞬、待っててくれ、すぐに終わらせる」

「うん」

言っが早いか、すぐさま爆発音が鳴り響く。まさに一瞬、その一瞬で起こる様々な出来事、人が飛び、剣が飛び、地面が捲れ、穴が開く。まさに爆発。

「ちよつとカオル」

「ん、何？」

「あいつは一体なんなのよ!？」

「僕のクラスメイト兼師匠」

「はあっ!？」

「言ってなかったっけ？僕に護身術を覚えてくれた内の一人だよ」

「な、名前は？」

「影山 影鷹、凄く強いでしょ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589s/>

僕達の異世界生活

2011年11月24日19時00分発行